
“龍”とIS

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“龍”とIS

【Nコード】

N8102T

【作者名】

大喰らいの牙

【あらすじ】

少年は、ある時から『龍』と話すことができ、『龍』を呼び出し戦う力があつた・・・がその力のせいで家族を亡くした。しかし、皮肉にも家族を亡くした時に新たな力を手に入れていた・・・。月日が経ち少年は青年になり、その間も色々な出来事があり、力の発覚を恐れ、一人でひっそりと暮らしていたらいきなり「神」と名乗る者に逢い力を貸して欲しいと言われ、承諾し青年は“IS”と呼ばれる兵器が活躍する世界に降り立った・・・。

【追記】 12/2 13:06現在
タイトルを変えました。

“龍”とISに変更しました。

神サマ(前書き)

やっちゃまった、つい欲望に耐えきらずやっちゃった。

キーワードですが、入りきれなかったのでこっちに書きます。

ほとんど、設定や技、名前のみです。

BLAZBLUE MHP2nd, 3rdの武器、モンスター*

FFの召喚獣、武器*ぐらいかな。

思ったより少な!! まあ、物語が進んだら、増えるかもしれません。

神サマ

俺の名は天龍覇 皇牙《てんりゅうは こうが》 20歳だ。多分・
・20歳から年を取った感覚がない為、よくわからん・・

家族が死んだ・いや、殺されてから15年が経ち特殊な力を持ち、
それから、色々とあり今はひっそりと暮らしていたとき、いきなり
光が俺を襲った。

ここはどこだ？

辺りは真っ白い世界だった。見渡す限り白で埋め尽くされていた。
さて、どうしようか。と思っていた時、後ろから声を掛けられた。

???'「こんにちは」

皇牙「うおっ!!だれだ・・・?」

振りかえると母性溢れる女性が立っていた。

神サマ（後書き）

他のIS小説読んでいたら書きたくなっちゃった。。。）H A H
A H A ! !

この小説はガチでオリ主がチートになっておりますので自重？何それ、おいしいの？

ぶっちゃけると、妄想 小説書く オリ主誕生こんな感じですよ。
あ、キャラ設定はあともう一話投稿したら、書きます。

転生（前書き）

イエイ！

二話目です。まだ、ISの世界にはいきません。
次回になります。

転生

????「私は神よ。」

皇牙「……………は？」

女神「正確には女神ね。」

皇牙「……………(超疑いの目)」

女神「あー!!信じてないでしょ!!」

皇牙「イエ、ソナナコトオモツテイマセンヨ?」

だって、いきなり神と言われて信じろという方が無理だろ。

そんなこと思っていたのが分かってしまったのか、女神はいじけてしまった。

女神「……………ふん、もういいよ。(イジイジ)」

皇牙「スマン、なんかこう、神サマが逢ってくるとは思わなかったからつい……………」

女神「ま、そうだよね。信じろという方が無理かな。」

気を取り戻してくれたようだ。

皇牙「で、俺を呼んだ理由は?」

女神「あ、そうだったね。呼んだ理由は……………キミに新たな人生をあげます。」

……………思考停止中

皇牙「いや、俺、今生きていますけど……………」

女神「うん、知ってるよ?だけど、そんな人生で楽しいの?」

皇牙「つー!!」

女神「私は、あなたの全てを知っているは、そう全て(……………)をね。」

皇牙「……で、理由は？」

女神「アナタの人生は過酷過ぎる、ヒトには“喜怒哀楽”というものがああるけど、あなたには“怒哀”しかない。だからこそ、新たな世界に行けば、“喜楽”が取り戻せると思うの。それが理由よ。」

皇牙「……」

皇牙「……わかった。その提案有難く乗らせてもらう。」

女神「そう……よかった。で行く世界なただけど、“IS”と呼ばれている兵器が活躍している世界よ。」

皇牙「“IS”？何それ？」

女神「正式名称は“Infinites Stratios”女性にしか動かせない兵器なんだって。」

皇牙「ふーん……ん？じゃ、俺無理じゃん。男だし。」

女神「そこら辺は、神の特権を使って、君にも使えるようにするよ。」

神「ってスゲー……」

女神「さて、あちらに行く前にアナタ専用の“IS”といくつかの願いを叶えるわ。好きなだけ言いなさい、叶えてあげるわ。」
と豪語されたので、遠慮なしに言った。

皇牙「まず、龍達は必ず連れていくこと、あと武器も。」

女神「わかったわ、ただし、龍の姿を見たら驚くから、あなたの躰の中を棲家にします。武器は“IS”の“後付装備”に入れておきます。」

皇牙「次は“IS”だな。」

女神「ええ、どんな感じにする？」

皇牙「『BLAZBLUE』の『ラグナ・ザ・ブラッドエッジ』と『ハザマ』が持つ“蒼（碧）の魔導書”『プレイブルー』で両方起動出来て、状況によって変えられる、変動型タイプにしたい。『イ

デア機関』なら“蒼の魔導書”を『コードS・O・L』なら“碧の魔導書”これらは二次移行にしたい。そして、単一能力は『ドライブ』だ。」

女神「つまり、『ソウルイーター』と『ウロボロス』ね。」

皇牙「ああ、そうだ、展開するときには『ブレイブルー』、起動』で頼む。」

女神「はいはい。基本装備どうするの？」

皇牙「二本のバタフライナイフとブラッドエッジで、あと二人の必殺技とDDとAHも頼む。」

女神「どちらかの魔導書を発動した時は、持っている方の技と武器しか使えなくなる代わりに威力や耐性面を上げといたわ。」

皇牙「助かる。機体の色は？」

女神「一次は決まっていらないが、二次は起動時の魔導書の色に合せたわ。」

皇牙「一次を忘れていたな。色は白と黒と赤で、どちらの技も使えるが、本来よりも少し弱めにしてくれ。あと、俺の持つ本来の力はどの状態でも使えるが、『憑依』だけは一次のみで。こんなものか。」

女神「ISの要望が凄かったけど、生活面などはいいの？」

皇牙「そちらに任せる。」

女神「わかったわ、では・・・天龍覇 皇牙。あなたに新たな生を与えます。新たな世界で違う生き方を目指しなさい。」
と言った後、意識が遠のいた。

転生（後書き）

まだ、能力がありますが、今回はここまで。

キャラ設定（前書き）

設定です。

キャラ設定

主人公

名前 天龍覇 皇牙 《てんりゅうは こうが》

年 肉体年齢は二十歳（？）だが精神年齢は軽く2000を超えている。

身長 175cm

誕生日 4月29日

容姿はラグナに近いが目がオッドアイではなく、ゴールド。

私服は基本的にハザマのようなスーツかラグナの来ている服を着用。

性格

Fateのランサーみたいな性格だが、戦闘好きではない。

世間を利用したり、地位を利用する者が嫌い。

友人などを傷つける相手には容赦がなく非情、特に人を道具扱いする奴や非人道的な研究をする相手に対しては手加減という選択肢がなく、『殺す』という一点のみの思考になる。

設定

自分の持っている力のせいで、家族と恋人を失う。

家族を失ったときに『龍』の力が覚醒する。以降、旅をしながら龍を保護、または友人になる。保護した龍の力を借りて戦ったりしていた。見た目によらず力持ち。大剣を片手で持てる。そのためか、二刀流（大剣）で闘うことが多い。そして、本来の使い方をせず、

無茶苦茶な使い方をする。

「龍化」

文字通り龍になる。ただし、丸ごとではなく一部のみ体を龍になる。腕や足だけ変化させて戦う。

完全に龍になることも出来るが、その変り理性が飛ぶ。

肉体年齢が曖昧なのは「龍化」すると、普通の人より年を取るのが遅くなる。一年に一度年を取るのが二年や三年とズレていく。ただし、肉体はそのまま成長する。

しかし、「龍化」しすぎると、肉体の成長が止まってしまう。

しかも、体の性質が変わっている為、人間が死ぬような要因では絶対に死なず、治癒力が高い為傷を負っても、2、30分で治る。

主人公今この状態である。ある意味、不老不死に近い存在。

力を貸す龍（ほとんどモンハン飛竜・古龍種、一部FF召喚獣あり）

飛竜種

ジンオウガ

リオレウス希少種

リオレイア希少種

ティガレックス亜種

ディアブロス亜種

ナルガクルガ亜種

グラビモス亜種

アカムトルム

ウカムルバス

古龍種

クシャルダオラ

テオ・テスカトル

ナナ・テスカトリ
ラオシヤンロン
ミラボレアス
ミラバルカン
ミラルーツ
アマツマガツチ
アルバトリオン

FF召喚獣

バハムート

リヴァイヤサン

武器

FF召喚獣を除くモンスターから派生出来る武器全て。
ただし、武器は大剣、太刀、双剣、ランス、ガンランス、スラッシ
ユアックス、ライトボウガン、ヘビィボウガン、弓のみ。
打撃系はなしの方向で。

実銃

レッド9、リボルバー、マグナム、ライオットやドラゲノフなどの
銃を好む。

キャラ設定（後書き）

まだあるんですけど、話し過ぎると、楽しみがなくなってしまうのでここまでとします。

次回はISの製作者と逢います。
原作開始はマダダヨ!!!

稀代の天才（前書き）

前回、古龍種の中にオオナズチが入っていませんでした。

・・・いつも姿消しているから、こついうときに忘れられるんだよ

！！（笑）

稀代の天才

神（正確には女神）との邂逅が終わり、ISの世界に来たまでは良いんだが、何故、俺は落下しているんだ？

いきなり目が覚めたら、空の上に居た。そこから、地上に着くまで自問自答していたのである。

と考えていくうちに建物の天井に激突した。

皇牙「ぐおおおお！？」

と悶絶していた。

普通の人間なら致命傷だが、生憎自分が人間ではないことが嬉しいのか悲しいのか微妙な気持ちだったが、生きていることに感謝するべきと思いきそれから、考えることを止めた。

????「天井から、人が降ってくるなんて・・・初めての経験だね！で、落ちてきた君はだれ？」

なんか妙にテンションの高い声で訪ねてきた。

皇牙「まず、人の名前を聞く前に自分から名乗れよ。」

????「おおお！そうだったね。私がISの製作者の束だよ。」

皇牙「（ふーん・・・この人がISを制作者か）俺の名前は天龍覇

皇牙だ。よろしくな」

束「むむ！！じゃ、こーくんだね」

皇牙「こーくん？」

いきなり、とんでもない呼ばれ方をしたので聞き返してしまった。

束「そ、こーくん。皇牙の皇から呼ぶことにしたの。」

皇牙「ま、いいけどよ。じゃ、俺は束って呼ぶぞ？」

束「うん、いいよ」

と自己紹介を終わった。

そのあと、色々と聞かれた。「何故、空から落ちてきたのか」「や」「ISをなんで持っているのか」と最初は企業秘密と言って、はぐらしていたが、あまりにもしつこく聞いてきたのでめんどくさくなつて、全部バラした。

自分が転生者であること。

人間ではないこと。

などなどとバラして言った。

最初は笑い飛ばしていたが、実際にその証明を見せた瞬間顔が変わり真剣な顔つきになった。

皇牙「・・・という感じだ。」

束「いやいや、神サマなんて有象無象の存在だと思っただけだよね。実際に居るとは。」

皇牙「ああ、俺も信じられなかったが、居るもんはしょうがないと割り切ったぞ。じゃ、こつちの質問にいいか？」

束「うん、ど〜んと聞きなさい？」

皇牙「世界の情勢を聞きたいんだが・・・」

と言った後、束は簡単に言った。

〜説明中〜

束「・・・こんなもんだよ。ふい〜・・・たくさん喋つてのど乾いた〜飲み物ある〜？」

ぐでーとした姿で聞いてきた。

皇牙「持ち合わせていたっけな？・・・コーヒーとお茶どっちがいい？」

束「コーヒー」

皇牙「はいよ」

ゴクゴクゴク・・・

皇牙「んじゃ、東、アンタとしばらく一緒に世界を見て回って
もいいか？」

東「いいよ、よろしくね？こーくん」

皇牙「うい」

と返事をし、一年過ごしていった。

原作開始まであと二年

稀代の天才（後書き）

今回、短ッ！！

ホントにみじか！！

少女（前書き）

今回はちょっとグロいです。ムジミで

少女

こちらの世界に来て一年が過ぎ、その間、自身のISを練習しスムーズに動けるようになった。そのあと、東の依頼で非公開の研究所などを潰しながら過ごしていった。

とある日……

東「こーくん、また潰して欲しい研究所があるんだけど……」

皇牙「あー？またかよ……この前も潰したはずだぞ。」

東「今回はちよつとね。」

なんとも含みのある言い方をしていた。

大抵、こんな言い方するときは碌な事がなかった。

研究所を潰した後、不正規の自衛隊やマフィアに追われることが多かった。

潰した後のことを考えながら、詳細を聞いた。

皇牙「場所は？」

東「ん、ドイツ。国境線近くの研究所」

皇牙「わかった。往ってくる。」

皇牙は常に移動するときにはISを展開している。

『憑依』の能力で軍隊にバレずに進入できるからだ。

古龍 オオナズチ

こいつはカメレオンが擬態するように自分の姿を消すことが出来る力があるため、こいつを装着することでなんなくいくつの国を出たり入ったりしていた。

今回もこの方法でいった。

皇牙「さて、地図に載っている研究所はここらへんだが・・・あったな。」

近くに降り立った、皇牙はISを解き、音も無く侵入した。

侵入した研究所は今まで潰してきた研究所と変わらなかったため、研究員たちを見つけて、脅して逃げてもらうつもりだった。

皇牙は研究所を潰すのが目的であって、人を殺すことではない為脅して研究が出来ないようにデータを潰し、研究員を逃がしていたのがいつもの方法だった。

だが、次のフロアに行くことでその考えは一気に消し飛んだ。

皇牙「！！」

そのフロアは実験場フロアのだろうか開発中のISが置いていたがそれが問題ではなかった。奥にある、ある山積みのモノが原因だった。

山積みになっていたのは少女たちの死体だった。

ISの適性を生みだす為に連れてこられた少女たちが無残にも其処等じゆうに転がっていた。

最初見たときは暗くよく見えなかったが、眼が慣れてきたにつれ下は目も当てられなかった。

腕が片方無くなっていた者、頭が吹き飛んでいた者、下半身がない者と残虐非道な人体実験が繰り返されていたのが目に浮かぶと同時に皇牙の中でナニカが飛びそうだった瞬間、突然後ろからズボンをよくいっと引っ張られた。

皇牙「！？」

そこには10歳ぐらいの女の子が立っていた。

「???」「ねえ、お兄さん。何やってんの?」

皇牙「ん? ああ、ちよつと調べ物をね。」

「???」「お兄さん、この研究員じゃないよね?」

皇牙「・・・わかるのか?」

「???」「うん。一応この研究員の顔は覚えているから。」

皇牙「そうか・・・なあ、名前は?」

「???」「ない。」

皇牙「ないのか?」

「???」「うん。ない。あるとしたら、NO・13って呼ばれてた。

お兄さんの名前は?」

皇牙「あ、俺? 俺の名は天龍覇 皇牙っていうんだ。」

NO・13「て、てんり・・・てんりい・・・」

皇牙「難しいからな。皇牙でいいぞ。それに名字で呼ばれるのはあまり好きじゃないんだ。」

NO・13「コウガは何するの?」

といった少女が言った後、皇牙は自分の中にいるある龍を呼び出す準備をしながら、言った。

皇牙「ここを潰す。まあ、君が安全な場所まで連れていったあとでね。」

といい、皇牙は少女を連れて一度研究所を出て、近くの森まで行き無人の小屋を発見し其処に隠した。

保険として、服に発信器をつけて・・・

皇牙「ちよつと、出かけてくるから、ここに居てくれる? すぐに戻るよ。」

NO・13「うん。」

少女を小屋に隠したあと、高速で研究所に戻った。

研究所は騒がしかった。彼女が逃げたことに気付いたのだろう。

門まで来ると、皇牙をカメラ越しで見た研究員の一人が警備の者に

伝えた。

研究員A「あ、アイツです。監視カメラに写っていました。」
警備員A「なに！？全員持ち場に付け！！其処の男動くな！！ここは立ち入り禁止区域なのが見えずに侵入してこの研究所から何を盗んだ！！」

と叫びながら、警備の者たちは皇牙を取り囲んでいった。

皇牙「まあ、聞いてくれよ。俺の要件は一つ。辞世の句は決まったか！！」

と言った瞬間、七人で囲んでいたのが一気に二人まで減っていた。囲んでいた者たちは何が起こったのかが分からなかったが一つだけ理解できた。

殺さなきゃ殺されるという恐怖のみ。

二人は手に持っていたマシンガンで手当たり次第撃ちまくった。

皇牙はISを起動した。

(ブレイブルー、起動)

ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダ！！

キンキンキンキン！！

人に当たるには甲高い音だった。

煙が晴れたらときには一つのISがいた。

どこまでも暗い黒とまるで業火の如くの禍々しい紅になにも寄せ付けないほどの白がモデルのISが立っていた。

起動した皇牙何か呟いた。

皇牙「ブラックテンペスト」

掴んだランスを生きている警備員に投げつけた。

グサツ！グシュ！グチャ！ブス！！

と不快な音がなんとも響いた。

七人は絶命した。

絶命したのを見た、皇牙は無言で研究所に入って行った。
その後、研究所の中では悲鳴や何かの砕く音、貫く音が何度も響き渡った。

そして、少女と出逢った実験フロアにはISが三機ほど待っており、その後ろには他の研究員よりも豪華な服を着ていた。

所長「ようこそ、侵入者くん。私はここの所長だ。」

皇牙「・・・死ぬ」

所長「おいおい、いきなりかい？しかし、ISは女しか動かせないはずなんだが、男が動かせるということはキミは特別なのかな？ああ、実に研究したい！！・・・捕えなさい。」

という言葉聞いて、三機のISは皇牙を捕縛しようとしてきた。

皇牙「邪魔だ！！どけ！！」ブン！！

左手に【ブラックミラブレイド】、右手に【ミアンセスシア】を持ち三機の内の一つに斬りかかろうとした瞬間ISを操っているのが少女だと気付き、殺すから助けるに変えようとしたとき、男から声が掛かった。

所長「もしかして、コイツラを助けようとしてんの？ハッ！甘いね。コイツラがISを解いた瞬間爆発するようになってるんだよ！！だから、助けようなんて無駄無駄無駄あー！！」

皇牙「テメエ、彼女たちを何だと思っ居やがる！！」

ガン！！キーン！キーン！！

所長「ただの“道具”だろ？道具に感情はいらなんだよ。」
それを聞いた瞬間、皇牙のナニカが飛んだ。

同時に何か得体のしれないモノが皇牙の周りを漂い始めた。

魅せてやるよ蒼の力を！

恐怖はねえよ

あるのは死だけだ

これが蒼の力だ・・・」

ブラッドエッジが鎌に変形し、エネルギーを吸収しながら斬りつけまくった。そして、最後に吸収したエネルギーを力に変え、馬鹿デカイ大剣となり、三人纏めて、真つ二つにした。

そのあと、三機は爆発し、跡形も無く吹き飛び、男一人となった。

所長「アハ・ハハ・ハハハハハハハハ！！！」

目の前の得体のしれない力と死の恐怖で精神が壊れて、嗤うことしかできなくなっていた。

だが、その声でさえ今の皇牙は不快に感じていた為、黙らせるためにまず、喉を潰した。次に腕を、脚を、指を生きるのに必要な部分を避け、折れるところを全て叩き折った。必死にヤメテクレと男が叫んでも、無視しながら。

もう人間かどうか分からなかった。

皇牙「・・・帰るか。」

人間もどきを柱に括りつけ、天井を剥がし、空を見えるようにした。

これから起きることに恐怖を覚えさせるために・・・

研究所を出て、森の近くまで来たら、最後の仕上げをした。

皇牙「（ミラバルカン、奴がいる以外のところに火炎岩を落とせ。）

皇牙「……なんでだろうな。あの日以来、泣くことなんてなかったのに……」
と涙を流しながら、呟いた。
そのあと、少女を抱えながら、家に帰った。

少女（後書き）

あれ？なんでこんなに長くなった？

少女と出逢い、研究所を潰すだけなのにどうしてこうなった・・・

あ、本編中に出てきたミラバルやアルバたちは周りに人がいないときになにか顕現できませんのでポンポンと出てくるわけではありませんん。

名前(前書き)

教官に逢えんかった・・・orz
次、逢います。

名前

研究所から帰ったあと、束に連れて帰った少女のことやなにが会ったのかを話した。

束「ふうん、そんなことが遭ったんだ。まったくどこも躍起になり過ぎて人の道を外れるなんて同じ科学者として最低だね。それを潰す、こーくんは“正義の味方”かな？」

皇牙「“正義の味方”ねえ・・・似合わないな。俺は、人間をやめた、ナニカさ。」

などと掛けあっていたが、束が思ったことを聞いてきた。

束「ねえ、こーくん？」

皇牙「あー？」

束「この子の名前は？」

皇牙「あー・・・考えてなかったな。」

素で忘れていた。やつちゃった。

束「じゃ、私が勝手に決めちゃうよ？名字はこーくんと同じ天龍覇で。」

皇牙「いきなり、なに言いやがる。」

束「だって、私の名字を名乗ったら、拉致監禁されちゃうからそれだったら知らない名前の方が安全じゃん？」

皇牙「まあ、確かに・・・。」

いや、納得してどうするよ。俺。

皇牙「とりあえず、この子の意見も聞こうぜ。で、どうだ？」

NO・13「わたし、お兄さんの名字がいい！」

orz・・・

NO・13「それとも名乗っちゃダメなの？」

と目に涙を浮かべながら、呟いた。

正直、泣く子に勝てません。マジで。

皇牙「・・・ハア、いいよ。」

NO・13「やったー!!」

皇牙「じゃ、下は俺が決めるぞ?・・・霞なんてどうだ?」

NO・13「かすみ・・・うん、それがいい!!」

と名前を付けてもらったのが嬉しいのかはしゃいでいた。

皇牙「んじゃ、ま。よろしくな。霞」

霞「うん!よろしく、皇牙お兄ちゃん。東お姉ちゃん。」

東「うん、よろしくね」

それから、三人での生活が始まった。

名前（後書き）

少女の名前が決まりました。

名前で分かるかもしれないませんが、モデルは真・恋姫無双の張遼です。

張遼を10歳児にしたかんじです。

だって、かわいいんだもん・・・

再びドイツに・・・（前書き）

ようやく、千冬までいった。アー長い
あ、一部のセリフにハザマインストールされています。

再びドイツに・・・

半年後・・・

皇牙は霞に生活で必要なことを身に着けさせた。なぜなら、束がどうしようもないからである。

研究に没頭して、食事を取らないことやジャンクフードで済ましたりしてるから料理や洗濯など覚えさせた。ある程度覚えたのを機に言いたかったことがあった。

皇牙「束。俺、世界を見て回りたいんだけど・・・」

束「うん、いいよ」

皇牙「答えんのはやっ!!」

いちいち驚いてたことが慣れるって怖いな。

あー、あの頃が懐かしい・・・

と耽っていたが、どうでもいいんだよ。そんなことは。

皇牙「霞ー?」

霞「なにー? 皇牙お兄ちゃん。」

皇牙「俺、旅してくるわー。その間、束のこと頼むな。」

霞「わかったー。いつてらしゃい。」

皇牙「おう。あ、束ー。俺のISに基本装備に銃火器を二つほど作つといてくんない? さすがに、近距離装備だけではちよいとキツイわ。」

束「ういゝ。なんか要望ある?」

皇牙「レッド9とライオットを頼む。ついでに拡張領域も増やしといて。」

と言って、世界を旅することになった。

移動はISを使うと、色々と問題が起きてメンドイから龍化しながら世界を回った。

旅というより観光に近かった。

だが、何故か行く国々で問題を起こしてしまう旅だった。

アメリカ、カナダ、チリ、イギリス、オランダ、ギリシャ、スウェーデン、フランス、中国と行く先々で小競り合いが起きた。何故？基本は龍化の力のみで追い払っていたが、IS起動して追い払いもあり、そのときに“蒼（碧）の魔導書”と言ってしまったため、裏ではいつの間にか賞金首となっていた。

そして、ドイツにも行った。

まず、ドイツに行ったときに最初に窺ったのは、例の研究所の近くの森だった。そこに、簡易な墓があった。

土にはなにも“なにも埋まって”いないが思いを込めて、祈った。

ガサガサ・・・

最初は動物だと思っていたが、それは全く違っていた。

????「貴様、何者だ!!」

と、頭に銃口を突き付けながら問い出された。

皇牙「・・・・・・・・・・・・・・・・」

答えないことに腹がたったのか銃で小突こうとした瞬間、俺は動いた。

ドゴア!!

????「ぐツ!?!」

手首めがけて蹴り上げ、声の持ち主は苦痛で顔歪ませ、不覚にも銃を離してしまった。それを皇牙はキャッチしさっきとは逆の構図になった。

皇牙「形勢逆転だな？」

と思っていたら、後ろから声がした。

????「それはこちらのセリフだ。」

気付いた時には、周りには数十人の女性隊員で囲まれていた。周囲に気を配るのを忘れるとは、アホか、俺は。

その中から、教官と思われる人物が訪ねてきた。

???「貴様を拘束する。抵抗はするな。したら、それ相応の対処をする。」

皇牙「ひとつ聞きたい。抵抗しなければ、命は保証されるか？」

???「・・・貴様次第だ」

いつもなら問答無用で“処理”していたが、こいつは無理と感じて手から銃を離し、そちらに蹴り飛ばした。

???「拘束しろ」

』はっ!』

手を後ろで縛られ、アイマスクを掛けられた。その後、気絶した。

気が付いたら、椅子に座っていた。

???「目が覚めたか。」

皇牙「もうちよい、やさしくできねえのかよ？」

???「侵入者に加減なんてすると思うか？」

デスヨネー。

???「貴様の名と所属を言え。」

皇牙「つたく、アンタらはまず自分から名乗るといふ常識がないのかよ。」

???「侵入者にしてはよく喋るな。まあいい。確かにそちらの言い分も一理ある。」

???「教官!!良いんですか、名乗っても!??」

教官と呼ばれた女性が名乗った。

千冬「私は織斑 千冬だ。今はワケあって、ここの教官をやっている。で、貴様は?」

皇牙「(コイツが束の親友で「ブリュンヒルデ」の称号を持つ女か。

(ああ、俺は天龍覇 皇牙だ。」

千冬「所属は？」

皇牙「企業秘密で」

千冬「そんなモノで罷り通ると思っっているのか？」

デス（ry

と挑発が気に障ったのか、ナイフを抜こうとした時、後ろで待機していた女性隊員の何人かが俺を見て、騒いでいた。

???「おい、静かにしろ!!」

千冬「待て、ラウラ。どうしたお前たち？」

隊員A「教官、そいつ、今噂の賞金首の“蒼（碧）の魔導書”ですよ!!」

千冬「なに？」

ばれたし・・・いや、まあここ軍だしバレるか。

千冬「ほう、貴様があのか“蒼（碧）の魔導書”か。噂はかねがね聞いているよ。」

皇牙「コイツは有難いね。かの「ブリュンヒルデ」のお目にとまるとは。」

ラウラと呼ばれた少女がナイフを抜いてきた。

ラウラ「貴様、教官を侮辱するな!!」

皇牙「今、俺は織斑 千冬と話してんだけど、割り込まないでくれる?それと、ナイフしまえ。」

ラウラ「貴様が黙れ!!」

うるせえなこいつ・・・

皇牙「・・・ハア、キャンキャンうるせえぞ!クソガキ!!言葉づかいに気をつけるや。殺すぞ。」

ラウラ「なっ!!」

いきなり豹変ぶりに全員が驚いた。

俺もこの感じになるのは久しぶりだった。

ラウラ「ハッ!寝言は寝て言え。逆だろ。」

「触即発の雰囲気だったのを収めたのは、千冬だった。
千冬「待て、二人とも。ちょうどいい機会だ。練習場に行くぞ。
蒼（碧）の魔導書」の實力見せてもらおう。ラウラもいいな。」
ラウラ「教官が言うのであれば。」
こうして、戦うハメになりました。・・・かったる。

再びドイツに・・・(後書き)

次、ラウラ戦です。

あっさり終わる予定・・・多分

黒ウサギ部隊（前書き）

あー、ラウラ戦ですが一瞬で終わります。

黒ウサギ部隊

はい、こんにちは。皇牙です。

メンドクサイけど、ドイツのIS特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』こと『黒ウサギ部隊』の隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒと戦うことになりました。

そして、現在、IS練習場입니다。

・・・やっぱり、メンドイ。

と思っていたら、ラウラは専用機を展開した。

『シュヴァルツェア・レーゲン』を展開していた。

ラウラ「貴様も展開しろ。」

皇牙「ガキ相手に必要ないな。」

ラウラ「なに？」

と表情は変えなかったが、明らかに怒っていた。

皇牙「織斑！俺はこのままで充分だ」

千冬「ほう、そういうのであれば、やって魅せる。」

という声から、後ろにいるラウラの仲間たちはある者は笑い、ある者は怒り、ある者は馬鹿にしていた。

(さて、一撃で終わらせたいし、「龍化」で膝から下の部分を変化させて潰すか。)

などと、考えていたらラウラから質問があった。

ラウラ「教官、間違っただけで殺しても、“侵入者の排除”という名目で処理できますよね？」

遠回しに殺すと言ってきた。

そんな言い分通るわk・・・

千冬「・・・ああ。出来るだろうな。」

通りやがった！

ラウラ「倒して”やるよ。“蒼(碧)の魔導書”。」

皇牙「やれるモンならやってみろ、クソガキ。・・・ああ、一つ警告しておいてやるよ。一発だ。」
ラウラ「なに？」

皇牙「一発で気絶させてやるよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。気は抜くなよ？抜いたらそれがお前の最後だ。」
それから、ラウラは一言も喋らなくなった。

皇牙・ラウラ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

千冬「それでは、お互い準備出来たな？それでは始めー！」
と言って、腕を振り降ろすと同時に俺は動き、思いつきラウラの腹めがけて、龍の脚で蹴り飛ばした。

皇牙「（龍化体術 角龍突！！）」
完全に振り降ろした時には、ラウラは壁に激突していた。
ドッゴオーーーーーン！！！！

千冬とその他大勢「は？」
なにが起こったのかが全くわからなかったようだ。

ラウラ「がぁ・・・」
そのままラウラは宣言通り気絶した。

千冬「（なにが起こったというのだ。一瞬でケリが着いただと！！！！）」

私はこの時、この男に『恐怖』というより得体の知らない『ナニカ』が襲った。と同時に警戒心をMAXまで上げた。そして、思った。

コイツを相手にしたら、おそらく勝てない。

皇牙「おーい、織斑！。聞こえているかー？」

あんなモン見せたら警戒心あげるよな。そりゃ。

皇牙「もしもしーしー！」

現実に戻ってきたのかハッ！とした顔になり、次なる指示を出した。千冬「なにしている、クラリツサ！！はやく、ラウラを医務室に運べ！！！」

皇牙「あー、一応手加減しといたし、怪我はさせてないぞ？寝かしといてやりや、気が付くさ。」

とこんなやり取り後、俺は『黒ウサギ部隊』の二ヶ月間だが戦技教官になった。

・・・なんで？

二ヶ月後・・・

どうも、クラリツサです。二ヶ月間、私たち『シュヴァルツェ・ハ―ゼ』は皇牙さんに鍛えられていました。大変でした。

戦いになるとあの人は性格が変わります。少しでも、チームを危険に晒すような技や戦い方をすると、隊長を気絶させた技がすぐさま飛んできます。そういうわけか、最初は犠牲者が多数いましたが次第に減って行きました。はっきり言って、アレは私も喰らいたくありません。

隊長はアレ以来、何度も挑みましたが全て倒されています。生傷が絶えません。

ですが、皇牙さんは戦闘以外は優しいのでなかなか、面白い方でした。

そして、今日、皇牙さんは日本に帰るの事です。寂しいですが旅の途中のだとのことですよ。

隊長は機嫌が悪い為、私が指揮を執りました。

クラリツサ「全体、気をつけ！休め！！！」

皇牙さんは教官と話し合い、というより皇牙さん宛の電話に出てから、最初は驚き、そのあとうなずいていました。

電話にて・・・

【prrrrrr.....】

皇牙「はいはい、誰ですかっつと。」ピ！
「????」もすもす、終日？」

皇牙「何の用だ、束。」

束「こーくん、元気？」

皇牙「元気だ。束に霞も元気か？」

束？「うん。元気だよ。お兄ちゃん!!」

皇牙「おー、霞か、元気そうだな。落ち着いたらまた、電話するか
ら束に代わってくれないか？」

霞「うん。わかった。はい、束お姉ちゃん。」

束「元気でしょ？霞ちゃん。」

皇牙「ああ、で要件は？」

束「そうだったね！こーくん、今ドイツ軍にいるでしょ？」

皇牙「何故わかるんだよ.....」

束「ちーちゃんに代わってもらえる？」

スルーですか。そうですか。

皇牙「おーい、千冬！」

千冬「なんだ、皇牙。」

皇牙「お前に電話。」

千冬「私に？どこのどいつだ.....」

皇牙「多分、吃驚すると思うぞ。」

千冬「もしもし。」

束「ちーちゃん、元気い？」

千冬「.....束か。」

そのあと、束と千冬でなにやら話しあっていたが通話が終わったよ
うだ。

皇牙「で、なんだって？」

千冬「お前は日本に行け、だとか。そこで、IS学園に入学しろ。
のことだ。私も行くがな。お前よりも先に。」

皇牙「日本ね。はいよ。」

千冬「それにしても、お前、東と知り合いだったとはな。」

皇牙「ああ、衝撃的な出会いだっただぜ？」

千冬が睨んできたが嘘は言っていないぞ？ある意味、衝撃的だったな。】

皇牙「さて、まあなんだ。二ヶ月間しかいなかったが、これにて、特別特訓を終了とする！」

形式的だが、こんなカンジいいだろ。

皇牙「ま、縁がありや、また会えるな。」

と言い、ドイツをあとにした。

その後、千冬はIS学園の教師となり、さらに皇牙は千冬の弟の一夏と仲良くなり、一ヶ月後、二ユースで「世界で一人ISを動かせる男の子」と放送された。そして、一夏はIS学園に入学となった。・・・一週間後には俺までもが二ユースに取り上げられてた。

「二番目にISを動かせる男」として

どっしてこうなった・・・

黒ウサギ部隊（後書き）

次回から原作開始じゃー！！

ようやく、原作開始までどんだけかかってんだ俺は。

ま、これは置いといて、技の説明を少々します。

「龍化体術」

文字通り龍化して体術を行うこと。

「角龍突」

解りやすくするとMHP2ndGのG級ディアブロ亜種がキレた時の突進技みたいなもの。スピードはそのときのスピードを三倍速くしたもの。

IS学園（前書き）

原作開始じゃー！！
スマン、セシリアと篤はまだ出ない。

IS学園

（皇牙side）

うい、皇牙です。

一夏がIS学園に入学したとあとすぐに転校生という形で俺も入学するハメになりました。

束のとなでもない会見のせいで・・・

三日前・・・

【織斑 一夏くんはやはりIS学園に入学ってことになるのかねえ。」と、ニユースは一夏のことを持ちきりだった。一夏は今や人気者になった。・・・いろんな意味で。

そのとき、悪夢の放送はやってきた。

「番組の途中ですが、ここで臨時ニユースをお伝えします。ISの創作者である。篠ノ之 束氏からメッセージが届きました。これが、その内容です。」

束「はい 皆さん、こんにちは。篠ノ之 束です。今、世界で唯一ISを動かせる男子は織斑 一夏こといっくんだけだけど、実は、もう一人います！」

これを聞いた瞬間、「あ、これはヤバイ」と悟った。そして同時に当てが外れてくれという祈りが出ましたが・・・

束「その名は天龍覇 皇牙！こーくんだよ」

通じませんでした！！チクショー・・・（；；；#）

束「今、日本に居るから。しかも、IS学園の近くの一軒家に住んでるよ。」

居場所までバラしやがった！！

束「んじゃ、ちーちゃん、よろしくね」【

それからして、怒涛の勢いで政府の連中が来て、「IS学園に行け」やらなんやらでうるさかった。

んで、今、IS学園の門の前に居る。

確か、千冬が迎えに来てくれるとか言っていたが、守衛に話をつけておけとかいつてたな。

皇牙「すみません。ちょっとよろしいですか？」

守衛「はいはい、何かな？」

皇牙「今日から、この学園に通う天龍覇 皇牙と言います。千冬・

・いや、織斑先生を呼んでもらえると有難いのですが・・・」

守衛「ああ、君が二番目に動かせる男子だね。ちょっと待ってね。

今呼ぶから。・・・ええ、来ましたよ。それでは・・・「ガチャ」！。

今来るってさ。そこに立っているのもなんだから、中に入って待っててよ。」

皇牙「有難うございます。」

世話になったら礼を言う。人間として当たり前前行為だ。これが出来ない奴は一変死んでやり直した方がいいな。

ん？お前は人間じゃない？分かってるよそんなこと。

と電波に答えながら待っていたら。千冬が来た。

千冬「久しぶりだな。皇牙。と言っても三カ月ぶりだな。」

皇牙「全くだ。」

千冬「この学園内では私のことは“織斑先生”と呼べ。」

皇牙「出来るだけ努力します。」

と歩きながら、軽く話し合ったとき、一瞬だけ、妙な視線を感じたのでそちらの方を向いたが、誰もいなかった。

千冬「どうした？」

皇牙「いんや、なんでもないさ。」

「????」一瞬殺気を微かに出したんだけど、それを素早く反応して位置まで割り出してくるとは侮れないなあ・・・ふふ、「蒼（碧）の魔導書」の操縦者、天龍覇 皇牙か。楽しみね。」

皇牙「で、俺のクラスはドコ？」

千冬「私が担当する。一年一組だ。私の弟もいる。」

皇牙「一夏もいるのか。」

千冬「ああ、まあ、力になってやってくれ。」

皇牙「はいよ。」

そんなこんなでクラスの前まで来た。

千冬「では、呼ぶまでそこで待っている。」

と入った後、良い音がした。

（皇牙 side end）

（一夏 side）

キツイ、キツイすぎる。ひょんなことからIS学園に入学した俺は今、周りが女子だけ（ここ重要）の空間に居た。いやだって、動物園のパンダみたいに皆見ているんだぜ？他の男から見りゃ、歓喜するかも、いや代わってくれと言うかもしれない。ぜひ代わってやろう。極めつけがクラスの真ん中で最前列なんだ。神サマは俺が憎いのか？そうなのか？と文句を心の中で言っていると、突然呼ばれた。

「????」・・・ん。織斑 一夏くんっ！

一夏「は、はい。聞こえています!!」

と声をかけてきてくれたのは副担任の山田真耶先生だ。（以降、真耶と表記する。By作者）

真耶「あ、あの自己紹介をやってほしんだけど、織斑くんの番だから。や、やってくれるかな？」

と気が付いたら、頭を何度も下げている。年上だと聞いたが同い年に見えてしまう。

一夏「しますんで、頭下げなくていいですから。」
真耶「本当？本当ですか？本当ですね？」
見事なる活用形だ。

やると言ってしまった以上やらなきゃ男子が廃るものものだ。

一夏「え、えーと、織斑 一夏です。よろしく。」

.....

女子ズから『もっと喋ってよ』の視線が集中している。

・・・キツイ。

一夏「以上です。」

としてから、なんとも言いにくい空気が流れた。

とそこに、後ろから「パン！」といきなり叩かれた。

そこには、この叩き方を知っている人物が立っていた。

一夏「げえっ、関羽!？」

パンっ！また、叩かれた。ちなみにマジで痛い。おい、我が姉よ、若干女子が引いてるぞ。

千冬「誰が三国志の英雄か、馬鹿者

諸君、私が織斑 千冬だ。君たち新人を使い物になる操縦者にする
ことが私の仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。逆ら
ってもいいが、私の言うこと聞け。いいな。」

直後、黄色い声が飛んできた。

それを無視して、俺に向かって投げかけた。

千冬「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は。」
辛辣すぎる。

一夏「いや、千冬姉」

パンツ！本日三回目、ホントに痛い。

千冬「織斑先生と呼べ。」

咄嗟のことが拙かった。教室中に姉弟ってことがバレた。

また、騒ぎ始めた女子ズ。

だが、千冬・・・織斑先生が黙らせた。

千冬「黙れ。今日は転校生を紹介する。入ってこい。」

と言って、ドアを開けた人物は・・・

一夏「side end」

一夏「side」

ようやくかと開けて、中に入った。

千冬「自己紹介をしる。」

皇牙「はい。今日からこの学園に通うことになった、天龍覇 皇牙だ。

よろしく頼む。」

「男？」

「しかも二人目・・・!!」

女子ズ「かかか」

皇牙「(カーネージ・シザー?)」

女子ズ「かかかっこいい~~~~!!!!」

鼓膜が破れるかと思った。

「日本人なのに銀髪！」

「背が高い！」

「地球に生まれてよかった！」

最後、行きすぎじゃね？

一夏「こ、皇牙!？」

皇牙「よ、一夏。」

一夏「なんで、お前がここに居るんだよ!？」

皇牙「あー、ニユース見ていないのか？」

一夏「ニユース？」

あ、見てねえな、コイツ。

説明するのもメンドイし、作者頼んだ。

説明中……（説明描写楽だわー BY作者）

皇牙「……ということだ。」

一夏「なるほどな。これから、よろしくな皇牙。」

皇牙「ああ、よろしく。一夏。」

千冬「天龍覇。お前の席は窓側の一番後ろだ。」

皇牙「分かりました。」

といい、座った。

千冬「お前も早く座れ、馬鹿者」

一夏はまた叩かれていた。

学習しろよ……

（皇牙side end）

授業が始まり、一夏はすぐにダウンしていた。

「……であるからして、ISの基本的な運用は現時点で、国家の
認証が必要であり……」

頭に疑問符を浮かべている、一夏を見た山田先生が一夏に訪ねた。

真耶「織斑くん何か分からないことはありませんか？」

一夏「全部分かりません！」

はつきり言っなよ。

呆れ顔で千冬が一夏に聞いた。

千冬「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

一夏「古い電話帳だと思っ捨てました。」

そりゃ、何言ってるか分からないだろうな。

千冬「必読と書いてあっただろう、再発行してやるから一週間で覚えろ」

おお、とんでもない発言だ。

一夏「ちよつと、それは……」
千冬「やれ」

一夏「……はい、やります。ところで、皇牙はどうなんですか？」
飛び火したよ……

皇牙「あー、俺？俺はある程度覚えたし、ついては行けるぞ？」

一夏「味方がいない……！or z」

皇牙「まあ、頑張れ」

一夏はなんで俺、こんなところに居るんだろうな。と思っていたのがどうやら、千冬にばれたようだ。

千冬「貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』とおもっているな。」

ホントに鋭い姉だ……

一瞬こちらを睨んだので思考を止めた。

千冬「望む望まざるにかかわるらず、人は集団のなかで生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めるんだな」

つまりは現実と直面しろということ。

というか、すでに一人人間じゃないんだけど。まあ、俺なんだけどと皇牙は心で言っていた。

そしたら、出席簿で叩かれた。「パァン！」これは痛い。

千冬「変なこと考えてなかったか？」

皇牙「イエ ナニモ？」

パァンッ！……ホント痛え。

IS学園（後書き）

ホントはセシリアや篤も出したかったが、長くなるからやめました。次、でるよ。

そして、謎の人物は言わなくても分かると思うから、言いません。

代表候補生（前書き）

長いなあ。そしてスマン何故か筈が出なかった。
出るように作成したはずなのに・・・

代表候補生

一夏「ほんと分かんないけど・・・」

皇牙「努力しろよ・・・」

とISのことで一夏は俺に訪ねてきた。

ちなみに、今現在休み時間だが、廊下がエライことになってる。

デパートのバーゲンセール並みに女子が詰めかけてる。正直怖い。

????「ちょっと、よろしくて?」

皇牙「ん?」

一夏「へ?」

いきなり声を掛けてきたのはなんつーか、貴族っぽいオーラを出している女子だった。

????「訊いてます?お返事は?」

一夏「あ、ああ聞いてるよ。で、何か用か?」

皇牙「・・・」

俺は黙る。はつきり言ってごういう手合いは嫌いだからだ。

一夏「というか、俺、君のこと知らないし。」

????「わたくしを知らない?このセシリア・オルコットを?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!」

一夏「代表候補生ってなに?」

セシリアとその他女子はこけていた。まあ、気持ち分かるが・・・

皇牙「国の代表ってことだ。つまりエリートだ。一夏」

一夏「そういえばそうだな。」

セシリア「そう、エリートですわ!」

といい俺の方を指差した。人に指を指すんじゃないよ、バカ。

セシリア「少しは分かる人がいるようね。本来なら私のような選ば

れた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただけ？」

一夏・皇牙「そうか、それはラッキーだ。」

セシリア「・・・馬鹿にしてますの？」

一夏は素で言ったと思うが、俺は大いに馬鹿にしています。

セシリア「まあでも？ISのことを泣いて頼めば教えてもよかったですよ？私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

おお、初めて「よくつてよ」という言葉を使う人間にあったな。

一夏「俺も倒したぞ、教官」

セシリア「は・・・？」

スゴイいたたまれない空気だった。

セシリア「わたくしだけと聞きましたか？」

一夏「女子ではつてオチでは？」

ピシッ！あ、なんか亀裂の入った音がした。

キンコンカンコンコン・・・

セシリア「っ・・・！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくつて！？」

逃げるものにも同じクラスだろーが。

三時間目は千冬が担当だった。が、始める前に・・・

千冬「ああ、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな。」

ふーん、代表者ねえ。

千冬「クラス代表者とは委員長みたいなものだ。クラス対抗戦とは入学時点の各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では差はないが、競争は向上心を生む。一度決まったら一年間は変更はないそのつもりでいる。」

と周囲が騒ぎだした瞬間、一人の女生徒が推薦した。

「はいっ。織斑くんを推薦します。」

「私もそれが良いと思いますー」

一夏「お、おれ!?!」

千冬「織斑、席に付け。そして黙れ。他に推薦はあるか?」

一夏は大変だな。

「わたしは天龍霸くんを推薦します。」

「わたしも!」

ナンテコツタイノ(^ ^)\

皇牙「じゃ、俺は一夏を」

一夏「皇牙、てめー!じゃ、俺は皇牙を」

皇牙「……………(#。。)」

一夏「……………(。 #)」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

セシリア「納得いきませんわ!!」

今まさに、殴り合いが開始しようとした瞬間、セシリアが叫んだ。

セシリア「そのような選出は認められません!大体、男がクラス代表だなんて、いい恥さらしですわ!このセシリア・オルコットにそのような屈辱を味わえと!?!」

おおう、なんともありきたりなセリフだ。

セシリア「実力から行けば、わたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しい極東の猿にされては困ります!!わたくしはIS技術の修練に来たのですよ!」

エンジンが掛かってきたのか、凄い勢いで回り始めた。

俺と一夏はアイコンタクトとバれない程度のジェスチャーで話した。

皇牙「一夏」

一夏「なんだ、皇牙?」

皇牙「このまま、コイツに押し付けないか?」

一夏「そうするか。」

とアイコンタクト終了……

まだ、セシリアは喋っていた。

セシリア「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、それはわたくしですわ！」

『実力』という言葉に千冬は反応し、俺を見た。

皇牙「（まあ、俺を見るよね。ドイツの一件を見ちゃつと。）」
だが、俺は『やらねーぞ？』という視線を送り返した。

セシリア「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛ですわー!!」

皇牙「俺はアンタでも構わんぞ。」

よし、これでうまく・・・

一夏「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」
いきませんでした。

つーか、何やってんのアイツ？バカなのか？そうなのか？

あー、もう。メツチャ怒ってんじゃん。どうすんだコレ？

セシリア「決闘ですわ！」

一夏「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

セシリア「イギリス代表候補生セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわ。そこのアナタ！」

皇牙「ん？おれ？」

セシリア「そう、貴方ですわ。あなたもやるのよ。」

巻き込まれたよ。あー、ウザってえ。

おつといけない、あの口調が出そうになっちまった。あのときは軍だったからいいが、ここはマズイな。

セシリア「まあ？アナタはわたくしに勝てないと思ったのか身を引いたので手加減して上げますわよ？」

ブチッ。

この一言が引き金となった。

皇牙「・・・くくく。」

セシリア「なにが可笑しいのですの？」

皇牙「ヒツヒツヒツヒ！いやあ、こんなに笑ったのは久しぶりだよ。セシリア・オルコット。」

セシリア「・・・アナタ頭大丈夫？」

皇牙「ああ、ちゃんと正常だぞ。お前が俺に手加減？逆だろバーカ。俺がお前に手加減するんだよ？」

セシリア「極東の猿が吼えますわね。」

皇牙「猿じゃなくて、天龍覇 皇牙だって言ってるんだろ！テメエこそ頭大丈夫？名前も覚えられないなんて、猿以下だな！」

セシリア「手加減すると言いましたが辞めさせてもらいます。全力で倒しますわ。」

皇牙「テメエじゃ、俺には絶対勝てねえよ。」

セシリア「な、なんですって！！！」

甲高い声で叫んだ。

皇牙「キャンキャン、うるせえぞ！クソガキ！！」
・・・やっちゃまった。

皆豹変している俺をみて、驚いてる。

千冬「・・・皇牙」

皇牙「チツ！・・・分かってるよ、千冬。」

千冬「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、天龍覇とオルコットはそれぞれ用意しておくように。では、授業を始める。」
と始まった。

放課後・・・

真耶「織斑くん、天龍覇くん。寮の部屋割りが決まりました。天龍覇くんは一人ですが、織斑くんは相部屋になってしまいました。」

とって、キーを渡す。俺は1026号室、一夏は1025号室だ。
一夏・皇牙「荷物は？」

千冬「荷物なら私が手配しておいた。ありがたく思え。」
そいつは「ご丁寧にどうも。」

真耶「時間を見て、部屋に行ってください。夕食は六時から七時です。一年用の食堂があるのでそちらでとってください。」
と色々言われて、今俺たちは、お互いの部屋の前に居る。

皇牙「じゃな、一夏。」

一夏「ああ、じゃ皇牙」

と部屋に入った後、しばらくして、「ズドン！」という音がしたが無視した。

やることがあったからだ。

p r r r r r r r r r r . . .

皇牙「あ、束。皇牙だ。」

束「うーん？こーくんな〜に？」

皇牙「悪いんだが、一夏の専用機一週間以内に創ってやってくれ。」

束「了解！いきなりだね？なんかあったの？」

皇牙「ああ、世間知らずの馬鹿がケンカ吹っかけてきた。」

束「ああ〜それはご愁傷さまだね。」

皇牙「ま、取り敢えず頼む。」

束「はいはい。じゃね〜」

P i i !

さて、どうやってブチのめすか考えるか・・・

代表候補生（後書き）

顔文字は使いたかっただけー

専用機（前書き）

sideを試しにつけてみました。

専用機

（皇牙side）

朝、食堂に行くときに一夏とそのルームメイトと会い朝食と一緒に食べることになった。

「おい、一夏。そちらの方は？」

一夏「うん？言っただけじゃなかったか？」

「聞いてないぞ。というか、なんかお前やらかしたのか？彼女機嫌が悪そうだぞ。」

一夏「ちよつとな・・・」

この濁し方と昨日の騒音でなんとなくことが想像ついた。

「まあ、いいか。俺の名は天龍覇 皇牙って言っただ。よろしく頼む。」

「????」

一夏「箒お前も自己紹介しろよ。勝手にするぞ？」

箒「・・・勝手にするな・・・私が自分でやる。」

一夏「するなら、返事ぐらいしてくれ。」

箒「うるさい。・・・篠ノ之 箒だ。」

「おう、よろし・・・く？もしかして、東の妹さんか？」

箒「!!・・・姉さんを知っているのか!？」

「まあ、ここに来るまで一緒に暮らしていたしな。」

箒「・・・そうか、・・・姉さんは元気にだったか？」

「ああ、元気過ぎだな。なんつーの？元気ハツラツ？みたいな感じだったぞ。」

一夏「え？皇牙、東さんと知り合いだったのか？」

「ほんの二年前まで一緒に暮らしてたぞ。」

一夏「そうだったのか。」

とそんな他愛のない話をしていた時、入口から覚えのある声があった。

千冬「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

という声が飛んでから、食堂にいる俺以外は慌てて食っていた。それもそのはずIS学園のグラウンドは一周が五キロあるのだ。

つまり、十周＝50キロとなる。マラソンと一緒だな。

俺はほとんど、食べ終わっていたのでお茶を飲みながら一服つき、時間を見て、教室に向かった。

〈皇牙side out〉

〈一夏side〉

朝食を食べ終わりの時に千冬姉のことを考えていたがセシリアとのIS戦を思い出し、どうするべきか考えていた。

「まあ、今はあんまり考えずにISのことに集中しないと、来週試合だしな。なんとかなるだろ。」
と浅はかな考えは一瞬で砕け散った。

結論、どうにもなりませんでした！

え、なにこれ？全然わからないんだけど。

アレだな、数学で言う公式を知らないと解けない問題を相手にしている感じだな。

と一人の生徒が不安な単語を聞いて、山田先生に質問した。

「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中いじられているみたいでちょっと怖いんですけど・・・」

まあ、あの感覚は人によって感じ方が違うかもしれないな。

山田先生は例として下着の話が上がたが、俺を見て話が止まった。

「えー、えーっと、そのお、織斑さんと天龍霸くんはしていますよね。わ、分からない例えですね。あははは・・・」

と笑ってごまかしていたが、とてつもなく微妙な雰囲気教室中に

漂った。

女子たちは腕組みをするフリで胸を隠していた。なんとというか、教室中から「見て欲しいけど見て欲しくない」という視線が俺と皇牙に突き刺さったが、皇牙は考え事をしているのか無視していた。俺は凄いツライけど・・・

キーンコーンカーンコーン

と鐘がなった。助かった。

「一夏 side out」

山田先生が教室を去る前に千冬姉は俺に向けて、

千冬「織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる。」

「一夏「へ？」

千冬「予備機がない。だから、少し待て。学園が専用機を用意するそうだ。」

皇牙「(よし。)」

と皇牙は「これでいい」と思っていたと同時に教室中は騒いでいた。一夏以外だが・・・

当の本人は何も分かっていない感じだった。

必読書読んだのか？一夏。

皇牙「一夏つまりな、ISは世界に467機しかなく、ISは束しか創れない。お前は特別待遇のため、データ収集の為に専用機が渡されることとなった。OK？」

「一夏「説明どうも。」

これを聞いて、喧しいのがわざとらしく声を上げた。

セシリア「安心しましたわ！これで、まともな戦いが出来るものですね。訓練機で相手など一方的な試合にしかありませんし。」
「さいですか。」

セシリア「ところでアナタ、天龍覇と言いましたか？アナタも当然専用機を持つているのでしょうか？」
皇牙「・・・へえ、名前ぐらいは覚えられるようになったか。まあ、持っているが、それで？」
セシリア「いえ、ただの確認でしてよ？」
と、自分の席に戻った。

一週間後・・・

月曜日

俺と一夏と篤は一緒に居た。

俺たちは一緒に居ることが多かったためか名前で呼び合つところまでいっていた。ちなみに今ピット内にいる。

そこに山田先生が走つて来た。

相変わらず、危なそうな走り方だが・・・

真耶「織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

落ち着け、山田先生。

一夏は悪ふざけをしていたが、そこに・・・

千冬「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パアンツ！

相変わらず良い音と強さが比例しているな。

一夏「千冬姉・・・」

パアンツ！

千冬「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなければ死ぬ。」

おお、とんでもねえな。この教師。教育者とは思えないお言葉だ。美人の割に彼氏がいないのは性格のせいだな、こりゃ。

千冬「ふん、馬鹿な弟にかける手間がなくなれば、見合いでも結婚でもすぐ出来るぞ、皇牙？」

バレてるし・・・

なんというか人間の枠を超えてんな、コイツ。

パンツ！

痛え・・・

千冬「なんか、ふざけたことを考えていたな。」
だから、なんで分かるんだよ・・・

真耶「そ、それですね！来ました！織斑くんの専用IS！」

え？

千冬「織斑、直ぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番のものにしろ。」

はい？

箒「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せる。一夏」

あの？

一夏「え？え？なん・・・」

真耶・千冬・箒「早く！」

三人の声が重なった。

あいつの周りつて強情な女が多いな。
ピットが開いた。

其処には『白』がいた。

ずっと、一夏を待っていたように佇さんでいた。

一夏「これが・・・」

真耶「はい、織斑くんの専用IS『白式』です。」

一夏は『白式』の装甲が展開された。

ゆっくりとピット・ゲートに進み、途中で箒に

一夏「箒」

箒「な、なんだ？」

一夏「行ってくる」

箒「あ・・・ああ。勝ってこい」

というやりとりのあと一夏は向かって行った。

専用機（後書き）

- ・ はっきり言おう、sideをつけると書きにくい。
いや、まあ多分、俺の文才の無さが出ていると思うんですけどね・・・

ブルー・ティアーズ／白式／蒼（碧）の魔導書（前書き）

長いです。

ブルー・ティアーズ/白式/蒼(碧)の魔導書

一夏がアリーナに行った後、俺たちはモニタールームに移った。

千冬「始まったな・・・」

セシリアの射撃を合図に始まり一夏は掠りながらもブルー・ティアーズの攻撃から避けていた。

対して、一夏は近接ブレード一本でなんとかやり合っていた。

中距離VS近距離どう足掻いても結果は見えているが、一夏は男の意地というべきか驚くこと27分も保っていた。

セシリア「27分。持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

一夏「そりやどうも・・・」

シールドエネルギーの残量67。武器はあと一振りつとところだ。

セシリア「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね。」

と言っているが、モニター越しの俺は“あの状態”でやれている一夏に驚きなんだが、あいつは気付いているのかね・・・

そんなことを思っているとセシリアが止めに入った。

が、一夏は最後の足掻きを見せた。

皇牙「へえ・・・根性あるな。」

そのあと一夏を見ると僅かながら顔がニヤけていた。

一夏は四つの自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』を一機ずつ撃墜していった。

一夏「コイツは毎回お前が命令を送らないと動かず、そして、その時、お前はそれ以外の攻撃ができない。制御に意識を集中しなければならぬからだ！」

と言った時には二機目を撃墜した。

セシリアの目尻が引きつっていた。

真耶「はああ……。すごいですねえ、織斑くん」

ピットでリアルタイムモニター越しに山田先生はため息交じりに呟いていたが、千冬は忌々しげな表情をしていた。

千冬「あの馬鹿者、浮かれているな」

皇牙「あ、やつぱり？」

真耶「え？どうしてわかるんですか？」

皇牙「いや、さっきから一夏左手を閉じたり開いたりしてるんですよ。」

千冬「あれは、昔からのクセだ。あれが出ている時は、大抵簡単なミスをする。」

真耶「へええー、さすがご姉弟ですね。そんな細かいところまでわかるなんて。」

それを言われた千冬はハツとした。

千冬「ま、まあなんだ？あれでも一応私の弟だからな……」

真耶「あ、照れているんですか？照れているんですねー？」

とちよつとからかった瞬間、千冬は黙った。

千冬「……………」

そのあと、無言でのヘッドロック炸裂。

ぎりりりりっ！

スゴイ痛そう……。だって、音がヤバイもん。

真耶「いたたたたたたっ！！」

千冬「私はからかわれるのが嫌いだ。」

嫌いだって、アンタ……。自分からボコを出したんだろっが……。なんて思っていたら、いつの間にか俺の方にもやってきた。

皇牙「いででで！？何しやがる！？」

山田先生よりも二倍ぐらいの力で決めてきた。

千冬「いま、私をバカにしたらどう？」

ホントになんで分かるんだらうね、この人。エスパーかな？

というか千冬さんよ。女性が軽々しくヘッドロックを決めるべきじゃないと思うんだ。・・・胸のサイズがバレますよ？
そんなことを思いつつ俺は呟いた。

皇牙「というか、セシリアのヤツ気が付いているのか？一夏のIS未だに初期設定状態で戦っていることに。」

と呟いたあと、箒と山田先生は声を一緒にして気が付いた。

箒・真耶「あ。」

気が付いていなかったんかい！

そのとき、ブルー・ティアーズからミサイルが一夏に直撃した。

千冬「・・・機体に救われたな、馬鹿者め。」

一夏「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

一夏の手にはかつて姉が使っていた武器『雪片』があった。

セシリア「・・・は？あなた何を言ってるん・・・」

一夏「とりあえずは、千冬姉の名前だけは守るってことだ!!」

それだけを言い、一夏はセシリアの元に迫っている最中に雪片の刀身が光を帯び、渾身の一撃を繰り出そうとしたが・・・
無残にも終了のブザーが鳴り響いた。

『試合終了。 勝者、セシリア・オルコット』

ピットに戻ってきた一夏に最初に千冬が掛けた言葉は千冬らしいものだった。

・・・労ってやれよ。

千冬「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果が大馬鹿者。」

試合が終わり、一夏は馬鹿者から大馬鹿者になっていた。
嫌なランクアップだ・・・

皇牙「さて、俺もやりますか・・・」

といい、ISを展開した。

皇牙「（ブレイブルー・・・起動。）」

白と黒と赤で色に分かれていた。

行きますか。と思っていた時に、千冬から声を掛けられた。

千冬「皇牙。」

皇牙「あん？なんだ、千冬？」

千冬「お前は、二次移行と『アレ』は禁止だ。一次のみでやれ。」

皇牙「はいよ。」

と返事をしたあと、機体の色が、白と赤に変わり、ISの形も少し変わった。

皇牙「そんじゃま、ちよいと遊んできますか。」

俺はブルー・ティアーズの元に向かった。

千冬「さて、私たちもモニタールームに行くぞ。」

セシリア「ようやく、主役の方が来ましたわね。」

主役ねえ・・・

皇牙「んなことどうでもいいから、エネルギーを回復して来い。」

セシリア「貴方程度、この状態でも勝てますわよ。」

皇牙「それじゃ、負けた時にエネルギーが少なかったからって言い訳するなよ？回復するなら今だぞ？」

と言い放ってやった。

万全の状態で試合はやるべきものだ。それも分からないバカなど殺されても文句は言えない。

セシリアは何か言いそうになったが、それよりもはやく第三者の声によってかき消された。

千冬『オルコット、天龍覇の言う通りエネルギーを回復して来い。』

セシリア「何故ですか！？この状態でもやれます！！」

これだから、バカは・・・

千冬『その状態じゃ絶対にヤツには勝てんぞ？それでもいいなら試合を始めるが・・・』

セシリア「・・・分かりました。回復します。」
とって、ピットに戻っていった。

10分後・・・

セシリア「待たせましたわね。」

千冬『両者、準備はいいか？』

セシリア「ええ。」

皇牙「ああ。」

千冬『では、・・・始め！！』

キュインツ！！

セシリアは距離を取り、《スターライトmk?》で撃っていた。

俺はそれを軽やかに避け続いていた。

皇牙「(さて、どう攻めるかな。)」

真耶「そういえば織斑先生。「二次移行はダメだ。」と言ってましたがああの機体二次移行になれるんですか？」

モニターを見ながら聞いてきた。

千冬「山田先生、あの機体に二次移行はないですよ。」

真耶「はい？」

千冬「すまない。説明不足だったな。正確には一時的には二次移行が出来るが完璧にそれに成るとは出来ないぞ。」

真耶「どういう意味です？」

千冬「つまり、二次になつても待機状態に戻ると自動的に一次に戻るとのことだ。」

真耶「それって、欠陥品なんじゃ・・・」

千冬「それには理由があるが・・・」

一夏「ち・・・織斑先生、理由ってなんですか？」

千冬「聞きたいか？」

真耶「一夏・篤」「はい！」「」

千冬「わたしも詳しくはないが、あの機体には二次移行のパターンが二種類あるらしい、しかも自分の意思で選べるらしい。」

三人とも言葉を失っていた。

私も初めて聞いた時は同じ状態になったんだからな。

真耶「二、二種類ですか・・・？」

千冬「ああ、詳しくはヤツから聞いてくれ、話してくれるかは分からないが・・・っとどうやら動くようだな。」

再び、四人はモニターを見つめた

俺は様子見をやめて、攻め出した。

二本のバタフライナイフ選択しいつでも呼び出す状態にして、セシリアに向かった。

セシリア「わたくしに近づきたいようですがさせませんわよ？」

皇牙「そうか・・・なら俺から近づいてやるよ。ウロボロス！！」

と言ったあと突然俺の前から先端に蛇の頭がついた鎖がセシリアに噛みついた。

シヤアアアアア・・・

皇牙「蓬閃、一！！」

そのあと15メートル離れた距離が一気に縮まり、二本のバタフライナイフを片手に一本ずつ持ち切り刻んだ。

皇牙「とう！ザシュ！とう！ザシュ！」

と切り刻んだあと、かかと落としの要領でセシリアを地面に叩き落とすとした。

皇牙「飛鎌突！！」

ドガンー！！

セシリア「きゃあー！くっ……一瞬ですがISが止まった？」
ウロボロスには嘸みついた時、一瞬だけ嘸みついた相手のISを止める力があつた。

ダメージ85、シールドエネルギー残量、515。実体ダメージ、低レベル。

皇牙はそのまま、下に降りてきた。

セシリアは『ブルー・ティアーズ』を使い、グラウンドに向けてレーザーを撃ち砂埃を起こした後、ミサイルを叩き込んだ。

セシリア「これで……！！」

と呟いたがその言葉はすぐに消えた。

皇牙の手にはとつもなく大きな漆黒の槍と楯が握られていた。

皇牙は空中に居るセシリアを見た後、楯を消し、漆黒の槍のみになったあとその槍をセシリアに向けて投げた。

ブンッ！

避けられたら、違う槍を手に持ち、また投げた。

皇牙「重火槍グラビモス」ブンッ！……ドス！「プロミネンスソウル」ブンッ！……ドス！「レグルス」ダオラ「ブンッ！……ドス！」真・黒滅龍槍「ブンッ！……ドス！」

投げた槍は全部避けられ、アリーナのシールドに思いつき突き刺さっていた。

真耶「あの槍はどんだけあるんですか！？」

千冬「……そういえばあいつの機体のデータがあるが見るか？」

真耶「あるなら見せてくださいよ！！……なんですか……コレ？エネルギーが他の機体よりも少ないし力も若干弱い分、『拡張領域』がどの機体よりも多いんですが！！」

千冬「あの機体はそういうものなんだよ、山田先生。力とエネルギーが弱い分それを補う程の武装がある。はつきり言えば、あの機体

は一次移行の状態で第三世代とまともにもやりあえるぞ。」
真耶「では、二次移行になると・・・どうなるんですか?」
千冬「『拡張領域』にある武装が使えなくなり、武器も限定される代わりに機体の性能が飛躍的に上がるらしい・・・正直、私でも勝てるか危うい。」
三人ともその言葉を聞いて、再び黙った。

五本目の槍を投げ終えた後、セシリアは少し疲労の色が見え始めていた。

皇牙「長く続けるのも、飽きるしそろそろ終わらせてもらっぞ、セシリア・オルコット!!」

セシリア「それなら、ファイナーレの役を務めるならこのブルー・テイアーズですよ!!」

皇牙「出来るかな、お前に?」

セシリア「やってさせ上げますわ!」

皇牙「捕捉!!」

といて先程伸ばした、『ウロボロス』をセシリアの元に放ったが、セシリアは『スターライトmk?』で撃ち落とし、そのまま皇牙を貫いた。

皇牙「ぐお!・・・かかった!!蛇咬!」

ダメージ105、シールドエネルギー残量、395。実体ダメージ、中レベル。

皇牙は『ウロボロス』が壊された後、痛みに耐えながら素早く違う『ウロボロス』を撃たれた直後に伸ばしていた。

セシリア「なんですって!!」
ガブツ!

セシリア「(またISが一瞬止まりましたわ。)」
皇牙「槌!!」

そのまま勢いよく引き壁に叩きつけた。

ドガン！

皇牙「まだ、終わりじゃねえぞ！！蛇竜烈華斬！！」

ブルー・ティアーズをロックした後、ウロボロスで引き寄せ体を回転させながら滅多切りにした。

セシリア「キャアアアア！！」

皇牙「ヒャーハッハッハッハ！！」

ドゴツ！！

ダメージ1000、シールドエネルギー残量0、実体ダメージ、高レベル。

これ以上の戦闘は続行不能。

そのあと、ブザーが鳴り響いた。

『試合終了。 勝者、天龍覇 皇牙』

試合が終わり、俺はピットに戻った後、一夏と箒はじゃれ合っていた。

箒「今、私のことを何か馬鹿にしたか？」

一夏「してない」

箒「なぜしゃべり方がおかしい」

一夏「おかしくない。これ、普通。中南米では日常茶飯事」

箒「ふう……」

といて竹刀を抜いた。

アイツどこから竹刀出したの？手品か？それなら凄いな、箒。

バシーン！

一夏「いつってえええええっ！？な、なっ、なあっ！？」

箒「馬鹿がいたので叩いた」

とんでもねえ女がここに居る。

まかり間違っても、箒の悪口は言わないでおこう。

そんなことを余所に、山田先生が問いただしてきた。

真耶「天龍覇くん、さっきの武器は回収しなくていいんですか？」
皇牙「大丈夫ですよ。ISが待機状態になれば自動的に戻りますよ。」

真耶「それとさっきの蛇みたいなものなんですか？」

皇牙「あれは『単一仕様』の力です。もうひとつありますがそれは初見の方は見切るのが大変ですがね。」

千冬「あれが・・・お前の機体“ブレイブルー”か」

山田先生はこの単語を聞いた瞬間、険しい顔になった。

真耶「“ブレイブルー”ってあの“蒼（碧）の魔導書”のことですか！！まさか貴方だったなんて・・・」

一夏「なあ、皇牙。なんで山田先生はこんなに驚いているんだ？」

皇牙「まあ、ちよつとな・・・」

といいながら、俺たちはピットを後にした。

サアアア・・・

（今日の試合・・・）

天龍覇 皇牙には負けたが織斑 一夏に勝ったのにひどく落ち着かなかった。

セシリア「織斑、一夏・・・」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。

なんだろう、この気持ちは。

意識をすると途端に胸をいっばいにする、この感情の奔流は。

知りたい。

その正体を。その向こう側にあるものを。

知りたい。一夏のことを。

翌日・・・

真耶「では、一年一組代表は織斑 一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね!」

一夏「先生、俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になっているんでしょうか?」

と聞いた後、セシリアが勢いよく立ちあがった。

セシリア「それは私が辞退したからですわ!」

皇牙「ちなみに俺は昨日の内に辞退させてもらった。」

一夏「はあっ!?なんでだよ!？」

皇牙「これもお前の為に思って辞退したんだぞ?」

一夏「俺のため?」

皇牙「ああ、ISのことまだ分かっていないから代表になれば知識も付くと思って。」

一夏「皇牙・・・お前、ホントにいいやつだな。」

どうやらわかってくれたようだ。

と思ったら、箒が聞いてきた。

箒「本音は?」

皇牙「ぶっっちゃけ、メンドイ。・・・ハッ! (。・。・)

一夏「感動した俺がバカだったよ。」

皇牙「まあ、とにかくがんばれ!」

ブルー・ティアース/白式/蒼(碧)の魔導書(後書き)

なんで二つに分けなかったんだろ・・・

技の説明でもします。

ウロボロス・・・噛んだ相手とISを一瞬だけ動きを止める。噛む
噛まないは使用者の意思によって決められる。ちなみに噛まなくて
も止めることはできるがISは止まらない。

飛鎌突・・・BLAZBLUEのハザマの飛鎌突と同じもの。強制
的に地面に叩き落とす。

蛇咬・・・噛んだ相手を勢いよく壁に叩きつける。

みずちれつかざん
蛇竜烈華斬・・・BLAZBLUEのハザマと一緒に。

一夏にまた新しい女性が来たと思ったら、俺もだった・・・orz(前書き)

タイトルはっちやけてみた

「夏にまた新しい女性が来たと思ったら、俺もだった・・・orz

千冬「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、天龍覇。試しに飛んで見せる」

四月も下旬で桜の花びらが儂げに散っていた頃、俺たちは今日もこうして千冬の授業を受けているよ。

皇牙「(蒼(碧)の魔導書^{フレイブル}・・・起動)」

と無意識にISを展開して、空を飛んでいた。

千冬「早くしろ。天龍覇をみる。すでに展開して飛んでいるぞ、あれが模範だ。わかつたら早くしろ。」

と一夏は皇牙をみたら、隣に居たはずの親友はすでにいなくなり、優雅に空を飛んでいた。

ISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリの形状で待機している。

セシリアは左耳のイヤークラス、皇牙は手袋(BLAZBLUEのラグナが両手に付けている手袋、通気性抜群だからね。BY作者)、俺は右腕のガントレット。

・・・今、なんか変な声が聞こえたが忘れよう。俺のはどう見てもアクセサリではなく完全に防具だ。なぜ？

千冬「集中しろ」

いかん、次は叩かれる。

急いで白式を展開した。セシリアは皇牙よりかは遅く、俺よりは早く展開していた。

千冬「よし、飛べ」

言われたら、セシリアは急上昇し、皇牙がいるところで止まった。

一方皇牙は仰向けになり、春風の名残を楽しみながらうたたねをし

ていたが、セシリアが近づいたら目を覚ました。

余裕あり過ぎじゃね？アイツ・・・

千冬「何をやってる。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」と通信回線から早速おしかりの言葉を受ける。

一夏「空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよな・・・なんで浮いてんの、コレ？」

セシリア「反重力力翼と流動波干渉・・・」

一夏「わかった。言わなくていい。」

知らない単語が出てきた瞬間、俺は諦めた。絶対に解るわけないからな。

そんなことを言った後、セシリアは楽しそうに微笑んでいた。

筈からの突然の怒号が飛んで来た。

セシリアは一夏の考えていることが分かったのか、詳しく説明してくれた。

筈の説明とは大違いだ。

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚だ』

『ずがーん、という具合だ』

これで解るやつは手を上げてくれ。ちなみに俺はわからん。

千冬「織斑、オルコット、天龍覇、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から10cmだ。」

セシリア「了解です。では一夏さんに皇牙さん、お先に」

と言って、千冬の言われたとおりに目標10cmのところまで止まった。

皇牙「んじゃ、俺も先に行くわ。下で待ってるぜ？」

と言い皇牙も下に降りて、完全停止をした。

・・・地表から1cm以下で・・・

千冬「見事だ、天龍覇。」

皇牙「お褒めに預かり光栄です。織斑先生。」

と冗談で言ってみたがスルーされた。・・・ノリが悪いなあ。

まあ、ここまでではよかつたんだ。そうここまでは、このあと一夏が大ポ力をやらかすまでは……

ギョーンツ

ズドオオンツ!!

アイツは馬鹿なのだろうか？これは着陸じゃなくて墜落だよ馬鹿野郎。

千冬「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

一夏「……すみません」

箒「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」と箒が呆れながら言ってきた。

あの擬音のことか？箒も冗談を言う様になったようだ。うむ、感性の発達は素晴らしいね。

箒「貴様、なんか失礼なことを考えているだろう」「
なんでバレルんだろうね、俺の考^{たち}えていることは。」

千冬「織斑、武装を展開してみる。それぐらいは自在に出来るようになった」

一夏はほんの少し経ってから『雪片弐型』がでた。

千冬「遅い。0.5秒で出せるようになれ。」

一夏は悶えていた。

千冬「次だ、皇牙。武装を展開k……」

皇牙「もう出来てます。」

千冬「その二本のバタフライナイフだけではないだろ？」

皇牙「まあ、もう一つありますが「ペア……」これでいいですか？」

千冬「あ、ああ。よろしい。」

喋りながら展開したので、千冬は少しだけ不意打ちを食らった。

千冬「最後だ、セシリア。武装を展開しろ」

セシリア「はい。」

左手を肩まで上げて展開した。

手には『スターライトmk?』があり、すでにマガジンも装填されていた。

千冬「さすがだな、代表候補生。だが、ただし、そのポーズは止める。横に向かつて展開など味方を撃つ気か。正面で展開しろ。」

セシリア「ですが、これはわたくしのイメージに……」

千冬「直せ。いいな。セシリア近接用の武装も展開しろ」

セシリア「え、あ、はいっ」

千冬「まだか？」

セシリア「……!! ああ、もう! 『インターセプター』!」

と武器の名前を呼んだ。

千冬「……何秒掛かっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

セシリア「じ、実戦では近接の間合いに入らせません! ですから、問題ありませんわ!」

千冬「ほう。織斑と天龍覇との対戦で初心者には簡単に入れ、天龍覇にはすんなり懐を許していたようには見えただが？」

セシリアは咄嗟の答えた反応に自爆していた。

そのあとセシリアは一夏と俺をキツと睨んだ。

俺のせいだっけか? 知らんがな、そんなもん。油断したお前が悪い。

千冬「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

一夏は箒とセシリアを見たが、箒は顔を逸らされ、セシリアはもういなかった。

皇牙「一夏、手伝ってやるよ。」

一夏「サンキュ、皇牙」

持つべきものは親友だと、痛感した。

〈皇牙side〉

グラウンドを片付け俺は、さっさと寮に戻ろうとしたが、その帰り道でついてくる気配を感じた。

皇牙「（この視線はココに来た時の謎の視線と一緒にだな・・・）」
俺は気が付いていないフリをしながら、寮に戻るルートを少しだけ変えてみた。

それで相手の出方を見ようとしてみたら、勘付かれたと勘違いしたのかすでに追跡者はいなかった。

そして部屋に入ろうとドアノブを掴んだ時、微かに中から「ガタツ！」という音が聞こえたのである。

俺は、素早くドアを開けた。

バンツ！！

????「!?!」

侵入者は突然の出来事に驚いていたが、すぐに冷静な表情になり逃げ出す為に俺を気絶させようとしてきたが、俺は侵入者目掛けてスライディングをし、脚払いした。

????「キャツ！」

相手がこけたのことを一瞬見た後、侵入者の背中に乗り、手を縛りあげた。

というか今、悲鳴の声がおかしくなかったか？

侵入者の容姿をよく見てみると、細い体に服装はIS学園の制服でスカートを穿いていた。

.....

????「いったーい！！女の子になにすんのよう。」

.....女性ですね。

????「取り敢えず、どいてくれるとおねーさんは嬉しいんだけど。」

.....

皇牙「こちらの質問を答えてくれれば、今の状況からよくなると思っぞ?」

????「.....答えられる範囲で答えましょう。」

皇牙「何故、俺を監視した？」

「???」「このIS学園に謎のISを操る操縦者が転入してきたと聞いて、どんな人物か気になったから」

皇牙「・・・なるほど」

「いい手をほどこいてやった。」

「???」「あら、簡単にほどこちゃっていいの？嘘をついてるかもしれないのに・・・」

皇牙「嘘だったら、ほどこいたときに反撃しているだろ？」

「???」「お見通しつてわけね・・・」

皇牙「それより、怪我はないか？」

「???」「敵か味方も分からないのに優しいわね？」

皇牙「野郎ならともかくこんなかわいい女性を傷つけたら、母から怒られるんで・・・」

「???」「それはどうも。怪我はないわよ。」

皇牙「そいつは重畳。で、そろそろ貴方の名前を教えていただけると有難いんだが・・・」

「???」「私は、更識 楯無。この学園の長、つまり生徒会長をやっているわ。」

スゲー大物でした。

〈皇牙side out〉

「???side」

「???」「ふうん、ここがそうなんだ・・・」

と少女は呟いていた。

少女の容姿は日本人に似ているがよく見ると違っていた。その鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は中国人だった。

少女にとって日本は第二の故郷でもあり、初恋の相手が居る場所でもあった。

と学園を案内してくれる人を探す為に、歩き回っていたら、聞き覚えのある男の声が聞こえた。

「???? だから・・・だな。」

予期しなかった声の持ち主に少女の鼓動が高くなっていた。

「???? いち」

あまりの緊張さに声が裏返ってしまったことに、恥ずかしさを覚えた。

と思っていいたら、その気になる男の子は仲良くそうに知らない女性と喋っていたのを見て、一気に周囲の気温が下がった。

そのあと、総合事務受付が見つかり、手続きを済ませた。

事務員「IS学園にようこそ、フヤン・リンイン鳳鈴音さん」

鈴「・・・織斑 一夏って、何組ですか？」

事務員「ああ、噂の子？一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね。」

鈴「二組のクラス代表って、決まっていますか？」

事務員「決まってるわよ。」

鈴「名前は？」

事務員「え？ええと・・・聞いてどうするの？」

鈴音の態度がおかしかったので聞き返した。

鈴「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってってにつこりとした笑顔には、ばっちり血管マークがついていた。」

（鈴side out）

一夏にまた新しい女性が来たと思ったら、俺もだった・・・orz(後書き)

更識おねーさん登場・・・

一夏と逢うのは原作どおりなのでまだ会いませんよー

パーティー

「というわけです！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

とクラッカーが乱射されていた。

夕食後の自由時間を利用してパーティーを開いていた。

しかも、一組のメンバーが全員そろっていた。

一夏「……………」

めでたくないから、めでたくねえよ!?

一夏は壁を見るとそこにはデカデカと『織斑 一夏クラス代表就任

パーティー』と書かれていた。

皇牙「よかつたな、一夏。」

一夏「よくねえよ。バカ野郎」

だいたい俺より強いのになんで辞退するのかね、コイツは？

というか、明らかに人数がおかしいぞ。確実に三十人以上はいるぞ、

この空間に。

???「はいはい、新聞部です。話題の新生二人、織斑 一

夏君と天龍覇 皇牙君に特別インタビューをしました！」

オーと女子一同盛り上がる。オーじゃねえよ。オーじゃ。

???「あ、私二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってま

す。はいこれ名刺。」

といい一夏と俺に渡してきた。

薫子「ではではぜひ織斑くん！クラス代表になった感想をどうぞ

！」

ボイスレコーダーをずっと一夏に向けていた。スゴイ無邪気な

子供のような瞳になっている。

一夏「まあ、なんというか、がんばります。」

薫子「えー。もっといいコメントちょうだいよ」。俺に触るとヤケ

ドするぜ、とか！」

なにそれ？

一夏「自分、不器用ですから」

薫子「うわ、前時代的！」

今が前時代的ならさつきアンタが言ったのは、前時代的じゃないのか？

薫子「じゃあまあ、適当にねつ造しておくから。」

こうやって情報は歪められていくのか、俺も気をつけないと。

薫子「じゃ、次は天龍覇君！コメントをどうぞ！」

皇牙「ハア、言いたくないけど。龍の逆鱗に触れてみる、触れた瞬間、その首・・・俺が貰い受ける。」

薫子「いいね、こういうコメントが欲しかったんだよ！」

皇牙を見てみたら、「メンドクセ」という表情をしていた。

薫子「最後に、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

セシリア「わたくしこういったコメントは」

薫子「ああ、メンドイから写真だけちょうだい。あとは適当にねつ造しておくから・・・よし、織斑くんに惚れたからってことにしておこう。」

ものすごい的確に捉えてんですけど・・・。ジャーナリストの勘は侮れないなあ。

薫子「写真撮るから、三人とも並んでね。」

セシリア「えっ？」

薫子「注目の専用機持ちだからね！。まずはセシリアちゃんと織斑くんからね。」

皇牙「俺、写真が嫌いなんだけど・・・」

薫子「あれ、そうなの？でも、写ってもらおうからね。」
チクシヨーが。

そんなことそつちのけで撮影会を進めていた。

薫子「はい、三人ともこっち見てー。」

俺の意思が無視された、覆すことは・・・無理ですか。そうですか。

薫子「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

一夏「え？えつと・・・2？」

薫子「ぶー、74.375でしたー」

今の答えるの無理なんじゃね？

と思っただら、パシャツとデジカメのシャッターが切られる。

・・・オイコラ、ちよつと待て。

皇牙「何故、全員入っている？」

たった一瞬、一瞬だった。シャッターが切られる前に、一組全メン

バーは俺、一夏、セシリアの周りに集結していた。

セシリア「あ、あなたたちねえっ！」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

と騒がしくなりそうだったので、俺は早々に退散した。

皇牙「一夏、先に俺は帰る。」

一夏「ああ、おやすみ皇牙」

皇牙「ああ、おやすみ一夏」

VS更識楯無(前書き)

今回は皇牙のターン!

バトルBGMはBLAZBLUEのハザマのテーマ“Guttro
nyfang”がいいかも。

V S 更識楯無

次の日……

昨日のパーティーの前に出逢った、女性こと『更識 楯無』さんと勝負することになりました。

……どうしてこうなった!!

なんでも、理由は「私より強いなら、この学園の長つまり生徒会長をやってもらわない」という理由らしい。知らんがな、そんな理由。

ということで、俺は今、第一アリーナのピットに居る。

ちなみに、この場を審判兼監督しているのは千冬だ。しかも、あまり公に出来ない為、立ち入り禁止までしてくれた。故か人はいない。

皇牙「『蒼（碧）《ブレイ》の魔導書』……起動」

とISを起動し、アリーナに向かった。

その先には、『霧纏ミステリアスの淑女』を展開している更識 楯無がいた。

千冬『さて、ここには人の目がなく、居るのは私と更識、そして皇牙の三人だけだ。双方遠慮なくやっても構わん。』

楯無「わかりました。」

皇牙「ウイ」

千冬『では、はじめ!!』

楯無は自身の周りに水のベールを纏い、ランスを持ち小手調べという感じの競り合いが始まった。

楯無はランスで突き、薙ぎ払いと虚を混ぜながら攻めてきた。

それに対し、俺は突きを避けたら、太刀【天上天下天地無双刀】で反撃を行うがランスで防ぎそのまま俺の武器を弾きながら、薙ぎ払うという一連の動作の繰り返しだった。

ガキンツッ！

シュツッ！シュツッ！シュツッ！

キン！カンツッ！カァン！

皇牙「（くそ、今一步・・・あと一步がどうしても届かない）」

とそのような考えはすぐさま消した、相手の動きに変化があったからだ。

激しい剣戟の音が収まり、楯無は攻めから護りに変わっていた。

皇牙「（どうして、攻めてこない？）」

実際、あのまま続けていたら負けていたのは俺の方だった。

武器が触れた時に発生する火花が人に近ければ近いほど、その者の方が押されていることになる。最初の方は全く近くなかった火花もしばらく経つと、俺の方にだんだんと近くで発生していた。それが突然収まったため、困惑した。

・・・が、それもすぐに消え去った。

最初の方は、よく見えなかったがよく見てみると俺の周りに霧が纏わりついていてた。しかも、なんかやたら湿度が高い。

それに気付いた皇牙を見た楯無は微笑んでいた。

楯無「ねえ？あなたの周り、熱くない？」

皇牙「・・・何故解る？」

楯無「それに少し、イライラしてるでしょ？」

そう、俺はたった一步が届かないのが少しイライラしている。

チャンスは何度もあったが防がれていたからだ。

楯無「不快指数っていうのは、湿度に依存するのよ。」
皇牙「!?!」

楯無「なんの冗談か知らないけど、私を一次のみで倒そうなんて甘いんじゃないの?・・・食らいなさい」

ヤバイ!!と判断した俺は【天上天下天地無双刀】を捨て、急いである大剣を呼び出し、大剣【テスカ・デル・ソル】それを振るった最中に爆発に皇牙は呑み込まれた。

『清き情熱』《クリア・パッション》

ISから伝達されたエネルギーを霧を構成するナノマシンが一斉に熱に転換し、対象物を爆発する能力だった。

ドガガガガン!!

楯無「あら?予想していた威力が思った割に少ないわね。何をしたのかしら?」

皇牙「があ?!なかなかキいたぞ、クソツタレ!!」

なんとか爆発の威力を軽減することには成功したが、防御する前に爆発したため本来の威力と同等レベルの傷を負った。

皇牙「つう、・・・俺がしたのは爆発の威力を軽減だ。「軽減?」

アンタのISが『水』を使うことが分かった。あの霧がどうやって攻撃するのかがすぐに予想も付いた俺は霧を蒸発させるべく、業火の大剣を呼び出しソレを振るった。成功はしたが、防御の姿勢が間に合わなかったためか、予想以上にダメージを受けたがな・・・」
と言っている皇牙を余所に楯無はその大剣を見た。

まるで、そびえ立つ塔のように長く、分厚くどこまでも紅い大剣だった。

興味本位に持ってた瞬間、躰が業炎に晒されたように熱く、すぐに手を離した。

皇牙「やめておけ、その大剣は『炎王龍』の力を宿した剣。そいつに認められない限り絶対に振るうことは出来ない。振るおうとすれば、業火の痛みがそいつを襲う。傷は無いが、痛みは本物だ。」

楯無「ということは貴方は認められているわけね？」

皇牙「そうだ。・・・確かに俺は一次でアンタを倒そうとしていた。それについては詫びよう。代わりに二つある“蒼（碧）の魔導書”の一つを見せよう。」

楯無「ようやく、本気になるってわけね。」

皇牙「ああ、言うておくが発動したら手加減は出来んぞ。」

楯無「私はそんなに軟ではないわ。」

皇牙「そうか・・・では、往くぞ!!!」

『第六六拘束機関解放、次元干涉虚数

方陣展開!!!

魅せてやるよ『碧』の力を

!!!

コードS・O・L
ソウル オブ ランゲージ

“碧の魔導書” 《ブレイブルー

》起動!!!

と言ったあと、俺は黒と碧の色のISに変わり武装が限定されたがその分シールドエネルギーと攻撃力、防御力が上がった。

皇牙「さあ、第二ラウンドだ!!!」

THE WHEEL

OF

FATE IS TU

RNING

REBEL 2

ACTION!!

楯無「セイ！」

といい突いてきたが俺はその時にはしゃがんでいた。

『残影牙』

ダメージ90、シールドエネルギー残量710、実体ダメージ
低レベル

ランスを回避しそのまま足元をすくい上げた。

掬い上げられた楯無はキリモミしながら中に浮き、俺はナイフを回
転しながら刻み、さらに上に上げたあと『ウロボロス』で少しずつ
距離を離していった。

二回目の『ウロボロス』で噛んだ後、すぐさま袖の下から『ウロボ
ロス』を放った。

『蛇咬』

と楯無のISの脚の部分を噛み、勢いよく壁に叩きつけた。

皇牙「槌!!！」

ダメージ450、シールドエネルギー残量360、実体ダメージ中レベル。

叩きつけた後、『ラピッドキャンセル』高速解除により硬直を強制的に消し、落ちたているところに追撃した。

皇牙「こいつで終わりだ・・・往くぞ!!」

『蛇翼崩天刃』

ダメージ500、ダメージ1000弱、シールドエネルギー残量0、実体ダメージ高レベル、これ以上の戦闘続行不可能。

と言った後には楯無は大ダメージを受け、ISが解けながら落下してたが、地面に激突する前に皇牙はキャッチし、医務室に連れていった。

楯無「ううん・・・？」

皇牙「目が覚めたか？」

と目が覚めた時、椅子には皇牙が座っていた。

楯無「私の負けか・・・」

皇牙「ああ、負けだな。」

そう言った後、起きあがった。

楯無「あの蛇みたいのが、“碧の魔導書”の力？」

皇牙「まあ、そんなモノだな。」

楯無「なんなの？あれ？噛まれた瞬間ISが一瞬行動しなかったんだけど・・・」

皇牙「言わなきゃだめか？」

楯無「言わなきゃ、貴方の部屋に每晚押し掛ける。」
.....

皇牙「あれは“碧の魔導書”の能力『ウロボロス』だ。」

楯無「『ウロボロス』？」

皇牙「『ウロボロス』は噛む、噛まずどちらにしても相手の動きを一瞬止めることが出来るんだよ。「噛む」と言っても二種類ある。」

「噛んでもすぐに離すタイプは「人」の行動は止めることは出来るが「IS」の方は止めることは出来ない。対して、一度噛んだら離さないタイプは「人」と「IS」の動きを強制的に止めることが出来るのさ。効果はどちらも一瞬だが一瞬もありや充分だ。」

楯無「へえ・・・、色んなところで役に立ちそうね。」

皇牙「まあな。」

楯無「それにしてもおねーさん、キズものされちゃったなあ。」

・・・オイコラ、なんだその含みのある言い方は。

楯無「責任・・・取ってね？」

皇牙「なんでだよ。」

楯無「だってえ、乙女の体をメチャクチャにしたんだよ？「ちょっとマテ」なあーに？」

皇牙「第三者が聞けば、完璧に間違った解釈が生まれるから、止めてもらえませんかねえ！？」

楯無「でも、事実でしょ？」

こういう輩は何をいってもダメだ。諦めるしかないか・・・

楯無「責任取ってもらわなきゃ、言いふらしちゃうわかった」へっ？」

皇牙「わかったっていったんだよ。きつちり責任取ってやるよ。男だしな。」

楯無「え？え、ええええええええっ！？」

楯無は冗談半分、からかい半分で言っていたが皇牙がマジで「責任を取る」と発言をしたため予想外の事に驚いていた。

皇牙「何を驚いているんだよ？取れって言ったのはアンタだろ？で、

「アンタのことなんて呼べばいいんだ？」

楯無「え、えつと、たっちゃんか楯無さんで。」

皇牙「んー、言いにくいから俺だけの愛称でも考えるか。」

楯無「あ、愛称!？」

皇牙「ダメか？」

楯無「いや、ダメじゃないけど・・・」

皇牙「そうか、ちょっと待ってくれもう少して浮かびそうだ。」

楯無「(あ、愛称ってことは私たち「そういう関係」になるってことだよな!?!?!?)」

たとえ、IS学園の長でもこのようなことに関しては対処の出来ないことなのか、その表情は十代の恋する乙女の顔だった。

皇牙「そうだな。識なんてどうだ？」

楯無「識？」

皇牙「更識 楯無って名前をバカにはするつもりじゃないけど言いづらいから、かなり安直だけど、識の部分をそのまま使って呼ぶよ。いいか識？」

楯無「識／／／／／」

と言われた後、顔が真っ赤になり、そのまま寮に戻ってしまった。

V S 更識楯無（後書き）

フラグの立ち方下手くそで泣きそう。文才が本当に欲しい・・・

技の説明

残影牙・・・蛇刹からの派生の一つ、相手の足もとを掬う様に攻撃する。

蛇翼崩天刃・・・ISの脚の部分をエネルギーで覆い、思いつきり上空に蹴り上げる、攻撃直前、一瞬だけ姿が消える。

ラピッドキャンセル・・・シールドエネルギーは50消費することで行動を強制的に解除することが出来る。

鳳・鈴音（前書き）

ちよつと、無理矢理詰め込んだ。

鳳・鈴音

「一夏side」

「一夏「転校生？」

この時期にくるとはまた厳しいはずだぞ。国の推薦がなければできないことだ。

皇牙を見ると、どうでもいいらしく「一眠りするか」と言わんばかりのあくびをしていた。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

とクラスメートの一人が教えてくれた。

第「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

クラス対抗戦とは字の如く、クラス代表同士によるリーグマッチだ。ちなみに、これはクラス単位での交流及びクラスの団結のためのイベントも兼ねているらしい。その為か、優勝したクラスには学食デザートの半年フリーパスが配られる。皆さん、目が燃えているよ。

「今のところ専用機を持つてるクラス代表は一組と四組だけだから、余裕だよ。」

と女子一同は楽しそうに談話中。

「????」 その情報、古いよ」

と入口付近ですげえ聞き覚えのあるようなこえがした。

「????」二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないから。」

と腕を組み、片膝立てながら持たれている少女。

一夏「鈴?・・・お前、鈴か?」

鈴「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

一夏「何格好つけてんだ?ものすごく似合わないぞ」

鈴「んなっ・・・!?なんてこと言うのよ、アンタは!」

ようやくまともな喋り方をした。若干引いたぞ。

???「おい」

鈴「なによ!?!」

バシッ!

強烈な一撃を入れたのは我らの担任 鬼教官登場である。

千冬「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

鈴「ち、千冬「バシッ!」」

千冬「織斑先生と呼べ。そして、入口を塞ぐな、邪魔だ。」

鈴はもうダツシュで二組に帰った。

去り際に「逃げないでね」と言われたが、学園内に居る以上、嫌でも合うだろ。

このやり取りがあつた後、箒、セシリア+数人が俺の元に集まつて来たが、この場に居る人を忘れていないだろうか・・・?

バシバシバシバシバシ!

千冬「席につけ、馬鹿共。そして、天龍覇お前は起きろ。」

出席簿が火を噴いた。

その後、今まで寝ていた皇牙にも出席簿が飛んだが、華麗に避けていた。

千冬「ほう、よく避けたな」

皇牙「悪意のある攻撃、察知できるもんで。」
と言っていた。

俺も習おうかな、その技術・・・

そして、今日も一日ISの訓練と学習が始まる。

「一夏side」

「纂・セシリアside」

纂「(さっきの女子は何なのだ・・・一夏と随分親しそうだったが)」
「授業中だがなかなか集中できない纂。」

だが、纂は自分が一夏と同じ部屋と気付いた瞬間、上機嫌になっていた。

纂「(またISの事を教えてやるか。今日の放課後は特訓だな)」
と頷いていた。

千冬「篠ノ之、答えは？」

纂「は、はいっ!?!」

気が付いたときには遅かった。今は授業中、しかも織斑先生の授業である。

千冬「答えは？」

纂「き、聞いてませんでした・・・」

ばしーんっ！いい音がクラスに響き渡った。

そのとき、教室の後ろではセシリアはノートにシャーペンを走らせていたが、文字には見えなかった。というよりも字になっていない。

セシリア「(なんなんですか、さっきの方は!)」

考えているの事は纂と全く同じことだった。

言葉に表せないモヤモヤがセシリアをじらせていた。

しかも、相手は専用機持ちこちらの手札を無効にされているのが更

なるじらしになっていた。

セシリア「(ISの模擬戦だけでは足りませんわ。もっとなにか、
こう決定的になるような)」

千冬「オルコット」

セシリア「・・・例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な
・・・」

千冬「・・・・・・・・・・」

ばしーん！ふんわりとしたブロンドの髪が出席簿によって圧縮され
た。

皇牙「今日も出席簿が響き渡るなあ・・・。」
とつかアホじゃないだろうか？

〔箒・セシリア side out〕

〔一夏 side〕

あのあと昼飯を皆で食い、鈴の触れ合いを全員に話した。その放課
後、皇牙は用事があると言って別れ、俺たちは第三アリーナに行き、
箒との近接戦の訓練をしようとしたがセシリアの乱入により、箒V
Sセシリアとなった。

・・・死ぬかと思った。

そのあと鈴がピットに居て、訓練後のタオルやら飲み物やらをくれ
た。

最後に、箒が一緒の部屋ということがバレた。
なにやら独りでに納得していたが、何を納得していたのだろうか？
少し経ってから、鈴が箒に対して「部屋替わって」とお願いしてき
た。

と今でも話し合いが続いているが、出口が見えない。
はつきり言おう、この二人相性最悪である。

じれったくなくなったのか箒が竹刀で鈴に振りかかったが、目に見えぬ速さで腕のみISを展開していた。

あのあと、「約束覚えてる？」と言われたので、一応記憶に残っていた言葉を言ってみたが違ったみたいだった。

しかも、鈴を怒らせ去り際には涙まで見えていた。

・・・あれは俺が悪いんだろうな・・・

次の日・・・

クラス対抗戦の相手は 鈴だった。

クラス対抗戦が近づくにつれ、鈴の怒りのオーラが日に日に増している。

正直近づきにくい。

来週には対抗戦リーグマッチが開催される。その為、いつものメンツ、俺、皇牙、セシリア、箒と数人のクラスメイトはそろそろとアリーナに着いてきた。

そこには何故か、仁王立ちで鈴がいたが・・・

鈴「待つてたわよ、一夏！」

一夏「何やってんだ？鈴。」

皇牙「一夏、コイツが？」

一夏「ああ、皇牙には言ってなかったな、セカンド幼馴染の鈴だ。」
と俺は軽く紹介した。

鈴「アンタ、どっかで見たような気が・・・？」

皇牙「気のせいだよ。天龍覇 皇牙だ。よろしく。」

鈴「中国代表候補生、凰 鈴音よ・・・思いました！アンタ、賞

金首『蒼（碧）の魔導書』ね！」

思いだしやがった！忘れてくれればいいものを。

後ろを見てみると、「そのことについて詳しく知りたい」というクラスメイトからの視線が凄まじかった。

一夏「皇牙、お前賞金首ってどういうことだ？」

皇牙「……IS学園に来る前まで賞金首になるようなことを各地でやっていた。ただ、それだけだ。」

セシリア「それだけって……それだけでも問題でしょう!？」

箒「皇牙、お前犯罪者だったのか？」

皇牙「万人から見れば、俺のやったことは犯罪者に見えるだろうな。だが一部から見れば正義にも見える。事情も知らない人間が舐めたこと言うなよ。」

と意味深な答えが返って来た。

セシリア、箒、鈴は納得しないという顔をしていたが、鈴は本来の目的を果たすべく、再び俺に問いてきた。

鈴「さつさと私に謝りなさいよ、バカ一夏!」

一夏「なんで馬鹿なんだよ。バカが」

鈴「馬鹿とは何よ馬鹿とは!この朴念仁!間抜け!アホ!馬鹿はアソタよ!」

さすがにこの罵詈雑言に耐きれず、言っちゃいけない『一言』を言ってしまった。

一夏「うるさい、貧乳」

あ、やばい。

ドガアアン!!!!

皇牙を見ると半ば呆れかえっていた。視線に気が付いたのか、俺に『お前はバカか?』と言っていた。言うな、俺も後悔している。

鈴「ちよつとは手加減してあげようかと思っただけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望どおりにしてあげる。

全力で、叩きのめしてあげる。」

『全力』という部分がやけに強調された。

最後に鋭い視線を俺に送ってから、ピットを出ていった。

〈一夏side out〉

『甲籠（シエンロン）』と侵入者（前書き）

長いです。そしてようやく、原作一巻が終わった・・・

『甲龍(シエンロン)』と侵入者

「一夏side」

試合当日、俺と鈴はピットで静かに試合開始の合図を待っている。

『それでは両者、既定の位置に付いてください』

アナウンスが流れ、俺と鈴は空中で向かい合う。

鈴からの開放回線オープン・チャンネルで言葉を交わした。

鈴「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シルドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

ぶっちゃければこういうことを言っていた。

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

そのあと、ブザーが鳴り、試合開始となった。

ブザーが鳴り終わると同時にお互いは動き、《雪片式型》と《双天牙月》がぶつかり合い、一夏は弾き飛ばされた。

なんとか二次元躍動旋回をどうにかこなして、鈴を正面に捉えた。鈴は高速回転させながら斬りこんでくるため、捌くのにも苦労した。

鈴「甘い！」

一旦距離を取ろうとしたとき、鈴の肩アーマーの中心が光った時、俺は目に見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

「一夏」ジャブ「つつっ！」

鈴「今のは牽制よ」

牽制の次は本命が相場である。

思いつきり吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。ダメージは76も食らっていた。コイツはマズイ。

〈一夏side out〉

〈皇牙side〉

鈴の衝撃砲を避けている一夏はジリジリとエネルギーが減っていた。
（あの衝撃砲、砲身が見えないのに一夏はよく躲すな。大方、ハイパーセンサーに探らせているんだろうな。）

と考えていた内になんとも言えない、ざわめきを感じるようになった。

（なんだ、この感覚は？妙に心が落ち着かない。なんとというか視線を感じる。）

（だけど、敵は見渡す限りいない。）

千冬がそわそわしている、皇牙に聞いてきた。

千冬「天龍覇、どうした？」

皇牙「・・・いや、何でもありません。」

と答えたが、その答えがすぐに解ることになった。

〈皇牙side out〉

〈一夏side〉

俺が覚えた技術『イグニッション・ブースト瞬時加速』は出どころさえ間違えなければ、代
表候補生クラスと渡り合えるものだった。それをやろうとした瞬間、
突如大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

ズドオオオン!!!

突然の侵入者は全身が真っ黒の『全身装甲』だった。

『織斑くん、鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

一夏「いや、先生たちが来るまでやりませう。．．．鈴、準備はいいか？」

鈴「誰に言ってるのよ。．．．アンタこそ覚悟はいい？」

『もしもし！？織斑くん聞いてます！？鳳さんも！聞いてますー！』

二人は聞こえていなかった。目の前の敵に集中していた。

一夏「んじゃま」

鈴「ええ」

一夏・鈴「やりますか！！」

とお互いの武器の切っ先を鳴らし、侵入者の元に駆け寄った。

〈一夏 side out〉

〈皇牙 side〉

『もしもし！？織斑くん聞いてます！？鳳さんも！聞いてますー！』

千冬「本人たちがやると言っているんだから、やらせてみてもいいだろう」

真耶「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

千冬「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

とって、コーヒーに砂糖を入れようとしていたが、見たところ「塩」を入れていた。

皇牙「千冬、それ塩だぞ？」

千冬「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピタリッ！と動きを止め、白い粒子を容器に戻した。

千冬「なぜ塩があるんだ？」

皇牙「さあ？取り敢えず、お前が一番動揺してんだから、落ち着けよ。」

千冬「・・・・・・・・・・・・・・・・」

非常に嫌な沈黙だった。

真耶「あっ！やっぱり弟さんが心配なんですね！？だからそんなミス・・・・・・・・」

ああ、山田先生のほか・・・

千冬「どうぞ」

真耶「へ？あの、それ塩が入ってるやつじゃ・・・・・・・・」

千冬「どうぞ」

真耶「いただきます・・・」

千冬「熱いので一気に飲むといい」

悪魔がいるよ。

セシリア「先生！私にIS使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

千冬「コレをみる」

と言って画面を叩いた。

『遮断シールドレベル4、扉が全てロックされています。』

千冬「現在、三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。シールド

を解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」

皇牙「・・・千冬、シールドを張り直すことって出来るか？」

千冬「出来ないことはないがどうするつもりだ？」

皇牙「俺がアレを倒す。」

千冬「・・・いいだろう、行け。」

真耶「いいですか!？」

皇牙「悪い、あとこれからやることに緘口令敷いてくれ。まだバラすわけにはいかんのよ。」

千冬「準備しておこう。」

と三人をそっちのけで進めていたら、セシリアが着いていくと言いだした。

皇牙「お前はダメだ。」

セシリア「何故ですの!？」

千冬「お前の装備は一对多向きの装備だ。邪魔になる。」

セシリア「そんなこと「邪魔だ」なっ!」

皇牙「邪魔だ、って言うてんだよ。ボケ。だいたい命を掛けた戦いもしていねえ奴が来ても、枷にしかならん。「それに」」

千冬「それに、連携訓練、お前の役割、ビットの扱い方、味方の構成をすべて把握しているのか？」

セシリア「もういいです。」

げっそりしていた。

皇牙「まあ、見ておけ。世界に名を馳せた『蒼(碧)の魔導書』の力を見せてやるよ。」

〈皇牙side out〉

〈一夏・皇牙side〉

何度も、かわすことの出来ないハズの攻撃をしているが、敵のISはそれを軽々と避けている。しかも、鈴の衝撃砲を叩き落としてい

る。七度目だった。
そんな中、俺は思ったことを口にした。

一夏「なあ、鈴。アイツの動き、ヒト型のロボットいただろ？アレに似ていないか？」

鈴「いたっけ？」

一夏「あれ、本当に人が「バリイン！！」え？」

予想外の人物がアリーナに入ってきた。

皇牙「おじゃまします」

間延びした声が響いた。

敵のISもそちらを見ていた。

一夏「なんでここに来たんだよ！？皇牙！！」

皇牙「アレを倒すに決まってるんだろ？解ったことを聞くなよ。」

鈴「アンタじゃ無理よ。さっさと帰りなさい！！」

つたく、コイツラは・・・

皇牙「お前らの方が無理に決まってるんだろ。端にいる。」

と言ったとき「キーン」と響いた。

箒「一夏あ、男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてな
んとする！！」

ヤバイと俺が思ったとき、皇牙がすでに動いていた。

ズドオオン！

箒に向けて、ビーム砲撃を撃った敵のISだが直撃せず、皇牙が盾
となった。

皇牙「ぐお！？」

一夏・鈴・箒「」「皇牙！？」「」

皇牙「調子に乗ってんじゃねえ！！！」

「第六六拘束機関解放！

次元虚数方陣展開っ！

イデア機関接続、最大出力

！！

魅せてやるよ！！

『蒼』の力を！

“蒼^{ブレイブ}の魔導書”起動！！”

といい蒼の魔導書を起動させた皇牙は高速で敵のISの懐に潜り込み、エネルギー攻撃で思いつきり吹き飛ばした。

『カーネージシザアアー！！』

バゴオオン！！

吹き飛ばされた敵のISは壁に激突し、そのまま地面に激突するかと思いきやその真下には皇牙がいつの間立っていた。

皇牙「まだ、終わりじゃねえぞ！」

『ブラックオンスロット！！』

セラミックの大剣がサイス（鎌）に変形し、敵を上から下から横からと切り刻んだ。

の力を！！

皇牙「魅せてやるよ、『蒼』

二度はねえよ。

ナイトメアレイジ

！！

デストラクション

！！

これが『蒼』の力だ・

・！！

強大な一撃を喰らった敵のISは真つ二つになって地面に激突した。皇牙は腕を振り降り降ろしたとき、力の余波で、紅黒い翼のように見えた。

終わったことを確認したのか一夏がISに近づいたとき、左腕のみが動き一夏を掴み、最大出力形態でビームを放ち、一夏はそれに呑み込まれた。

く一夏・皇牙side outく

く千冬sideく

カタカタカタカタ・・・

真耶「あれ、織斑先生。織斑くんのお見舞いはいいんですか？」

千冬「先程、済ませてきた。無事だったよ、多少二、三日不自由はあるがね。」

真耶「そうですね、大事に至らなくてよかったです。」
と安心して一息ついていた。

千冬「で、どうだ？結果は？」

真耶「出ましたよ、あれは 無人機です。」

千冬「そうか」

と答えた後、「やはり・・・」と呟いていた。

その時の表情は世界最高位の座に居た時の表情だった。

〔千冬 side out〕

〔皇牙 side〕

その後、部屋の調整が出来たらしく、箒は別の部屋に移っていたがどこか機嫌が悪そうだった。・・・なんか余計なこと言ったな、アイツ。

夜・・・

箒が一夏のところに訪ねていた。

箒「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが・・・、私が優勝したら、付き合ってもらおう!!」

と恥ずかしそうに言っていた。

アレ？これって、告白じゃね？

でも、一夏は唐変撲だから、絶対勘違いしてると思うんだよね。

ま、頑張れ。箒、セシリア、鈴。

と一夏に想いを寄せている三人を応援した。

ちなみに今現在、俺は識を追い出そうとマジで必死になっている。気が付いたら、部屋の中に居た。

皇牙「なんでいんの!？」

識「今日の闘う姿がカッコよく見えたので、来ちゃった、テへ？」
テへじゃねえよ。

．．．今日寝れるかな、俺。
（皇牙 side out）

一夏の親友に会って来た。前編（前書き）

どうしてこうなった!!

新たな転校生を出そうとしていたのに、一話にまとめられないなんて・・・

ということまで二つに分けます。

ゴメンナサイ。

一夏の親友に会って来た。前編

「一夏・皇牙・弾・蘭side」

弾「で？」

一夏「で？つて、なにがだよ？」

現在、俺と弾は格ゲーの最中だ。皇牙はファッション雑誌などを見ながら、後ろで見物中だ。

弾「だから、女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？」

してねえっつもの！何回言わせるんだ、コイツは？

五反田 弾とは中学からの付き合いだ。今日休日なので実家の様子を見に行き、ついでに弾に皇牙を紹介しようと思いついたわけだ。

弾「嘘をつくな嘘を。お前のメール見てるだけでも楽園じゃねえか。なにそのヘブン。招待券ねえの？」

ねえよバカ。

ちなみに今やっている格ゲーは『インフィニッザマスタースカイIS/VIS』っていう各国の代表機を集めた格ゲーだ。

当然の如く、メツチャ売れたがその分批判も爆発的に凄まじかった。『我が国の代表はこんなに弱くない！』との批判の声が飛んで来た為、各国の最高性能化されたやつが出されたが、バカ売れ状態だった。

弾「で、コイツが例の？」

一夏「ああ、IS学園で唯一の男友達の天龍覇 皇牙だ」

皇牙「天龍覇 皇牙だ。名字で呼ばれるのはあんまり好きじゃないから、出来れば下の名前で頼む。」

弾「ああ、五反田 弾だ。ところで皇牙、いちく「お兄！」」

ドガン！

とまた勢いよくドアが開いた。・・・ん？

蘭「お兄！さつきからお昼出来たって言ってるじゃん！さつきと食べに」

ドアを蹴り開けて入って来たのは弾の妹、五反田 蘭。歳は一個下で中三。

有名私立女子校に通っている優等生。うん、兄とは違っただよ兄とは。

一夏「あ、久しぶり。邪魔してる」

蘭「一夏さんと・・・あっ！」

皇牙を見て、驚いている声を出している蘭。うん？すでに知ってるの？

しかし、アレだな。IS学園の寮で暮らすと周りにはほぼ女子のだからな、薄着やラフ着が多いためなんというか慣れた。というより慣れざるおえなかった。と言った方が正しいな。

しかも、暑くなってきたのか胸元を開放する女子が増えて、目のやり場に困る。

皇牙は大して気になっていなかったが・・・。その図太い神経がうらやましい。

気が付いた時の女子の視線なんてかなりきついもんだぞ？

一夏「蘭ちゃんは、皇牙のこと知ってるの？」

蘭「前にちよつと何度か助けてもらって・・・」

弾「そうなのか？皇牙」

皇牙「ん、うん。ちよつと待って、記憶蘇らせているから」

蘭「あの時は制服だったのでそれで思い出しにくいのかもしいですね。」

皇牙「あ！ああー、思い出した。あのとき女生徒か！！しかし、弾の妹だったとは。」

一夏「あの時ってなんかあったの？」

蘭「ええ、街を歩いていたら、ナンパにつかまってしましまして……」

皇牙「そんなとき、その辺を歩いていたのが俺で嫌がっているのに無理矢理誘うとしていたから、ブツ飛ばしたんだよ。」

蘭「一度目は突風のように現れて嵐のように去って行ったんですが、その二日後ぐらいにまたナンパに遭いまして……」

弾「そんな時に再び皇牙が現れたと？」

皇牙「そ、しかも以前ブツ飛ばした奴で俺に仕返しをするために蘭に迫っていたから、二度とふざけた真似が出来ないようにちよつと『叩き』潰しただけさ。」

蘭「あの時は凄かったですね！男どもがポンポンと宙に舞っていましたからね。」

あの時は、ちよつと機嫌が悪かったのである。なんせ東に世界中に公表された後なので気が立っていた。とりあえず暴れたいという欲求が大きくなっていた時に、ナンパ集団登場！

生贄になってもらいました。

それでも、欲求が消えることなく過ごしていたら、再びナンパ集団登場！その時は、複数のチンピラも連れていたため、巻き込ませてもらいました。

スツキリした俺は周りを見てみると、結果的に人助けをしていたわけだ……

蘭「あ、あのき、来ていたんですか？」

皇牙「おう、一夏に誘われてな。家の様子も見てみたかったし。あ、皇牙って呼び捨てでいいよ。」

蘭「す、すみません。こんな姿で……／＼／＼」

と言つて、顔を赤らめている蘭ちゃん。なんで？

弾「蘭、お前なあ、ノックぐらいしろよ。恥知らずな女だと思われ

ギンツ！と蘭の視線一閃。

その瞬間、弾が某配管工の男のように縮んでいく。戦力図を一瞬で把握した俺。

蘭「あ、あの、よかつたら一夏さんにご、皇牙さんもお昼をどうぞ。まだ、ですよね？」

一夏「うん。いただくよ。」

皇牙「スマンな、いただきます。」

蘭「い、いえ・・・」

と言った後、蘭は出ていった。

なんか「ガタガタツ」と忙しい音が聞こえたが、十代の乙女だから問題ないな。

・・・いや、あるから。

ん？なんかツツコミが入ったが気のせいだな。

昼食・・・

弾「うげ」

蘭「なに？何か問題でもあるの？あるならお兄ひとり外で食べてもいいよ」

弾「聞いたか皇牙に一夏。今の優しさに涙が出ちまうぜ。」

皇牙「アホなこと言ってないで、メシを食おうぜ。せっかく作ってもらったのに冷めては、作ってくれた人に失礼だ。」

蘭「そうよ、バカ兄。さっさと座れ。」

こうしてテーブルに俺、皇牙、弾、蘭という並びに座る。・・・ん？

一夏「蘭さあ」

蘭「ひゃいつ？」

一夏「着替えたの？どつかで掛ける予定？」

蘭「あつ、いえ、これは、その、ですねっ」

と言つて、皇牙を恥ずかしそうに見ていた。

さっきのラフ姿ほ微塵も残っておらず、髪をおろし、ロングストリートにしてキューティクルになっている。服装は半袖のワンピースにわずかにフリルのついた黒いニーソックスは好きな人はたまらないだろう。

俺は知らんよ。

一夏「ああ！」

閃いた、俺。その時、皇牙はバカなこと言うなよ？と顔をしていた。女子が気合を入れて着替えてるんだ、これに間違いはない。

一夏「デート？」

蘭「違います！」

皇牙は呆れてモノも言えないという表情をしながら昼食を食っていた。

弾「違うっつーか、兄としては違って欲しくもないんだがな。何せお前がそんなに気合入れたおしゃれをするのは数カ月一回」「瞬撃のアイアンクロー……いや、口封じ（マウスキラー）というやつか。

俺の目でも負えないほどの早さだった。

今時の女子中学生は怖いな、オイ。

弾と蘭の間でなにやらアイコンタクトが発生中……

そこに弾と蘭のじいさんが登場。

五反田 廠が登場。

廠「食わねえなら下げるぞ三人とも」

三人「……いただきます」「」

廠「おう。食え」

ちなみに一夏が教えてくれたが、食事中のマナーが悪いとおたまや中華鍋が飛んでくるらしい。……気をつけよう。

色々とお話し中……

部屋の話になり、一夏が幕と同部屋になったと聞き、蘭が……
蘭「で、では、まさか皇牙さんも？」

一夏「いや、皇牙は一人部屋だけど、ここ最近女子の声かしてただけど？」

ちよー！？おま、なんてこと言ってくれてんの！？

蘭「……お兄。後で話し合いましよう……」

弾「この後、三人出掛けるから……」

弾は汗を滝のように流している。

蘭「では夜に」

あー、今日は寝れないな、こりゃ。

蘭「……。決めました」

なにが？

蘭「私、来年IS学園を受験します。」

弾「お、おまえな」 「ガンツ！」

スゲエな、アレ……。一分の狂いもなく当てたぞ。

一夏「蘭の学校ってエスカレーター式で大学まで出れて超ネームバリューのあるところだろ？」

蘭「大丈夫です。私の成績なら余裕です。」

弾「I、IS学園は推薦ないぞ……」

とよる付きながら立ち上がる弾。体力は低いが復活が早い。ライフ リスポーン

弾「しかも、一夏確かあそこって実技あるよな！？」

一夏「ああ、あるぞ。適性がない奴はそれで落とされるらしい。」

蘭「……」

無言でなにやら紙を取り出ししていた。

弾はソレを受け取り、悲鳴っぽい声を上げていた。

弾「IS簡易適性試験・・・判定A・・・」

蘭「問題はすでに解決済みです。」

・・・抜け目ねえな。

蘭「で、ですので、皇牙さんにはぜひ先輩としてご指導を・・・」

皇牙「ん？俺なんかでよければ、別にかまわないぞ。受かったらだけど。」

話の流れでつい答えてしまった。まあ、いいか。

弾が家族に対して言い争っているが、巖さんの一喝によって、黙った。

一夏がコイツ弱いなあ。俺なら身内にもびしっと言うぞと呟いていたので、言っちゃった。

皇牙「一夏、お前まさか千冬に勝てると思ってているのか？」

一夏「すみません。前言撤回させていただきます。m(_____)m」

そんな感じで話していたら、弾が小声で話しかけてきた。

弾「皇牙、お前今すぐ彼女作れ。」

皇牙「はい？」

弾「はいじゃねえ！今年、いや今月中に！誰でもいいk「お兄」「

あ、蘭が戻って来た。なぜだろう？周囲の気温が一気に下がった気がする。

弾「お、おおおお、おう。なななんだ？」

蘭を見ると、先程まで可愛らしい表情はなく、そこには般若が立っていた。

『余計ナコトヲスルナ』

・・・パネエ。

それからして、昼食を食べ終えた俺は一夏たちと別れ、一足先に寮に帰った。

く一夏・皇牙・弾・蘭side outく

一夏の親友に会って来た。前編（後書き）

これ、sideいらねえんじゃないの？

そして弾と蘭が登場！

この作品では蘭は一夏ではなく皇牙が好きです。

惚れた時期は設定上、ナンパから助けてもらったときに見た背中がカッコよく見えて惚れたことにしています。

蘭ファンの皆さまコメントサイ・・・

そして次回、開始早々多分エロいです。

一夏の親友に会って来た。後編（前書き）

はい、前回言ったようにエロくなりました。

そして、今回のみ性格が木端微塵に吹き飛びます。

最後に色々と調子に乗った。後悔も反省もしてない。

一夏の親友に会って来た。後編

（皇牙side）

一足先に帰ってきた俺に待っていたのは、地獄だった。

ドアを開けたら、識がベッドの上で熟睡していました……。しかも、Yシャツ一枚でした……。コレ他人が見たら、絶対勘違い起こすよな？

どーすんだ？コレ……。

他人が来る前に起こすか。

皇牙「オイコラ、識起きろ。寝るなら自分の部屋で寝ろ。」

識「うん〜ん……」

と寝返りながら、手を俺の首の方に寄せてきたので回避した。

危ねえ、あれ避けなかつたら、今頃キスしていたな。

と思つたら、再度手を伸ばしてきた。

安堵していたのか、避けるの失敗した俺はそのまま引き寄せられ、キスするハメとなった。

皇牙「識、テメエ起きてやがったな！！離せ、こら」ちゅぱっ」

「ちゅぱっ……ちゅむうっ……あうん……むちゅっ！」

しばらくお待ちください

……ディープキスでした。

なんだ、その目はうらやましいだど！？

こっちはマジで大変だったんだぞ！？

主に引き剥がすのに……

取り敢えず、この体勢をどうにかしないと……。

識の上に覆いかぶさっている。

覆いかぶさされている識。しかもYシャツ一枚で汗もかいている。かなりヤバい。(二重の意味で)

そこに予想外の展開が……!!

〔皇牙side out〕

〔識side〕

私は皇牙くん「識」と呼ばれてから、胸が落ち着かないわ。

その為か夜も寝れず、寝不足になっていた。

休日である今日、皇牙くんの部屋に訪れてみたが部屋の中には本人がいなかった。

取り敢えず、中に入った。

目に付いたのがベッドだった。勢いよく飛びこんだ。

識「これが、皇牙くんが毎日使っているベッド……ふぁ。」

飛びこみベッドにうつ伏せた瞬間、眠気が急に強くなりそのまま目を閉じた。

……zzz

ガチャ!

ドアが開いた音がしたがしばらく寝ていなかった為か、再び目を閉じた。

なにやら、私の上で喋っている。

うるさいな、寝れないじゃない!

???「……ラ、識……。……なら……。……屋で……。」

誰が喋っているのか薄眼で見ると、この部屋の主人の皇牙くんでした。

識「(え、ええ!?!な、なんで皇牙くんがここに居るの?!)」

・・・そりゃ、ここがコイツの部屋だからだ。

識「(今、『なに、当り前なこと聞いてんの?』のような声が聞こえたけど、そんなことはどうでもいいわ。これはチャンスよ!!寝ぼけているフリをして、キ、キスを・・・!!)」 うんくん・・・

手を伸ばしたが、回避された。

皇牙くんが避けたことに安堵したのを見計らって、再度チャレンジしたら、見事に捕まえることができた。

皇牙「識、テメエ起きてやがったな!!離せ、こら」ちゅぱっ!」?

「ちゅぱっ・・・ちゅむうっ・・・あうん・・・むちゅっ!」

識「(しちゃった・・・。///)」

このあと、あんなことになるなんて・・・

識side out」

く千冬side」

この前の襲撃者を倒した映像を見ていた私は、皇牙のISSの力を聞くべく、奴の部屋に向かった。

更識を倒した時の威力と段違いの威力に気が付いたからだ。

千冬「皇牙、居るか?」

とドアをノックしたが、返事がなかった。

だが、部屋の中から音がしたため、聞こえなかったのだろう。

千冬「皇牙、入るぞ。」

〔千冬 side out〕

〔修羅場〕

千冬「皇牙、入るぞ。……!!」

最初に目に入ったのが更識を押し倒している皇牙。

千冬「皇牙、貴様何をしている!!」

皇牙「ま、待て千冬!! 誤解だ!!」

千冬「貴様、休日に女を連れ込みいやらしいことしていたのか!!」

皇牙「してねえよ!!? 帰ってきたら、識が俺のベッドで寝ていたから、自分の部屋で寝るように催促してたんだよ!!」

と言いながら迫ってくる千冬。……ヤバイ、実にヤバイッ!

識「違いますよ、織斑先生。皇牙くんは催促しようとしたフリして、

私の“ファーストキス”を奪ったんですよ。しかもディープリキスで

(本当は私からしたけど)」

と核爆弾投下。

.....

嫌な沈黙だ。そして、俺の命が一気に危険だ。

千冬「ほう? 奪ったねえ? どういうことが“話し合おう”じゃないか。なあ? 皇牙君?」

皇牙「オイ、ちよつとマテヤコラ。奪ってねえ!! 識の方からして来たんだよ!!」

識「あんなに激しいキスをしといて、逃げるつもり?」

皇牙「してねえ!!」

千冬を見ると、爆発一歩手前だ。

さて、どうやってここから逃げよう？

というか、もう何も言っなよ？マジで言っなよ！？

・・・人はソレをフリって言うんだぜ？

うるせえよ！！

識「織斑先生、私たち“恋人”なんです。」

ブチッ！

何かが切れる音がした。いや気のせいではなく本当に。結果は言わなくても分かってる。

千冬がキレた。

千冬「皇牙、ちょっと来い。」

皇牙「……………拒否権は？」

千冬「ない」

皇牙「ノオオ

(。 。 ;)

！！！！」

さて、現在前方には千冬、後方には識。

前門には狼。

後門には猫だと思ったら実は虎だった。

なんだコレ？突破するの無理じゃね？

だが、俺はガチで逃げるため力を使うことを惜しまねえ！！

皇牙「(龍化、オオナズチ)」

と頭の中で唱えた後、どこからも取りだした煙幕を張りその瞬間姿を消し、ドアの方に行こうとしたが、すぐに追いつかれると思ひ逆

の方向、窓を開けようとした瞬間・・・

識「そつちね!!」
バレた。

なんで分かるんだよ!!オカシイだろ!?

急いで、部屋を脱出し逃げた。

だって、後ろから追ってきてるんだよ。

こうして、命がけの逃走劇が始まった。

〈修羅場end〉

R u n f o r l i f e

逃走中

!!

F i n a l m i s s i o n

深夜まで逃げ

切れ!!

(推奨BGMは逃走中のBGMで)

結果・・・

逃げ切れませんでした。

二人が手を組むなんて予想外の動きをされた。チクショーが!!

〈尋問中〉

とある一室・・・

千冬「さて、すべて吐け。」

皇牙「全部最初に言っただわ、ボケ!!」

識「違いますよ、先生。私の言い分が正しいんです！」
皇牙「識はちよっと黙ってくれませんかねえ!？」

そこにさらに爆弾が投下された。

千冬「……私とも一緒に寝たクセに……」

識「……なんですって!？」

皇牙「ちよ、おま!!何言ってるんだよ!？」

ドイツに居たところに何度か寝たのである。

全部事故だぞ？

この発言を聞いた識は千冬に言った。

識「織斑……いや、“千冬さん”私負けませんよ？」

千冬「フン!やってみる。」

バチバチ!

と火花が散っていた。

識「さて、そのことについてたっぷり聞かせてもらわないとね？」

皇牙「え、ちよ、ま、まて待てマテっ!……アッー!!」

〈尋問中end〉

次の日……

俺はどこぞのボクサーのように教室で真っ白に燃え尽きていた。

皇牙「……(魂飛んでいます。)」

一夏「おい、皇牙大丈夫か？」

皇牙「……」

一夏「帰った後何があったんだ？」

皇牙「肉体的にも精神的にも地獄を味わっていた。」

一夏「……はあ？」

皇牙「お前も味わってみろ。どれだけ苦痛分かるぞ。」
一夏「なんでだよ、バカ。」

そんなこんなでSHRが始まり山田先生とちふY・織斑先生が入って来た。

何故か、千冬姉は艶っぽく見えた。昨日何があったんだろう。

千冬「では山田先生、ホームルームを……」

真耶「は、はいっ」

山田先生はバトンタッチされて慌てていた。

真耶「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

一夏「え……」

皇牙「……」

「……ええええええええっ!?!?!」

いきなりの転校生紹介に驚く、十代乙女達。

っていうか、皇牙はまだ死んでいた。起きろよ、親友。

と黙っていた時、入って来た。

????「失礼します」

????「……」

先程まで騒いでいた女子ズはぴたりと止まる。

そりゃそうだ。

だって、そのうちの一人が 男子だったんだから。

一夏の親友に会って来た。後編（後書き）

これ書いてた時、メツチャ楽しかった。

顔文字は時たま出しますので、ご了承ください。

またクラスが騒がしくなるな・・・(前書き)

詰め込み過ぎた・・・

またクラスが騒がしくなるな・・・

（皇牙・一夏side）

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。

と礼儀正しく、にこやかに告げてから、一礼していた。

「お、男・・・？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国より転入を

と言いながら、俺と皇牙の方を見ていたが、未だに皇牙は死んでいる。シャルルのイメージはなんとというか『貴公子』のような感じだな。

と思いに耽っていると、急にデジャヴを感じたため、耳を急いで塞いだ。

「きゃああああーっ！」

ソニックブームが発生した。

なんとか防ぎきったが、皇牙には痛恨の一撃だったらしく、戻りかけてた魂が再び、三途の川に向かっていた。

そこに千冬姉が愛用の出席簿アタックが火が噴いた。

バンッ！

三途の川に渡りかけてた皇牙の魂が戻って来た。

凄まじい、千冬姉の出席簿は魂さえ戻す力があるのか・・・

・・・あるわけなからう。

うん？なんか変な電波を感じたが気のせいだろう。

「あー、うるさい静かにしろ。お前たち。」

「・・・ハッ！俺は一体何を・・・？」

とこのやり取りの記憶がないみたいだ。別になくてもいいけど。

そのあと、皇牙は転校生二人に目に付いたが、あからさまに嫌そうな顔をいきなりしていた。

「マジかよ・・・」

と空を仰いでいた。

どうしたんだ？

「なんで、アイツがここに居るんだ？」

「アイツも今日からこのクラスの生徒だ、馬鹿者。」
と後ろから説明する千冬姉。

「勘弁してくれ、ストレスでぶっ倒れそうだ。」

その“アイツ”とはもう一人の転校生のことだ。

輝くような銀髪で、左目には眼帯。しかも黒眼帯。

印象は言わなくてもわかるが『軍人』、シャルルよりも若干背が低い。

「・・・」

当の本人は未だに口を開かず、腕組みしながら一瞬だが教室の女子達を下らなそうに見ていた。

だが、今は千冬姉と皇牙に視線が向いていた。

「・・・挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

無口からいきなり素直に返事をする。転校生に千冬姉は面倒くさそうな顔をした。

「ここでは“織斑先生”だ。そしてお前は一般生徒だ。わかったな。

「了解しました。」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスの女子は沈黙する。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

ああほら、見る。この空気のいたたまれなさに山田先生が泣きそう
だ。先生を泣かすなよ。と思っていたら、ラウラと目があつた。

「！貴様が」

と呟いた後、こっちに「ツカツカ」と歩いてきた後、「バシンツ！」
と思いつきり頬を叩いた。

「私は絶対に認めない。お前があの人弟など……！！」

「いきなり何しやがる！」

「ふんっ……………」

言いたいことだけ言って、「もうこちらに興味はない」と言わんば
かりの視線だつた。

「そして……………」

シュツ！

パッ！

ストンツ！！

一瞬の出来事に対応できないクラス一同。

「俺に奇襲は通用しねえって何度言えば分かるんだ？…………ラウラ」

「私は負けっぱなしが嫌いなんだ。だからこそ今度こそ勝たせても
らう！」

とこの一連の二人と千冬姉だけが反応していた。

簡単に説明すると、言葉を発したと同時にサバイバルナイフを俺の元に投げたが、それを空中でキャッチしそのまま勢いを殺さず、投げ返したんだよ。

髪の毛数本狙いで。

パラッ・・・と銀髪が何本か散りながら落ちていった。

「止めんか、バカ共。ラウラ、お前じゃ天地が引っくり返っても皇牙には勝てん」

「な、教官！？そんなものやってみないと分からないですか！！」

と言って再びナイフを投げようとするラウラを見て、皇牙は窓の近くまで行き、窓を開けた。

「悪いがお前の遊びには付き合ってられないからな、逃げさせて貰う！」

と言った後、窓から飛び出ていった。

「・・・なっ!?!」

「先にグラウンドで待ってるぜ・・・じゃくな」

そのあと綺麗に地面に着地し走って行った。

「・・・」

「あー、ではHRを終える。今日は二組との合同授業だ。各人すぐに着替えて第二グラウンドに集合。IS模擬戦を行う。以上!・・・織斑、デュノアの面倒を天龍覇とともに見てやれ。」

「了解です、織斑先生。」

では・・・これから血路を開くために死地に向かうか!

（皇牙・一夏 side out）

（シャルル side）

ボクは今、“世界で唯一ISを動かせた男と二番目の男”のクラスにいる。

もう一人の転校生が織斑先生の弟を叩いた。

「私は絶対に認めない。お前があの人弟など……!!」

ここに来る前に何かあったかもしれない。

そして、一瞬織斑先生の弟を見た後、ある方向からの視線が気になった。

クラスの一番後ろ窓側の席の方から視線を感じた。

確か……“二番目の男”の天龍覇 皇牙だっけ……？

ま、まさかバレた!?

あること(……)を思っていたのが杞憂に終わった。

シュツ!

パツ!

ストンツ!!

ええっ!?

今の出来事に最初のみ反応出来たけど、掴んだところから目に見えなかった。

凄いなあ、アレが“蒼(碧)の魔導書”の力の片鱗か……。

……出来るかな、ボクに……。

自分の決意が少し揺らいでた時、皇牙の姿はなく窓から逃走し走っていた。

無茶苦茶だな。

取り敢えず、第二グラウンドに行かなきゃ。

〈シャルルside out〉

〈ラウラside〉

私は教室に入る前だが、少しだけクラスの雰囲気を見てみると、この連中はISを何かのファッションと勘違いしている時点でレベ

ルの低さを感じた。

そして、教室に入り自己紹介をしていた。

「・・・挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

クラス中が沈黙していたが、挨拶をしると言われたのでしかたがなくやった。

そこで私が見た男は教官の弟だった。

私は、ずっと言いたかった事を口にした。

「私は絶対に認めない。お前があの人弟など・・・!!」

「いきなり何しやがる!!」

「ふんっ・・・」

言っっちゃった。

こいつが弱いせいで教官の優勝が消え失せたのだ。絶対に許すものか!!

そして、クラスの端に居るのはアイツではないか!!

今なら気が抜けていて反応出来ないハズ・・・!と思いナイフを投げたが、一瞬にして返された。

「・・・くそっ」

「俺に奇襲は通用しねえって何度言えば分かるんだ?・・・ラウラ」

「私は負けっぱなしが嫌いなんだ。だからこそ今度こそ勝たせてもらおう!!」

と言った後、黒板に刺さっているナイフを取ろうとした時、皇牙は逃げた。

「悪いがお前の遊びには付き合ってもらえないからな、逃げさせて貰う！」

そのあと気が付いた教官が連絡をし、解散となった。

「（皇牙、今度こそ勝たせてもらう！そして、織斑一夏。お前は必ず私が討つ……。）」

（ラウラ side out）

（皇牙 side）

はい、現在第二グラウンドに居ます。

色々とすっ飛ばし過ぎ？そんなもん知らん！！

ギリギリになって一夏とシャルルが来た。

一夏の後ろに鈴が居たらしく、なんか騒いでいる。

そこにセシリアも交り、大きくなっているがこの授業の担当者を忘れたんだろうか？

「一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

「安心しろ、バカは私の前にも二名ほどいる」

ホントにね。

バシーン！

いい音がグラウンドに響き渡った。

そのあとセシリアは文句を鈴は呪詛みたいに「一夏のせい」と何度も呟いていた。

どちらも自業自得だ。

一瞬、こつちの方をみた二人。

なんで、気付くんだらうね？

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの

十代女子と先程、ふざけた行為をした馬鹿がいるしな。」

誰だ、そんなことをしたバカは……

「鳳！オルコット！そして、知らないフリをしてる其処のバカ、天龍覇、お前だ！！」

「な、なぜわたくしまで!？」

「デスヨネー」

セシリアに関しては完全にとぼっちりだな。俺と鈴は当り前だけど……。

「で、相手は？いつそのこと、俺VS鈴・セシリア組でも構わんぞ？」

「慌てるな。相手は山田先生だ」

と言った後、山田先生は一夏に突っ込んだ。

そのとき胸を触っていたけど……事故だぞ？

でも、事故でも許さないのが恋する乙女たち、セシリアは『ブルー・ティアーズ』でレーザー射撃、鈴は『双天牙月』を組み合わせ一夏の首元目掛けて投げた。

間違いなくあの二人、一夏を殺る気だ。

だが、山田先生の的確な射撃により『双天牙月』の軌道はズラされた。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな、今の射撃ぐらい造作もない。」

「昔の話ですよ。」

「では戦ってもらおう。三対一だ。」
「言ってきた。」

「さすがにそれは……」

「ちよつと・・・」

と二人は乗り気じゃない二人。

「安心しろ、お前らじゃすぐに負ける。」

と言いきった。その“負ける”という言葉に腹を立てたのか。二人の目には闘志が宿っていた。

「では・・・はじめ!!」

四人は空中に浮かび、そのあと鈴とセシリアが突進した。

「あ、おい！作戦とかは・・・」

「ないに決まってるでしょう」

「臨機応変よ!!」

と突つ込む二人。

あゝあ、役割も決めずに行っちゃったよ。

ま、いいか。これを機にチームプレイつてのを教わってくれ。

俺はさらに高度を上げ、二人の様子を見ていた。

「では、山田先生が乗っているISについて・・・そうだな、デユノア説明しろ。」

「はい。アレはデユノア社製『ラファール・リヴァイブ』です。

長いからカット!

・・装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で参加サードパーティに多いことが知られています」

「説明御苦労・・・終わるぞ」

空中では・・・

山田先生の射撃により、セシリアと鈴を誘導しお互いを激突させ動

きが取れなくなっていたところに、グレネードをひ・と・つと言った感じに投げ、爆発し二つの影が地面に落ちた。

「あ、あんたねえ、何面白いように回避されてんのよ・・・！」

「り、鈴さんこそ、無駄にはかすか衝撃砲を撃つのがいけないんですわ・・・！」

と両者睨みあっていた。

「俺から言わされて見りゃ、油断して相手の力量を見誤ることが悪いと思うがな。」

と正論を述べた。

「うるさいわね！アンタは何もしてないでしょうが！！！」

「そうですねよ！ただ見ているだけだった貴方は黙ってなさい！！この猪どもは・・・。」

「役割も決めずにバカみたいに突っ込んだ仲間をどうやって援護するんだよ」

「全くだ、バカ共。お前たちはチームプレイという物を私直々に教え込んでやろう」

「んじゃ、俺も何をしている？・・・へ？」

「お前もやるんだよ。山田先生、準備はいいか？」

「はい、いいですよ」

「では、はじめ！！！」

「（どうしようかな？・・・ふむ。龍化、ナルガクルガ亜種）」

と念じ、ISはスリムになり、カクカクしていた状態から丸みを帯び空気の抵抗を極限まで減らし、機動性を上げたフォームとなった。そこに山田先生の『レッドバレット』が火を噴き、飛んで来たがソレを優雅に回避する。

だが、それは計算済みだったのか、避けた先にも弾丸を放っていた。俺は、一気にスピードを上げ、高速で避けながら武器を展開した。

【片手剣 マスターオデッセイ】

「あの状態から、さらに加速!？」

山田先生は驚きながらも、冷静に対処していたが突如慌てる。皇牙がこちらに向かってきてきているからだ。

「クッ!」

『レッドバレット』で弾幕を張りながら、後退しているが皇牙はその弾幕を掻い潜り、頭上から片手剣を振り降ろした。

ガキーン!

片手剣とライフルがぶつかり合った。

「今のを防ぎますか・・・」

「伊達に教師を名乗ってはいませんよ。」

と言った後、お互いは距離を離れた。

だが、山田先生は離すときに置き土産として、グレネードを投げつけてきた。

「!...オラア!!」

ゴン!!

「なっ!？」

持っている盾で弾き、空しく爆発は皇牙に当たらなかった。

「（体勢整っていない今がチャンスだ!!）」

一瞬立ち止まった後、『瞬時加速』を使い、山田先生の目前まで来た時、先生は何かを上空に投げ、すぐさま『レッドバレット』で撃つて来た。

それをなんとか盾で防いだが、山田先生の姿はなく探すとはるかに居た。
追いかけてしようとしたが、上から降ってきたものをみて、ぎょっ！と
した。

俺を中心にたくさんグレネードが落ちてきた。

「(マズッ・・・「チカツ」ヤバイ！！間に合うか・・・?!)」

ドガンー！！

「こ、これでやりましたかね・・・」

ハイパーセンサーで皇牙を探すように働かす山田先生。

煙が晴れていき、そこには黒い『鎧』を纏ったISが立っていた。

「(龍化、グラビモス亜・・・ぐう!)」

丸みを出していたISから黒くて鎧のようなものに身を包みこみ、
爆発から護ろうとしたが、全身を包み込む前に後ろから衝撃が襲い
展開出来ずにダメージを負った。

「そんな・・・」

「俺の負けだ。」

「へ・・・?」

「俺の負けですよ、山田先生。」

「あ、はい。分かりました。織斑先生終わりました。」

「御苦労、戻って来てくれ。」

二人は下に降りて行った。

〈皇牙side out〉

〈一夏side〉

二人の試合が終わり、戻って来た時の反応はクラス中は興奮する者、歓喜する者、憧れる者とさまざまだった。

「しかし、皇牙のIS姿変わってたけど、何あれ？」

「あー、企業秘密で」

「なに隠してんのよ、アンタ？教えなさいよ。」

「だが断る！」

なに誇らしげに言ってるんだ。

そこに千冬姉が来た。

「これで分かったか？以後教師には敬意を持って接しろ。さて、専用気持ちは天龍覇、織斑、デュノア、セシリア、凰、ボーデヴィツヒだな。では九グループに分かれて実習を行う！各グループリーダーは専用機持ちが行え。では分かれる。」

と言った後、皇牙、俺、シャルルの元にたくさんの子が集まって来たが、それを見かねた千冬姉が出席番号順に振り分けた。

グループに分かれた女子ズ（主に俺ら男のグループ）は名前を言った後「よろしくお願いします！」と言われていた。俺とシャルルは対応に困っていたが皇牙は「あ、うんよろしくー」と棒読みで対応しパパッと実習に移っていた。

いかん、俺もやらなければ。

最初のIS起動はよかったのだが、二番目の女子のときに問題は発生した。

ISを立ったまま装着解除してしまったため、届かなくなってしまったのである。

「あのさ、コックピットに届かないんだけど・・・」

「あ、あー・・・」

俺が女子をコックピットまで持ち上げるようになった。
その様子を見た皇牙のグループの女子も同じことした。
そんなことになっても、皇牙は顔色一つ変えず、女子を一人一人お
姫様抱っこしながら済ましていった。
女子はというとやってもらった女子はポーとしていた。

俺たちの班は授業ギリギリまで時間がかかった。
そして、最後に篤が「昼と一緒に食べないか？」と提案してきたの
で返事をだし、授業は終わった。

IS専用のカートがあり、それによってISを運んでいるが『動力』
なんてものは付いておらず人力の力で運ぶしかないのだ。
シャルルに至っては、「シャルル君にそんなことさせない！」と女
子たちはいい数人の体育会系の女子が運んでいた。
俺のときと対応が全く違うのはなぜ・・・？

皇牙はあり得なかった。

俺と数人の女子で一台ずつ運んだため、残りは三台だったが俺がや
つと一台を仕舞い終えた時、すでに三台運び終えていた。

・・・おかしくね？

アレ、メツチャ重いんだよ？

みんな驚いていた。

普通驚く、驚かない方がおかしい。

当の皇牙は「なにか？」という顔をしていた。

「なにか？」じゃねえよ！！

まあ、いいや。突っ込んだら負けだ。

「シャルルに皇牙、着替えに行こうぜ。」

「おう」

「ええっと・・・僕はちよつと機体の微調整をしていくから、先に

行つて着替えててよ。時間がかかるから、待たなくてもいいよ。」

「ん？いや、別にm「分かった」」

「専用機のことかも知れないだろ？色々あるんだろ。ということで行くぞー夏。」

（やはりな・・・）」

「お、おう。あ、シャルル実はな・・・」

と一夏はシャルルになにかに誘っていた。

（一夏side out）

またクラスが騒がしくなるな・・・（後書き）

今回はISのフォームチェンジについて簡単に説明。

ナルガクルガ亜種のフォーム・・・角ばった部分が無くなり、全身に丸みが帯びる。機動性が普段の倍になる。

グラビモス亜種のフォーム・・・ナルガクルガとはまぎやくのフォーム。全身が角ばりなおかつ黒い鎧のようなISになる。攻撃力と防御力が上がる代わりに機動性がものすごい落ちる。

こんな感じですよ。

昼食は命がけ（前書き）

ちよつと原作とは違うルートですが、最終的には原作寄りです。

ー夏はシャルにフラグを建てないが・・・。

昼食は命がけ

（皇牙side）

授業の後、俺と一夏たちは屋上で昼食を取っていた。つくづく思うんだが、この学校税金掛かってるね。

普通の学校なら進入禁止になっているかいないかだが、この学校は考えて配置されている花壇には季節の花々が綺麗に咲いてる。

さらには、食べやすいように円テーブルがたくさん置いてある。

普段なら、ここは女子でいっぱいになるらしいんだが、今日は噂の転校生のシャルルを見に行くため、食堂に向かったのだろう、俺たち以外誰もいなかった。

貸し切り状態だ。

そんな中、箒は一人唸っていた。

「・・・どういうことだ」

「天気がいいから屋上で食べるって話しだろ？」

「そうだが・・・」

とこちらを見ている。

こちらには俺、シャルル、鈴、セシリアがいた。

「せっかくの昼飯なんだ、みんなで食べた方がうまいし、転校してきたばっかのシャルルは右も左も分からないだろうし。」

それを言われると何も言えなくなってしまった箒。

「（箒、どうせ二人つきりで食べようとか言っただろ？）」

「（何故、それを！？）」

「（あのやり取りを見れば、普通に分かるぞ？）」

「（・・・くっ！）」

「（だいたい、一夏が唐変木なのは今に始まったことじゃないだろ

うが、もう少しストレートに言った方がいいんじゃないか？」
アドバイスを混ぜながら諭したが難しい顔をしていた。
そんなに難しいかね？
そんな風に思っていないながら、俺は作って来た弁当を開けた。

「皇牙、お前料理出来たのか？」

「なんだ、その新しい発見をしたような声は？俺が料理しちゃいけないのか、コラ？」

「いや、意外だったもんで・・・」

「そんなに意外か？」

と箸たちに聞いてみると予想通りに答えが返ってきて、泣きそうになった。

「ああ」

「当り前でしょ？」

「ホントですわね」

コイツラ、酷いな。

俺以外にも箸、鈴、セシリアも作って来たらしい。

箸と鈴のは食ってみたいが、セシリアのは喜んで辞退したい。

なんというか味が摩訶不思議の味をするのだ。

この前、味見をしてくれと言われたのでオムライスを食べたところ、チキンライスがトマトの味ではなく、唐辛子の味がしたのだ。

味覚がイカれるかと思った。

本人曰く、「絵と同じになればいい」と言っていたが、味も是非真似をしてください。というよりも、料理を勉強し直せ。

ちなみにチキンライスを作るときに入れたモノを聞いてみると、トウ豆板醬バンジャンを入れたらしい。

・・・そりゃ、味覚がイカれるわ！！

（皇牙 side out）

「一夏side」

皇牙は弁当を開け、自分のを食べ始めた。
多分、チリドッグだと思う。

「ほら、一夏。アンタの分」

と言ってタツパを鈴は投げた。食べ物投げるなよ。
中身を見てみると酢豚だった。

「おお！酢豚だ！！」

「そ、今朝作ったのよ。アンタ、食べたいって言ってたでしょ？」
喜んでいたが、酢豚を食べるとどうしてもご飯を食べたくなるのだが、鈴はそこまで用意してくれなかったようだ。・・・自分のは用意しているみたいだが。

「一夏さん、私も今日はたまたま朝早く起きてしまったので作りま
したの。よろしければどうぞ。」

と綺麗なサンドイッチが並んでいる。

鈴は「うわあ・・・」という顔をしている。

自分が食べないからって余裕だな！！

俺も皇牙同様セシリアの料理を食ったことがあるが、皇牙よりも酷
かった記憶しかない。

「お、おおう。あとで頂くよ。」

皇牙はこちらを見ていたが、顔には「強く生きる」と語っていた。
・・・くそう。

このサンドイッチも見た目は綺麗なんだが、味がなあ・・・。
どの料理も「味」が問題なのである。

「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

皇牙の隣でシャルルがそんなことを言っていたが、他の女子のお誘いを断るやり方が凄まじかった。

断り方もイヤミっぽくなく、むしろ輝いていた。

断った相手の手を握った時、失神していた。

そんな風にそれぞれ弁当を食べているとシャルルが提案してきた。

「そつだ、お互いおかずを一品ずつ食べ合ってみない？」

「ん？まあ、俺はいいぞ」

「ま、まあ一夏がいいって言うなら私もいいわ。」

「本来ならマナー違反ですがまあいいでしょう」

「皇牙は？」

「別に構わんが・・・」

「じゃあ、早速もーらい！」

と箒特製の弁当から唐揚げを奪い去る。

「・・・うつ！な、なかなかおいしいわね。」

「和の伝統を重んじればこそだ」

と箒はなにやら勝ち誇っていた。

そのあと鈴と睨みあっていたが何かあったのだろうか？

・・・この朴念神が。

なんだろう、いまとてつもなく不名誉な称号を貰った気がする。

そのあと、箒には俺が口を付けた唐揚げしかなくどうするか迷ったが、箒がいいと言ってきたので食べさせた。

「んじゃ、はいあーん・・・」

「あ、あーん」

今思ったんだが、この「はいあーん」が出来るのって日本人だけじゃね？

「・・・いいものだな。」

「だろ？この唐揚げ、うまいよな。」

「そうではないが・・・まあ、いいものだな！」

なにかに納得してくれたのか機嫌が戻ったようだ。

それを見ていたセシリアと鈴は何かに頷きながら、一夏に迫っていた。

まあ、理由は言わなくても分かるな。

一夏はまず鈴の酢豚を食べた後、最大の鬼門であるセシリアのサンドイッチを食っていたが、顔の表情が変わっていた。

・・・ああ、また不思議な味に苦戦しているな。

誰か、マジでセシリアに料理を教えてやってくれ。

一夏は無難な答えを出していた。

「あ、ああ、いいんじゃないかな・・・俺は好きだよ。」
「どうやら、一夏の苦労はまだ続くようだ。」

「じゃあ、最後に皇牙のをくれよ。」

「と言つても、チルドッグはあと一個しかないぞ？」

「じゃあ、それを分けて食べればいいんじゃないかな？」

とシャルルはいい、「ついでに僕も貰うね」と言つて五人分に分けて食べた。

「・・・いただきます」「」「」

もぐもぐ・・・。

食べ終わった後、何故か筭、セシリア、鈴は沈んでいた。

「皇牙、これ美味いなー！」

「うん、辛さもピリツと効いていてソーセイジはジューシーでレタスはシャキシャキしてる・・・おいしいよ、皇牙」

「それは何よりだ。」

一方、箒たちはというと・・・

「・・・私よりおいしい」

「男のくせに・・・」

「・・・」

とぐうの音もでないらしい。

ぞまあ。

「海老チリもあるが食うか？」

「「「「是非」」」」

「辛いから気をつけろよ。」

再び大ダメージを負う、箒たち。今度はシャルルも負っていた。

「この海老チリ、冷めていてもおいしい。」

と一夏は他の四人を気にせず食っている。

NDK？ NDK？

「なんで、アンタそんなに料理うまいのよ！！下手になっておきなさいよ！！」

理不尽な命令が飛んで来たよ。しかも、私怨まで混じってやがる。

「無茶を言うな。」

「でも、なんでそんなに料理うまいの？」

と興味本位で聞いてくるシャルル。

「あー、家族が早くに死んでいるからな。覚えざる負えなかったと言っべきかな。」

「えっ？」

「そうなのか？」

「あー、言っただけだったか？十年前に死んでいるんだよ、俺の両親

は。」

「ゴメン、気が回らなかつたわ。」

「えと、ごめんね?」

「気まずい空気だった。」

「別にいいさ。もう過ぎたことだし、お前らが気にやむことじゃないしな。それよりも、一夏早く食べよ?さすがに食後にダッシュはしたくないだろ?」

「それもそうだな。」

それを聞き、鈴が聞いてきた。

「なにアンタたち、一タスーツに着替えてんの?」

「え?脱がなきゃダメだろ?」

「女子の半分ぐらいは着たままよ?面倒だし。」

ああ、そうだった。女子はいいなあ。便利で。

そして一夏はこっちを向き、「同士よ」という感じで見ていた。

一夏には悪いが俺のは特殊だぞ?

「男同士っていいよな」

一夏は呟いていた。本当に素晴らしいものだ。苦痛を共有できるし。強い味方が出来るからだ。

「そ、そう?一夏がいいなら僕はそうでもいいよ。」

シャルルはなにか照れながらいつていた。

筈たちがなにやら呟いているが聞かない方がいい内容だと思うので、シャットアウトした。

〈一夏 side out〉

〈皇牙 side〉

夜。シャルルと俺はルームメイトとなった。

「まあ、よろしくな。シャルル。」
「うん、よろしく。皇牙」
と改めて挨拶をし、今は俺特製のお茶を飲んでいる。

「皇牙、このお茶ほんのり甘いね。」

「コレは自前だからな。原料は食べ物だな。」

「これ、創ったの?!」

「おう。食後にはいつもこれを飲んでいる。アツいが落ち着くんだ。」

「原料はなんだろう・・・」

「答えは、トウモロコシだ。」

「トウモロコシで出来てるの?」

「ああ。乾燥させてある程度すり潰すんだ。後は袋に詰め、お湯を入れるだけ。」

トウモロコシの甘味がそのまま出ている美味いんだ。」

「へへ。そうだいこと教えてもらった代わりにお礼がしたいんだけど・・・」

「なら、一夏のISを見てやってくれないか?アイツ、まだ上達しないんだよ。」

「その程度ならいいよ。」

「悪いな、筈たちの教えが下手くそでな。セシリアは理で教えるし、鈴は感覚で覚えるって言うし、筈なんか『どんっ!てかんじだ』なんていいやがる。酷いっいたらありゃしない。」

「それは酷いね。」

アレで分かる方がスゴイと思う。多分、束でも理解不能だ。

「そうだ、代わりに俺も一つ聞いていいか?」

「なに皇牙?」

「シャルル、なんでお前、男装してんだ?」

{ 皇牙 side out }

昼食は命がけ（後書き）

作中に出てきた、お茶の話ですがこれは友人のおばあちゃんが創っていた方法らしいです。

俺も聞きましたが、重要なところは「企業秘密」らしいです。

そして、シャルの正体がバレました。

さて、どうしようかな。

理由（前書き）

一夏にバレるのは原作どおりにしようかと・・・。

あともう一人にシャルの正体はバレます。

まあ、分かりますと思いますが・・・。

理由

（皇牙 side）

「シャルル、なんでお前、男装してんだ？」

「な、何言ってるの？皇牙。僕は男だよ？」

「いや、無理あるから。骨格とか色々。それに・・・」

「それに？」

「シャルル、お前胸結構あるだろ？別に下心で言ってるわけではないからな？」

「・・・」

「出来れば、本当の事を言っしてほしい。男装してまでココに来るってことは何か大きな理由があるんじゃないか？」

そう、ココに男装で入るなんてよっぽどのが無い限り、あり得ないからだ。

転入するなら、本来の姿でも構わないハズなのにここまでする理由がわからなかった。

シャルルは何かを決心した表情になり、やがて口を開いた。

「いつから、僕が女だって気が付いたの？」

「今日の着替えの時に、一緒に着替えるのを拒否したろ？」

「うん。」

「その時に推測から確信に変わったな。」

「そ、そうなんだ。じゃあ、いつ推測してたの？」

「転校して挨拶の時から違和感を感じていたから、その時からだな。」

「じゃ、皇牙は最初から分かってたんだ。」

「まあ、そうなるな・・・聞かせてもらえるか？理由を」

「うん。バレちゃったしね。いいよ、全部話すよ。」

と「あはは・・・」と笑っていたが、どこか翳りのある笑い方だっ

た。

「僕はね　愛人の子なんだ」

（皇牙side out）

（シャルルside）

「僕はね　愛人の子なんだ」

と思いきって語った。

皇牙はこの一言を聞いて、驚いて顔をしかめていた。

「すまん。」

「なんで謝るの？」

「いや、配慮が足りなかった。」

「いいよ。皇牙には聞いて欲しかったんだ。」

「そうか……。男のフリは何故？」

「えっと、実家からそうしろって……」

「実家というとデュノア社か？」

「うん、そう。僕の父はその社長なんだ。」

「……。なるほどだいたい理解できた。」

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね、父の部下がやってきたんだ。そこから色々と検査したらIS適応が高いことが分かってね、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになったんだ。」

シャルルは乾いた笑い方で話しを進めていく。

俺はすでに理性が飛びそうになっていたが、これを話しているシャルルの方がもっと辛いことをしてる。という思いに至り、我慢した。

「それから、少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「……。確か、欧州の合同計画『イグニッション・プラン』に参加できないかもって話しか？」

「そう、リヴァイブはどう足掻いても第二世代型、第三世代も開発はしていたけど形になれなかった。そこに政府からの通達で予算を大幅にカットされ、さらに追い打ちの形で次のトライアルで選ばれなかったら全面カットの上、IS開発許可も剥奪ってね。」

「そこで男装してココに入れって言われたのか。」

「うん、広告塔になるし、なにより……。」

途中で黙ってしまったシャルルは言うのを躊躇いながら、イラついていた。

「言いたくなかったら、いいぞ言わなくて。」

「大丈夫だよ、有難う皇牙。」

「同じ男子だったら日本で登場した特異なケースに接触しやすい。可能であれば使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね。」

「……つまり」

「うん、「蒼（碧）の魔導書」と「白式」のデータを取ってこいって言ってるんだよ……あの人は。」

シャルルは一段落ついたのかお茶を飲み「ふう」と言っていた。

つまりは、シャルルを道具として見ていないのか。

自分の都合でシャルルの人生を弄び、道具と使う。

シャルルが一体何をしたというんだ。

静かに暮らしていたのに何故そこまで貶されなければならないのか。と思っていると自然に手に力が籠り、湯呑を砕いていた。

バキッ！

ポタポタポタ……

シャルルは突然のことに驚いていた。

「ど、どうしたの?!」

「ん？・・・ああ、砕いちまったか。」

「手が傷だらけだよ！！見せて！！消毒するから。」

「大丈夫だ、すぐ治る。」

「すぐ治るって・・・え？」

シャルルが無理矢理手を引つ張った時には傷はほとんどなくなっていた。

「傷がない？」

「体質なんだよ、ちよつとの傷じや手には傷なんて出来ないんだ。

（まあ、嘘だがなんせ中に“龍”が宿っているからなんて言えないし、転生者なんてもつと言えないな。）

「そうなんだ。・・・全部話したらなんだか、スッキリしたよ。今まで騙っていてゴメンネ、皇牙。」

「いや、別にいい。これからどうするんだ？」

「国に帰るよ。バレたし。帰ったらまた軟禁されるかな。まあ、しようがないよね。」・・・もついい。「偽って、入ったんだもの。」

「もついい。」でも、皇牙や一夏に会えたい・・・もついい！！喋るな！！！！」・・・つ！！！！」

「もついい。喋るなシャルル。・・・泣いてるぞ。」

「え？」

シャルルは喋っていて気が付かなかったようだが、泣いていた。その時に涙は皇牙の心に深く突き刺さった。

「あれ？なんで涙なんか。」

と涙を拭いているシャルルだが、涙は止まろうとせずむしろ溢れてきた。

「シャルル。背中貸してやるから、泣いとけ。・・・辛かったらろ
う。」

「・・・うん。少し借り・・・る・・・ね。」

そのあとシャルルは思いつきり泣いていた。

聞こえる嗚咽は聞いているこっちも辛くなるほどのモノだった。

〈シャルルside out〉

〈皇牙side〉

泣き終わったシャルルは顔が酷かったため、洗いに行かせた。

心に溜まった苦痛が取り払われたのか、綺麗なほどいい顔だった。

「シャルル、お前これからどうしたい？」

「え？」

「二つ程、道を提示してやる。一つはこのままバレて本国に強制送還。二つ目は“デユノア”の名を捨てるか。」

「僕は少しあの人に仕返しもしたいから、後者を選ぶよ。」

「そうか。そしてさらにこれはまあ、シャルルが良ければなんだが。」

「・・・」

「なに？」

「シャルル、お前俺の義妹にならないか？」

「・・・え？」

「いや、デユノアを捨てるってということは孤児になるわけじゃない？だから、養子で貰うってことで。」

「でも、戸籍とかがあるし、無理なんじゃ・・・」

「あー、その辺は大丈夫だ。安心しろ。明日ちょっとフランスに行くてくる」

「はい？」

「いやだから、ちょっと“話し合い”（潰し）てくるだけだって。」

「いま、潰してくるって聞こえたような。」

「気のせいだ。」

「でも、そんなこと本当に出来るの？」

「任せとけて！ちょっとアイツに協力してもらっけど、まあ大丈夫だろ。」

「アイツ？」

「電話していいか？」

「うん」

と言って少し離れ、アイツに電話した。

【p r r r r r r

ガチャ . . . !

「ハロハロー、元気いー？皆のアイドル東さんだよ！」

「東、ちよつと頼みがあるんだがいいか？」

「 ぶむぶむ、なにかな？」

「やけに真面目だな？」

「電話越しでも、こーくんの怒りを感じるからね!!」

「出てるのか？」

「声にね!!で、要件は？」

「ああ、ちよつと、フランスのデュノア社をつぶ . . . 壊滅させるから、場所とあと、ISのコアを一つ欲しいんだが」

「なんでまた、デュノア社を？」

「救いたい奴が居るから。」

「それは、シャルロット・デュノアちゃんかな？」

「なんで知ってたんだよ。」

「私に分からないことはないよ!!」

「ああ、そうでしたね。」

東はこういっやつだった。

「というか本名シャルロットっていうのか。」

「あり？知らなかったの？」

「うん、まあ。で、フランスの国家サーバーに侵入してさあ、戸籍情報やら何やらをちよつと改竄して、俺に出来ない？」

「いいよ。しかし、なんで？」

「まあ、“デュノア”の名を捨てて、天龍覇の名をやることにしたからさ、色々と手続き面倒じゃん？だから、手早くやりたいから内部仕事をね。」

「わかったよ！ーじゃ、こっちに来る前には終わらせておくよ。」

「ああ、頼む。あと霞に代わってもらっついていいか？」

「はいはい、霞ちゃん！ーこーくんからお電話だよ。」

「もしもし、皇牙お兄ちゃん？元気ー？」

「ああ、元気だよ。ゴメンな？電話出来なくて。そっちも元気そうだな、安心したよ。」

「うん！ー元気いっぱいだよ！ー！」

「そうか。今日はね霞にお知らせがあります。」

「お知らせ？」

「なんと、霞にお姉ちゃんが出来ました！ー！」

「お姉ちゃん？！」

「そう、お姉ちゃん。今度逢わせてあげるよ。」

「約束だからね！？」

「破ったら、一つだけなんでも言うことを聞いてあげるよ。」

「絶対だよ！ー！」

「ああ、絶対だ。．．．じゃあ、東お姉ちゃんによろしく言っておいてくれ。」

「うん！分かった！ー！」

「ガチャ！」

「すまなかつたな、シャルル。長電話で．．．？」
シャルルは茫然としていた。

「．．．．．もしもし、シャルロットさん？」

「．．．ハッ！なんで、皇牙は僕の本当の名前知ってるの？」

「あー、東に聞いたから。」

「東って、篠ノ之博士のこと？！知り合ってたの！？」

「知り合いつていうか、一年ほど一緒に過ごしていたし。」

「皇牙、とんでもない人と知り合いなんだね。」

「まあな。あ、これからはシャルロットって言うのも長いし、シャルでいいか？」

「あ、うん。皇牙の好きに呼んでいいよ。」

「じゃあ、シャル。お前姉だから。」

「へ？・・・なんで？」

「俺、義妹がいるんだよ。だから姉。歳は11歳ぐらいかな。」

「じゃあ、義兄さんって呼べばいいかな？」

「皇牙で構わないさ。少なくとも学園内は。というかそれをお願いします。」

「じゃないと、俺の命がマツハでヤバいんで。」

「シャル、明日俺学校休むから。千冬に言うておいて。」

「分かったよ、皇牙。」

〈皇牙 side out〉

理由（後書き）

まさかの義兄妹フラグ。

イエーーーーー、（。　。　）人（。　。　）ノーーーーーイ

ゴメンナサイ。あ、ちょっと、石を投げないで！！

次回はデュノア社が壊滅します。

ちよつとデュノア社に喧嘩吹っ掛けてくる(前書き)

やっちまった。

ちょっとデュノア社に喧嘩吹っ掛けてくる

〔シャルside〕

皇牙は早朝早くに出掛けて行った。

だから、今日はいないのだ。

ちょっと心寂しいけど、ちゃんと“男子”の役を演じないと！

「ん？シャルル、今日皇牙休みか？」

「あ、一夏お早う。うん、風邪を引いたみたいだね。休むって言うてたよ。」

「そうか。」

キーンコーンカーンコーン・・・

チャイムと同時に織斑先生と山田先生が入って来た。

「諸君、お早う。」

「「「おはようございます」「」「」

「では、山田先生SHRを」

「は、はい。・・・あれ、天龍覇君は休みですか？」

「あ、織斑先生に山田先生。今日皇牙は休みです。風邪を引いたみたいで。」

「そうか。分かった。」

「分かりました。では・・・」

なんとか誤魔化せた。

皇牙は今頃フランスかなあ・・・？

〔シャルside out〕

（皇牙 side）

早朝にIS学園を出ていった俺は束のところに行き、書類を受け取りフランスに向かった。
一日で済ませたいからだ。

フランス・・・

いつもの『龍化』でバレずに侵入し、今はフランスの大統領のところに潜入中・・・。
こちら、スネーク内部に潜入した。指示を頼む。なんて、アホなことをやってないで用事を済ませねえと。
大統領はどこだ。っと探していると居た。

「アンタが首相かい？」

「な、誰だ!!」

「どうしました!?!」

「侵入者だ。この部屋に居る!!」

「おい！人を呼べ!!」

「はい、今r・・・ぐあ!?!」

「あー、それは困るから寝てもらおうか。」

「姿を見せる!!」

「そんな怒鳴らなくても見せるさ、そちらの武器を収めればな。」

「・・・収めてくれ」

「しかし!!」

「収めたら、姿を見せてくれるんだろう?」

「ああ。命を取りに来たのではなく、話し合いに来た。」

「・・・これでいいか?」

「ああ、いいぜ。」

「!!?」

姿を見せた俺はソファーに優雅に座っていた。

「さて、キミは誰かな？」

「本名を言ったら面倒だから、通り名でいいか？」

「構わんよ。」

「有難い。・・・“蒼（碧）の魔導書”だ」
ブレイブルー

「「な!?!」」

「キミがあのだ・・・」

「ああ、そうだぜ？」

「で、話とは？」

「まあ、アレだ。ちよつと俺の怒りを買ったバカ共潰す為、手回しをお願いしたいんだよ。」

「手回し？」

「そ、手回し。ちゃんと、報酬は出すよ？」

「その報酬は何かな？」

「・・・フランスつてさあ、第三世代型のISの量産型製造出来ないだろ？」

「そんなフランスの為にテスト用の第三世代型のISのコアが偶然ここに一つあるんだけど・・・。」

「・・・」

「俺が持つててもしょうがないからさ、誰かにあげようと思ってるんだけど。」

「何が望みかね？」

「さすが国のトップ。理解が早くて有難いね。」

〈皇牙 side out〉

〈首相 side〉

私の目の前に現れた侵入者は各国の軍などが血眼に探しているあの“蒼（碧）の魔導書”だった。

なんでも頼みがあつて来た。と言っているが本当のところはどうなのか分からない。

実際に聞いてみると、簡単なものだったが何か隠しているのが分かった。

その事は本人も承知の上で喋っている。

そして、その報酬はなんと喉から手が出るほどの代物だった。

第三世代型のISのコアが報酬。

こんなものチラつかされれば、承諾するしかない。

はつきり言えば、このISのコアをくれるならば私の権限いらないならなんでもやってもいいぐらいだった。

だからこそ、“蒼（碧）の魔導書”の望みを聞き出すことを決めた。

「何が望みかね？」

（首相side out）

（皇牙side out）

「何が望みかね？」

「なに、ちよつとした情報の改竄と報道の規制、あとはこれから起こることに手を出さず見ているだけでいいんだよ。」

「それだけかね？」

「まあ、だいたいは。」

「情報の改竄は何かね？」

「えーと、「ガサガサ」あったこれ。」

と渡す俺。

首相は目を開いた後、こちらを見てきた。

「彼はウチの代表候補生なんだが？」

「いやね？彼・・・いや彼女は父親の命令でIS学園に入ったんだって。でさ、彼女これバレたらつてもう話しちゃったけどさ国家級の重罪じゃん？だから、ちよいと彼女の戸籍情報を消してくんない？」

「戸籍をかね？」

「そ、戸籍を。あとデュノアの名を捨てて俺の義妹になるから養子

として貰いたいからその辺の書類作成をお願いしたいんだよね。」

「ふむ。まあ、いいだろう。」

「次の報道規制と手出し無用は同時かな。」

「同時？」

「デュノアの名を捨てるってさつき言ったじゃん？まあ、これは私怨も混じってるんだけどね。彼女の父親さあ、“人”^{カンジヨ}を道具扱いしたんだよねえ。だからさあ、ちょっと“お話”しようかな。っとね」と喋りながら、だんだんと黒くなっていく皇牙。

「（“お話”が副生音で潰すって言うているのが分かるな。）では、私たちは警察と報道を抑えればいいのかな？」

「そうだよ。何が起こっていても何も聞かず手も出さなければ、さうにいいよ。」

「んじゃ、行くから。帰ってくるまでに全てやっついてね？報酬は事が済んでからで。」

と言って再び彼は消えていった。

（皇牙 side out）

（首相 side）

彼が完全に消えたあと、私は一気に汗が出た。警備をしている彼も同じ状況だった。

「・・・総理、“アレ”はヤバいです。」

「キミも感じたか。」

「はい。“アレ”に今手を出していたら、今頃死んでいます。」

「・・・だろうな。未だに震えが止まらない。“アレ”に対して最初に抱いたイメージは『死』だ。」

「ヤツは多分、普通のように人を殺しますね。まるで息するように。」

「・・・さて、彼が帰ってくる前に出された条件を達成していいか。」

（首相 side out）

（皇牙 side）

『龍化』で移動し、無駄にデカイビルの前に居た。

「さて、潰しますか！・・・親父さんよう、テーマは俺を怒らせた。」

そう呟いたあと、いかにも「普通」の顔で中に入った。

「いらっしやいませ。デユノア社にようこそ！」

と挨拶してくる、受付嬢。

「どうも、社長に会いたいんだが・・・」

「アポイントメントは取っていますか？」

「取っていないんだが、会えますか？」

「少々お待ちください。」

通話中・・・

「申し訳ありません。アポイントメントを取っていない方とは会えないと。」

そうだろうな。それが普通だ。

だが、今回はかりは無理でも押し通る！

「社長室つて何階？」

「・・・68階ですが？」

「じゃ、社長に伝えてくんない？」

「なんと？」

「・・・蒼（碧）の魔導書」が来たつて。」

その後、デユノア社に轟音が鳴り響く。

〈皇牙side out〉

〈社長side〉

くそっ！イラつく。

我が社はどうにかして第三世代型のISを開発しなければならないのに全部失敗に終わる。

あの女の娘を日本に行かせたが、未だに連絡やデータすら来ない。

まあ、どうせバレても奴はすぐさま監獄行きだがな。

私の悩みの種も一つ消える。

そこに連絡が来た。

「失礼します。社長。社長に会いたいと申している方が居るので
が……。」

「どちらさままで？」

「名乗らなかつたんですが、青年です。」

「丁寧に帰ってもらえ。」

「分かりました。では、失礼します。」

と電話を切り、椅子に座ったあと轟音が社内に響き渡った。

「なんだ、一体!?!」

「大変です、社長!!!」

「なんだ、この音は!!!」

「それが……」

と言つて、顔を青ざめている。

「はっきり言え!」

「……蒼(碧)の魔導書」が襲撃してきました。」

「なん……だと?!」

〈社長side out〉

「皇牙side」
今、絶賛戦闘中です。

「その者、止まれ。」
止まるわけないだろーが、この先に目的があるんだから。
しかし、何度このセリフを聞いたか。

さつきから止まっていななんだから、制止の声をかける以前に即発砲するモンだ。

最近の警備・警護する人間は教育がなっちゃいないな。質が落ちていやがる。

だが、俺の行く道を阻むのなら死んでも文句は言えないぞ。

「どけ」

グシャッ！

掴まれた警備の者は投げられ、壁にぶつかったときに体ごと潰れそのまま死んだ。

幾人もの返り血を浴びながら突き進む姿に社員は恐怖し隠れている。しばらく歩いてみると、目の前に三機のIS。無人機が現れた。が、勝負というものにはならなかった。

「皇牙side out」

「社長side」

「今、奴はどの階だ！！」
フレイフル

「67階です！しかも、この部屋の真下です！！」

「っ！おい、アレを出せ！！」

「しかし、いいんですか！？」

「人間じゃ奴は止められん！ここで出さずにどうする！？」

「分かりました。試作機三機出します！！」

といい、試作機を出した。

試作機とは極秘裏に開発していた独立機能を付けた無人機である。モデルはリヴァイブだが、性能は『ブリュンヒルデ』並みにしたモノであったがイマイチ結果が良くなかった。

だが、世界最高額の賞金首“蒼（碧）の魔導書”ならいい結果を出せるかもしれない。

そんな思いを抱いていた社長だったがその思いが成功することはなく、絶望が来るとは予想していなかった。

社長 side out

皇牙 side

警備の人間をまた一人轢き潰したあと、前から三機の無人機が出てきた。

俺は『蒼の魔導書』を起動した。

「……術式解放」

一時的に『蒼の魔導書』を解放した。あくまで一時的なので制限時間が設けられている。

時間は15分。それ以上やると瀕死に陥るため、それまでに決着をつけなければならぬが今回は手加減をするつもりはないため、すぐに終わる。

「（この技は対機械用なんだよね。人でやったら死んじゃうし。）俺は無人機の一機をワザと手加減して生き残らせた。」

「……闇に喰われる！！」

右腕が赤黒くなり、その内の二機はまともに掴み、一機は脚の部分のみ掴んだ。

ズババババツ！！

皇牙の下から、何かが蠢き、掴んだモノを喰らい尽くしていった。掴んでいた二機は原形を留めることはなく、至る所に“獣”のような歯型や爪痕があり、酷いものだった。

残りの一機は上半身は無事だったが、下半身の右側は喰われていた。

「・・・術式封印。・・・見ているんだろう、社長さんよ。」

「何が目的だ。貴様！」

「目的は一つ。・・・この会社を潰す。ただ、それだけだ。」

「貴様、ふざけているのか!？」

「ふざけていない。・・・アンタ、この真上に居るな？」

「!？」

ドゴオン！！

パラパラ・・・

「やっと会えたな、ゲス野郎」

「貴様!!！」

シャルの親父は机の中から銃を取り出し、こちらに発砲したがその弾丸が届くことはなく、手に持っていたボロボロの無人機でガードした。

「潰す前にアンタに一つ聞きたいことがある。」

「聞きたいことだと・・・？」

「返答次第でアンタの処遇が変わるから、真面目に答える。そして、本音を言え。」

「・・・何が聞きたい。」

「シャルロットの事をどう思っている？」

「・・・バレたのか。」

「質問に答える」

「まさか、貴様あの女に気があるのか？」
と笑いながら答える。

「最後だ。・・・答える。」

「クク・・・あの女の娘なんか私にとってただの“道具”に過ぎない。」

「・・・嫌いと言いながらも、アンタの為に性別を偽り、学園に入っているのにか？」

「どうせ、バレたところで私が知らないと言えば、『他人』だ。しかも、貴様も知ってるようにISについての法は全てが国際級、奴の未来なんか一生終身刑。

こちらに被害はない。全くもって都合のいい道具オンナだよ！」
この告白を聞いていくうちに、シンプルな物切り替わった。

「そうか、分かった。・・・さつさと死ねや。」

と言って、今まで掴んでいたISを目に見えぬ速さで投げつけた。

「ガハッ?!」

と思いつきり血を吐くゲス野郎。

「ただ、そんなことはどうでもいい。
書類はどこやったっけ？」

「オイコラ、コレにサインしろ。」

「ああ？」

「さつさとサインしろよ、予定が詰まってるんだから。」

「なんだこれは？」

「シャルロットを養子に出す紙だ。見りゃ、分かるだろ？」

「・・・」

「デュノアの名を捨てるそうだ。こっちとしては有難いもんだ。貴

様みたいなゲス野郎の名が付いていたら、シャルが可哀想だしな。」

「サインはしないぞ。」

「そう。じゃ、自分から「する。」と懇願させるか。「バキィ！」

「ぎゃあああああ!!！」

右足の骨を折った。

今、コイツはうつ伏せになった状態で腰のあたりに壊れたISが乗っているため身動きが取れない状態だ。

そして、見えている体の部分は両足と両腕、あと頭だ。

腕はサインをしてもらわなければならないから、除外すると足とどちらかの腕だが、まずは足からだろ。

「サイン・・・するかい？」

「す、するか！」

「なら・・・ガシャ！」

俺はコイツが持っていた銃を拾い、折った足の方に銃を向けアキレス腱と膝受け皿を撃ち抜いた。

「ぎゃあああ、痛い痛いイイイイ!!！」

「うるせえな。・・・するか？次は左足な。」

「します。しますから止めてください、お願いしますっ!!！」

震えながらもサインをした。

「これでよし。」

と言って、ワザとコイツの手が届くところに銃を置いた。

「要件は済んだし、帰るか。今後絶っつつつ対に復讐するなんて考えるなよ？まあ、やったら・・・わかるな？」

「・・・コクコク」

「そんじゃな。」

「ああ、二度と会うことはないだろうな!!！」

ダンッ！！

予想通り銃を拾い撃ってきた。これで口実が出来た。

放たれた銃弾を簡単に避け、ゲス野郎の首を掴み上げ、殺さないように締めあ

「ぐあ！・・・あ！！！」

「全く撃たなければ、被害に遭うのが身体だけで済んだものを・・・
まあ、分かっていたけどね。そんじゃま、さようなら）・・・

）
「？！！」

放

『第666拘束機関解

次元干涉虚数方阵 展開

コードS・O・L！！
ソウル オブ ランゲージ

最後に魅せてやるよ！！

碧”の力を！！

碧の魔導書 ブレイブ 起動！！

さて、やりますか。

「『千魂冥烙』！！！」

と宣言した後、手を離れた。ゲス野郎が地面に着く前に、皇牙の周

りに無数のウロボロスが上に射出され、そのまま噛みつかれたゲス野郎は上に昇っていくそのあと“蛇”が勢いよく上に出た。

『極上の苦しみを味わせてやるよ!!』

痛えか？痛えだろう？』

何万本もの太い“蛇”が集まり大きく禍々しい蛇がゆっくりと口を開き、噛み殺そうとしていた。

そして、最後の一言と同時にあるモノが死んだ。

『墜ちな、冥府の底に』

落ちてきた奴はすでに精神が死んでいた。
が俺はすでに用事を済ませたので書類をしまい、首相のところに帰っていった。

「ちよつと、やり過ぎたかな。」

〈皇牙side out〉

〈首相side〉

提示された条件が全て終えた私は、あの場に居た警備の者を呼び、デユノア社で何が起きているのかが知りたいため小型のビデオカメラを持たせ行かせた。

そして映された映像を見た瞬間、この世とは思えなかった。

なんだあれは？

あのようなモノがこの世にあるものか？

見ているだけで禍々しさが伝わってくる。

アレは人が触れていい物じゃない。

「もう映さなくていい、御苦労。戻って来てくれ。」

「……はい。」

「アレが世界最高の賞金首……“蒼（碧）の魔導書”か、うまくやれば味方に出来ると思ってたんだが、そんなことをすれば……この国が減ぶな。」

想いを語ったあとで、皇牙はやってきた。

〈首相 side out〉

〈皇牙 side〉

「首相さんよ、書類出来てるかい？」

「！？ 驚くから普通の登場をしてくれ。」

「それは無理だ。一応賞金首だしな。取り下げられるなら別にいいが。」

「書類の方に手続き、それから報道規制。提示されたものは全て。」

「んじゃ、報酬のISのコアだ。」

コトツ……

「そんじゃ、失礼するよ。ああ、そうだ！一応デュノア社の連中を病院に搬送しておいてくれ。もちろん緘口令敷いてくれよ？誰かに喋ったら……消すから。容赦なく。って言うておいてくれ。」

「まあ、いいだろう。」

立ち上がった俺は再び姿を消し、フランスを出ていった。

〈皇牙 side out〉

ちょっとデュノア社に喧嘩吹っ掛けてくる（後書き）

最後グロくなってしまった。がまあ、しょうがないよね！

次は一夏のターン！！

ブルー・デイズノレッド・スイッチ(前書き)

今回は一夏たちのターン!

ブルー・デイズノレッド・スイッチ

皇牙が現在フランスで大暴れしていると同時刻・・・

（シャルside）

「えっとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ。」

「そ、そうなのか？一応わかってたつもりなんだが・・・」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと勝てないし、何より一夏の瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で避けるれるし、攻撃も出来ちゃうからね。」

「直線的か・・・」

「あ、でも瞬時加速中に無理に軌道を変えようとすると、空気抵抗や圧力で最悪骨折するから気をつけてね。」
とボクは一夏が思ってたことを先回りしていった。

一夏の話だととても分かりやすいらしい。

なんでも、篝さん達のアドバイスは酷いと皇牙が言っていた。
ために聞いてみたところ。

『ごう、ずばーっとやってから、がきんっ！どかんっ！って感じた。』

『なんとなく分かるでしょ？感覚よ感覚！・・・なんで分からないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて・・・』

うん。これは酷い。

皇牙は「アイツ等の頭ってどうなってんだろうな？」と酷いことを

言っていた。

皇牙がボクに頼んで「一夏を見てやってくれ」って言った意味が分かった気がする。

・・そういえば義兄さん、今無事かな。

〈シャルside out〉

〈一夏side〉

シャルが俺の訓練を見てくれるおかげで大分助かった。

俺の自称コーチ×3人は不服の声を上げていたが無理なもんは無理です。

しかし、今第三アリーナに居るんだが、メツチャ狭い。

学園で三名しかいないうちのその二人が第三アリーナで練習中である。

そのせいか、使用希望者が続出し、かなり過密な状況だった。

先程俺も三人ほどぶつかった。

「はい。じゃ、射撃武器の練習を試みようか。はい、これ。」

そういつて渡してきたのはシャルが使っていた五五口径アサルトライフル《ヴェント》だった。

「でも、他の装備って使えないんじゃない？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人は全員アンロックが使えるんだよ。」

「へー、なるほどなー。じゃあ、行くぞ」

「うん。取り敢えず撃つだけでもだいぶちがうと思うよ?」

バンツー!!

「うおっ!?!?」

ものすごい火薬の炸裂音に驚く。

「どっ？」

「お、おう。なんというか『速い』ってかんじだな。」

「そう。速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど、弾丸はその面積が小さい分より速い。外れても牽制になるしね。」

理解も納得もできた。

「でも皇牙はあんまり射撃武器を使わないのになんで戦えるんだ？」

「アンタ、皇牙が規格外つてこと忘れてない？」

「あんな芸当は私でも無理だ」

「色々、おかしいですわ。」

「やっぱ、思い当たるとしたら“賞金首”じゃないかな？」

とシャルルの一言で皆黙る。

世界中から追われている最高額の“賞金首”『蒼（碧）の魔導書』。

「賞金首になるようなことをしてきた」と言うことは本物の戦闘^{コロンブアイ}をやってきた、と言うことになる。

「まあ、考えても仕方がないか・・・」

「そうだね。あ、腕が離れてきているから、ちゃんと一回ごとに脇を締めて。」

「お、おう。そういえば、シャルルのISって山田先生のと大分違うよな？」

「ああ、ボクのは専用機だからかなりいいじつであるよ。正式名称は『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』。基本^{フレセット}装備をいくつか外して、その上で拡張^{バスターレット}領域を倍にしてんだ。」

「倍！？それは凄いな。」
と色々考える俺。

しばらく思考していると、急にアリーナが騒がしくなった。

「ねえ、ちよつとアレ・・・」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」
と注目を集めているのはドイツからの転校生、ドイツ代表候補生ラ
ウラ・ボーデヴィツヒ。

「おい」

開放回線で声が飛んでくる。

「なんだよ」

相手にしたくないが無視するのもあれなので答えた。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「ヤだね。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある。」
だろうな。

“ドイツ” “千冬姉” と来たら思い当たるのは一つだ。

第二回 IS 世界大会 『モンド・グロツソ』 の決勝戦だ。

その日俺は誘拐された。 謎の組織に。

酷い名だが名前が分からないからしようがない。誘拐された俺は真
つ暗い所に拘束され、長いことそこに居た。だが、突然の衝撃に轟
音。

その後、壁が崩れ光が差し込みそこに立っていたのは、力強く、凜
々しく、そして美しい姉の姿だった。

当然、決勝戦は千冬姉の不戦敗となり、大会二連覇は果たせなかつ
た。

俺の誘拐事件は公表されなかったが、俺の居場所を掴んでいた組織
があった。

そこがドイツ軍だった。

千冬姉はそこから情報をもらい俺を助ける代わりにドイツ軍IS部隊で教官をやっていたのである。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業が出来たはずだった。だからこそ、私は貴様を……貴様の存在を認めない」ということだ。

気持ちは分かるが、それはそれ。これはこれである。

「また今度な」

「ふん。ならば、戦わなければならない状況にしてやる！」

ラウラは口より手を出した。

漆黒のISを戦闘状態へとシフトさせ、瞬時に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

ゴガギンッ！

「……ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

横から割り込んだシャルルがシールドで実弾を弾き、六一口径アサルトカノン《ガルム》を展開しラウラに向ける。

「フランスの第二世代型アンティークごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルキよりは動けるだろうからね」

と二人の睨み合いは続いていた。

そんな中、突然アリーナに大音量の音が鳴り響く。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

横やりを二度も入れられたラウラは敵意が消え、ISを解除してアリーナを去った。

「助かったよ、シャルル」

「どういたしまして」

「さて、着替えるか」

「えーと、先に戻ってて？ボクやることがあるから
またこれだ。」

シャルルは何故か、俺たちと着替えたがらない。

「たまには一緒に着替えようぜ？」

「・・・一夏。皇牙から伝言。」

「皇牙から？なんだ？」

「【あまり迫り過ぎるなよ、やり過ぎると後が怖いぞ？】だって。」

「・・・皇牙に言われると現実になりそうで怖いんだけど。先に行
つて着替えるよ。」

と言って、先に更衣室に戻った。

更衣室から出た後、三人がこちらを白い目で見ていた。

・・・皇牙お前の言うとおりだったよ。

〈一夏side out〉

〈シャルside〉

一夏に義兄さんの伝言を伝えたら、すぐに引いてくれた。
凄いなあ、この伝言。

一応、一夏がいないことを確かめた後、着替えをし更衣室を出ると
山田先生が一夏に大浴場を使えることを知らせていた。

「シャルル、今月下旬から週二回大浴場使えるってよ。皇牙にも伝
えてくれ。」

「うん。分かったよ。」

そう言っで別れ、部屋の中に入るとベランダが空いていた。
義兄さんが帰っで来たのかと思っで、見てみたら。
信じられない光景を目にした。

皇牙が全身真っ赤に染めて、窓によりかかっていた。

「皇牙?!大丈夫!?!」

「シャルside out」

ブルー・デイズノレッド・スイッチ（後書き）

短いのか、これは？

想い（前書き）

短いです。ホントに

想い

（皇牙side）

IS学園に戻って来たのは良いんだが、大技を二発も繰り出しているため、疲労が凄まじく部屋に着いた瞬間寄りかかって寝てしまった。

「皇牙?!大丈夫!?!」

「・・・うあ?」

「全身血だらけだよ!!早く、保健室に行こうよ!!」

「・・・安心しろ。俺は怪我をしてない。」

「でも!?!」

「これは・・・俺の血じゃない」

「・・・じゃあ。」

「ああ、他人の血だ。返り血さ。・・・簡単に人を殺す俺が怖いかな?」

「怖いよ。でも、一人になる方がもつと怖い。」

「そうか・・・」

「・・・デュノア社はどうなったの?」

「・・・半壊させた。」

「半壊?!」

「さらに、社長もある意味“殺した”」

「ある意味?」

「俺のISには人の精神を壊す武装があつてな。それを最大威力で奴に叩きこんだ。結果、奴は植物状態になった。」

「・・・」

「・・・シャワー浴びるか。」

血を流さなきゃならないしな。

（皇牙side out）

返り血を落とし中・・・

〈シャルside〉

皇牙は最初、ボクを見て居る時の目が拒絶されることを覚悟の上で話していた。

その目がボクは怖かった。

たとえ、拒絶されても受け入れるつもりだった事だと思う。

そうやって、他人のフリをされても次の日は普通に挨拶してきて、ただ一日が過ぎていく・・・、それが当り前のように。

ボクから見たら、常人が耐えられるモノではない。

絶対に潰れて、自我が崩壊する。

だから、ボクはそうさせない為に拒絶しなかった。

支えていきたかった。

皇牙は血を落としている。だからこそ、この一言は聞こえなかった。

「私は一生、皇牙の横をどんなことがあっても一緒に歩き続けるよ。」

〈シャルside out〉

想い（後書き）

今回はシャルの想いを書きました。
そして、最後は隠れて、夫婦宣言。
だけど、未だにメインヒロインは決まっています。この調子だとハ
ーレムになるかも・・・

秘密とはバレるもの（前書き）

PVが10万超えていた。

ISも座談会書くべきかな・・・。

秘密とはバレるもの

（皇牙side）

帰って来てから、シャルは俺に甘えてくることが多くなった。だが、その瞬間を他人に見せることはなく、せいぜい二人っきりのときが常だった。

「ねえ、義兄さんいいでしょ？」

「いや、よくねえよ。」

とまあ、今も絶賛甘え中である。

だが、何故か先程から首筋がチリチリしていて嫌な予感がする。

例えるなら、識が部屋居た時に千冬がいきなり登場した時程の威力。いやー、あの時はマジで死ぬかと思った。

・・・二度あることは三度あるって言わないか？

・・・今、物凄く不安な事を言われた気がする。

やめてよ。マジでやめてよ？

というか識も千冬も今来るなよ？

一生のお願いだから。

・・・だが、世界はこつも簡単に狂う。

なんだろう、「今すぐ逃げろ！」という声や死刑宣告をされたような気がする。

そんな風に思っていたら、来てしまった。

『皇牙く〜ん、中にいる〜？』

「！？」

来やがった！本当に来やがった。

『居ないのかな？』

「シャルお前はベッドの中に入り、風邪のフリをしる。中途半端な男装したら識にバレるかもしれん。」

「う、うん。分かったよ。」

『本当に居ないのかな？』

「ああ、居るぞ。ちょっと待ってくれ。」

（皇牙side out）

（識side）

あの尋問からかなり日が経ち、しばらく会ってない為体がムズムズするので逢いに行くことにした私は皇牙くんに会いに行くことにした。

それとある未確認情報を持って。

居るかな、皇牙くん。

「そっぴえばあの時のキス・・・／／／／」

と思いだしていたら顔が次第に赤くなっていく私。今になっても恥ずかしさが込みあがってくる。

そんな中、部屋の前まで来ていた私は呼びかけた。

「皇牙く〜ん、中にいる〜？」

『・・・』

「居ないのかな〜？」

『・・・』

「本当に居ないのかな〜？」

『ああ、居るぞ。ちょっと待ってくれ。』

ガチャッ！

「えっと、識は何用で？」

「逢いに来た。じゃダメかな？」

「今、ちよいと忙しいから帰れ」

「冗談だよ。本音はちよつと質問したいことがあつてね。」

「・・・中に入れ。」

「お邪魔しまーす。」

中に入るとシャルルくんがベッドで寝ていた。

「こちらの子が転校生の？」

「ああ、シャルル・デュノアだ。」

「・・・ゲホゲホッ！シャルル・デュノアです。」

「無理して喋らなくてもいいわよん 私はこの学園の長をやっている更識 楯無よ。」

「で、質問したいことって何だ？」

「ああ、それはね・・・「コンコン」お客さんかしら？」

この来客者は私たちにとって、予想外のモノだった。

『皇牙、居るか？』

〈識side out〉

〈千冬side〉

今日、皇牙が休みと聞いて、アイツにも風邪は引くものだと思いつつながら授業をしていたが、とある情報からアイツの元に行くこととなった。

「・・・いや、しかしこの情報が正しければ・・・！」

と考えを頭で纏めながら、私は皇牙の部屋まで来た。

風邪を引いてるし、一応ノックした方がいいだろう。

・・・うまくいけば、看病までいけるかもしれん。
何を考えてるんだ、私は。

「皇牙、居るか？」

ガチャツ・・・

「何の用だ、千冬。」

「ちよつと二人つきりで話したい。」

「・・・どうしたの？」

と聞き覚えのある声が聞こえた。

「やっぱやめた。お前の部屋でしょう。」

「へっ？」

「お前の部屋で話しをすると言ってるんだ。」

「あー、ハイハイ。（修羅場確定だな。）」

「失礼する。・・・やはり居たか更識。」

「?!・・・これはこれは織斑先生今日はどうしたんですか？」

「喧嘩するなら出てけよ。」

「「むっ。」」

「更識」

「織斑先生」

「「一時休戦だ（ですね）」」

く千冬side outく

く皇牙sideく

識が話そうとした瞬間、今度は千冬が訪問してきた。

ああ、どんどん逃げ道が無くなっていく。

しかし、返事をしないと面倒ことな事が起きかねないので、対応することだ。

「・・・何の用だ、千冬？」
と受け答え千冬は二人つきりで話したいと言ってきた瞬間、識の伸びた声が聞こえ、千冬の顔は一気にしかめづらになった。

「やっぱやめた。お前の部屋でしょう。」
「げっ!!マジかよ。」

そんな事を思ってた、皇牙だが千冬はそんな想いを気にせずズンズンと中に入っていく。

「・・・やはり居たか更識」

「・・・これはこれは織斑先生、今日はどうしたんですか？」
と二人は顔を合わせた瞬間、火花をチラつかせていた。
なので一言。

「喧嘩するなら出てけよ。」
すると、二人は動きを止め一時休戦としたようだ。

「ちよつと、待ってる。お茶淹れてくる。」
とダイニングに立つ俺。

その間二人はアイコンタクトでも火花が散っていた。
飽きないね、お前らは。

「自家製のお茶だ。それと茶菓子の水羊羹だ。」

「わぁ！ありがとう。」
「気を使ってもらってすまないな。」

「で、二人は俺と話があつて来たんだろっ？」
俺が帰って来たと同時に話した、内容がだいたい予想できるが出来れば外れて欲しい。

「シャルルくんについて」

「フランスでしかした件について」

「「!?」」

二人は驚いていた。

お互いの情報とは違う情報だったが、未確認情報がまだあったことに。

「「皇牙^{くん}!!それは一体どういうこと(だ)!?」」

「・・・やはり、バレてしまったか。」

溜息を付きながら、お茶を注いで一口飲み・・・喋った。

「話してやるよ。俺が何をやったのかを」

〈皇牙 side out〉

秘密とはバレるもの（後書き）

なんだ、このグダリ感・・・。
これは酷い。

真実（前書き）

ヒッター！久しぶりの投稿だー！！

真実

「さて、なにから話そうか・・・」
と、思っているときまずシャルをこの場に出した。

「シャル、出て来てくれ」

「・・・うん、わかったよ」

そついい、シャルは布団の中から出てきた。

「まずはシャルのことだ。あまり、いい話じゃない。だから、簡単に説明するがそれでもいいか？」

「ええ（ああ）」

「済まないな、シャルが“デュノア”の名を名乗ってたのは覚えてるよな？」

二人は頷く。

「シャルはその社長の愛人の子らしい。そこから色々ありISが動かせるが分かり、男装してこの学園に潜入した・・・」
そこまで言ったとき二人は事の顛末が分かったようだ。

「なるほど、デュノア社は確か『イグニッション・プラン』の参加が危ぶまれていたわね」

「・・・そこで、デュノアを広告塔に使いながら、“白式”か“蒼（碧）の魔導書”のデータを盗んでくるように言われたのだな？」
「・・・ハイ」

「ここから、“フランス”でやらかした事に繋がるんだけどな」
そついえば、千冬はどうしてデュノア社の事を知ってるんだ？
聞いてみるか。

「千冬はなぜ、デュノア社の事を知っている？ フランスの首相に緘口令引かせた筈なんだが・・・」

「それはな、私のPCに一件のメールが届いてな。そこにお前が何をやったか、詳細されていた」

「メール？」

「・・・最後にウサギの絵と“ちーちゃん”って書いてあった」
束のヤツ、余計なことをしやがって・・・

「OK・誰なのか把握できたし、話を進めよう。それで俺は昨日・・・いや、二日前か。あるところに寄った後、フランスに密入国した後、首相のところに行き取引した」

「取引？」

「ああ、取引だ。内容は聞くな」

言ったら、まためんどくさいしな。

長らく喋っていたので喉が渴き、トウモロコシ茶を隣に座っているシャルに淹れてもらうことにした。

「悪い、シャル。お茶淹れて来てくれないか？」

「あ、うん、分かった」

そういつて、シャルは台所に向かった。

数分後、シャルは戻ってきて、各自に湯呑を配った。

「さて、ここからはデュノア社でやらかしたことなんだが・・・。

シャル、聞く覚悟はあるか？」

「・・・教えて欲しい、ボクは知りたい。皇牙が何をやったかを」
そこには覚悟のある眼があった。

「千冬に識もだ。内容が酷くても聞く覚悟はあるか？」

「そのつもりでここに居る」

「そうよ。私も同じよ」

本当に物好きだな、コイツラは。

「じゃ、話すぞ。俺はデュノア社に向かった後面会できるか、一応訪ねた。出来れば、あそこまで壊さなかったがな。」

「返答は？」

「もちろんNG。だから、俺はISを起動させ、社長室まで破壊しながら進んでいった」

「破壊ね。」

「途中、警備などが居たが邪魔だったのでそいつ等を殺しながら、前に進んだ。そして、社長室の前で無人機三機と戦闘した。」

「・・・人を殺したのか？」

「そうだ。邪魔だから殺した。それだけの理由だ」

千冬はそれを聞いた後、黙った。

「無人機を容赦なく破壊した後、ついにご対面した。そこでシャルのことを聞いたら、返答は予想通りの答えを言ってきたので、俺はキレて奴をブチのめした後、ある書類にサインさせた」

「書類？ なんの？」

「シャルを養子に出す書類だ」

「「なっ!?!」」

「養子に成ることで名を捨てることが出来る、そこで俺が引き取ることになった。・・・今のシャルは俺の義妹であり、家族だ」

「その後のあの人はどうなったの？」

「・・・そのまま何もしなければ、生きれたかもな・・・人として」

「「「!?!」」」

「ならば、さっき言った“人として”の意味は」

「お前らの想像通りだと思うぞ？」

「でも、皇牙がのISはそんなことはできないでしょう?!」

「・・・それが、出来るんだよ」

「なんだと？」

「出来るのさ、俺の“蒼（碧）の魔導書”は他人の精神を直接攻撃する力がある。それにより奴は自我が消滅し、廃人となった。ある意味殺した方が幸せだったかもな……。これが、俺がフランスでやったことだ、満足したか？」

三人とも黙っている。

当然か……。

これを聞いて正常に動ける奴が居たら、そいつは異常だ。

沈黙の中、千冬は聞いてきた。

「皇牙、オマエはどうしてそこまで出来る？」

他者を破壊してまで、自分の目的を成し遂げることが出来るんだ！
答える！！」

「簡単な答えだ。昔にも同じようなことが何度もあったからだ」

「なに？」

「俺は当の昔に地獄を味わった。だから、これぐらいの事じゃ心は痛まないし悲しくも辛くもない……。何より、俺は人間を人として扱わない奴が一番嫌いなんだ。だから、これからもそんな奴が居たら、容赦なく殺す。躊躇い無しに」

皇牙の眼は憎悪の色が浮かんでいた。

その目に耐えられなかった三人は眼を逸らし、思った。

「どうしてそこまで出来るのか？」

それが三人には分からなかった。

「そんなところだ、どうする千冬？」

政府に話すか、俺がやったこと全てを」

千冬は答えなかった。

「識もどうする？」

理事長に話すか？」

識も答えられない。

「別に話しても構わないがその時は俺とシャルは出ていき、俺は再び世界を相手にするがな。」

「話さないわよ」

識はそう答える。

「理由は？」

「貴方は確かに犯罪を行った。本来なら取り押さえるべきなんですよけど、“他人の精神を直接攻撃出来るIS”なんて持つてる相手なんて、私は勝てないわ。それに・・・（惚れちゃったし）」

「最後が聞こえなかったが、まあいいか」

「私も捕まえないぞ」

「へえ？」

「貴様は何もかも背負い過ぎだ。少しは背負ってやる」

「そうか」

「ボクは皇牙一緒に居たいよ」

「安心しろ、死ぬまで護ってやるよ」

「え」？ それってまさかプ、プロポーズじゃないよね?!」

「別にどちらの意味で取っても構わないが・・・相手が手強いぞ？」とそう言っつて、千冬達を見た。

全く、俺が人に愛されるなんておかしいね。

俺は・・・“化け物”なのに。

「内容も分かったし、私は帰るわね」

「私も帰るぞ。あ、あと皇牙。お前『学年別トーナメント』の参加禁止な」

「おう。分かった」

「へ？」

シャルだけは吃驚して声を上げた。

「いや、シャル。俺が出たらバランスどころかトーナメントする意味がないだろ？」

「ああ、そうだね」

「まあ、安心しろ。ラウラが暴走するようなことがあれば、抑え込むから」

「予想は出来てたの？」

「まあ、な。アイツが千冬に憧れ過ぎていることは知ってるし、アレはバカ一直線だからな」

「バカ一直線って酷いね」

「いや割とそうだよな、千冬？」

「ああ、そうだな」

話も終わったので、二人は帰りだした。

「じゃあ、私はこれで」

「私も失礼する」

「千冬に識」

俺は二人を呼びとめる。

「なに(なんだ)？」

「その、あれだ。・・・ありがとうな」

「どういたしまして」

そう二人は言い、帰っていった。

真実（後書き）

今回はsideがありません。
だって告白みたいなものですし。

そして、未だに“ネギまと転生者”のアーテファクトが決まらない
状況です。

・・・ヤバイ

なんでこう・・・物事がうまくいかねえんだ？（前書き）

久しぶりに投稿。

でもまた、次回の投稿は2、3週間後になりそう・・・。

なんでこう・・・物事がうまくいかねえんだ？

（シャルside）

昨日の話をしてから、あの二人はものともせず各々の業務を行っている。

ある意味、尊敬できる。

義兄さんは話したことで、なんとというか心が軽くなったのが原因なのか、現在就寝中だ。

ちなみ、授業中だけど……、しかも織斑先生のをだ。

当然、隣の女子はこっそり起こそうと声を掛けるが深い眠りについているため起きることは無い。

「（皇牙君、起きないとマズイよ…）」

「……………zzz」

しかも、ご丁寧にプレートに「起こさないでください」と書いてあった。

その時、織斑先生が義兄さんの方を見た。

クラス全員は「出席簿アタックが来る！」と誰もがそう思ったが、不可解な現象が起きた。

なんと出席簿が出ず、そのまま授業が進んだ。

をサポートする形でシャルが突入ってか？」

「……その通りだ」

「千冬、居たなら止めるよ」

「私も今来たばっかなんでな……」

「つまり、俺が止めると？」

「今日一日中、起こさなかったらどう？」

「……分かったよ」

それを言われると辛いのでしびしびアリーナの中に入った。

手に持っているのは無骨で強靱な骨の大剣『角王剣』アーティライ
ト』を持って二人の間に入った。

ちよつと、ラウラのプラズマ刀と一夏の雪片がぶつかる前に二人の
間に入り込んだ。

「お互い、そこまでだ」

〈皇牙side out〉

〈一夏side〉

シャルルと共に第三アリーナに付くとそこではラウラと鈴、セシリ
アが戦っていた。

しかも、鈴とセシリアは危険な状態だったのにラウラはそれを見る
と口元を歪めながら、さらに追撃した。

俺は無意識のうちに『白式』を起動させ、ラウラに突っ込んだ。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

「ふん、来たか……」

零落白夜を発動させながら、突っ込んだが、ラウラの前で突然停止した。

「な、なんだ!？」

「くだらん、消えろ」

ラウラの手にはプラズマ刀が握られており、それを振り降ろそうとするが……

ガガガガッ!

「ちっ」

寸でのところでシャルルのリヴァイブによって防がれる。

「一夏、離れて!!」

「お、おう!」

シャルルはそのまま、ラウラに反撃を許さないように射撃を続けける。

俺はその間に鈴とセシリアを回収した。

お互い、まだ息はあったので安心した。

そのとき、ラウラが攻めに転じようとしたので、俺は零落白夜を持ち迎え撃とうとした瞬間、俺とラウラの間にも巨大で無骨なブレード(?)が俺達の間割り込み、俺たちは制止した。

「お互い、そこまでだ」

声の主はなんと生身姿の皇牙だった。

「こ、皇牙!?!」

「……………皇牙」

「俺の面倒を増やすな、アホンダラ共が」

「……………アホンダラって酷いよ、皇牙」

「シャルルは黙ってる」

「ちようどいい!! 皇牙、ここで貴様を葬って……………」

「…!?!」

「テメエ、今なんつった?」

皇牙はラウラの行動に腹がたったのか、怒りをあらわにしていた。

「葬ると言ったんだ!!」

「“殺し合い”すらしたことのねえ、クソガキが調子に乗ってんじやねえぞ?!」

「貴様!!」

今度は皇牙(生身)VSラウラの戦闘図が出来てしまい、一触即発だった。

そこに、真の女神は現れた。

……………パンツ!

「……………止める役のお前が喧嘩してどうする?」

「……………スマン、頭に血が昇った」

手を叩いて、二人を止めたのは千冬姉だった。

「やれやれ。織斑、ボーデヴィツヒ。この戦いの続きをしたければ、学年別トーナメントでやれ、いいな？」

「教官がそうおっしゃるのであれば……」

「あ、ああ」

「返事は『はい』だ。織斑」

「僕もそれで構いません」

いつの間にかシャルルが俺の後ろに来ていて、返事をした。

「では、学年別トーナメントまで、私闘を禁じる！ 解散！！」

……パンツ………

再びアリーナに乾いた音が響き渡った。

〈一夏side out〉

〈皇牙side〉

現在、俺たちは保健室に居る。

あの一件から一時間程度経っているが、鈴とセシリアは未だに機嫌が直らないし、あともう一人も機嫌が直らない。

我が義妹の顔は笑っているが、暗黒のオーラをひしひしと感ずるんだ。

………これは怖い。

「で、喧嘩していた理由なんぞ、100%………」「喋らなくたっていい……」「……」

「ああ、なるほどね。そういうことか」
シャルは一瞬で分かってくれた。
やはり同じ女子だから、そういうことには鋭いのだろう。
当の本人は気が付いていない……………この朴念仁め。

「取り敢えず、落ちつけバカ共……………ほれ、ウーロン茶と紅茶」
渡すと、ひったくるようにお茶を取り一気に飲み干す二人。
そんな中、保健室の外から「ドドドツ！」という足音が聞こえてい
た。

なんとなくこの後の予想がついたので、配置転換をすることに。

「シャルル、俺の横に來い。一夏はドアの直線状に居てくれ」

「うん、分かったけど……………どうしたの？」

「ん？ ああ、分かったが……………一体何が？」

言う通りに動いてくれた二人、感謝する。

一夏にはちよつと、痛い目に遭ってもらおう。

あれもこれも一夏がはつきりしないから、ああいう事が起きるんだ。
そのあと、事が起きた。

ドカーン！

保健室のドアが吹っ飛んだのだ。

そして、見事にソレが一夏に直撃した。

「な、なあ！？」「ガアンツ！」「へぶつ?!」

「おお、見事にヒットした」
「一夏、大丈夫!？」
ドアが顔に当たり、倒れる一夏を介抱するシャル。
……介抱しなくてもいいのに……
すぐさま、嫁候補の二人がそこに居るんだから……
その後、ドアをふっ飛ばした主格犯たちが登場した。

「織斑くん!!」
「天龍覇君!!」
「デュノアくん!!」
「これ!!」
そう言っただけで提示してきたのは一枚の紙。
なんだ、コレ?
内容は……つと?

「『学年別トーナメントは二人組で ……そういうことか』
「私と組んで天龍覇くん!!」
「私と組んでデュノアくん!!」
「私と組んで織斑くん!!」
ここに居るのは全員一年生（リボンで分かった）なんだが……怖い
んですけど。
なんというか、一度でも捕まったら、二度と帰ってこれなさそうだな。

「言っておくがこのトーナメントには、俺は出ないぞ?」
「えっ!？」
「上からのお達しでな、参加禁止になった。それと、一夏はシャル

「 皇牙、ありがとう」

「 ……何が？」

「あの場でぱつと決めてくれて……アレ、私の正体がバレたらマズイと思つてやったんでしょ？」

「あー、うん、まあそうだな」

「（ズルイよねえ……義兄さんは、さりげないフォローをする割には自分は関係ないと言い張るところが）」

「まあ、いいや。はよ寝よ、バカ共抑えるのに無駄に疲れた」

「 ……そうだね」

そう言つて、部屋に付いた俺たちは寝ようと思つたら、俺のベッドが膨らんでいたの、剥がしてみるとシャツ一枚で識が潜り込んで寝ていた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

わぁー、シャルロットさんが凄く怒ってる。

……俺、今日寝れんのか？ これ？

（皇牙side out）

そのあと、色々あったが、結局のところ三人で寝ることとなりました。

なんで「うう」・・・物事がうまくいかねえんだ？（後書き）

あそこで起こさなかったのは千冬なりの愛情表現です。

ファインド・アウト・マイ・マインド(前書き)

ようやく原作二巻が終わった。
シリーズはやりづらい・・・

ファインド・アウト・マイ・マインド

（一夏side）

今、俺達はアリーナの更衣室に居る。

「しかし、一年の部……第一戦目ってのは運がいいな」
「なんで？」

「こういうのは勢いが大事だ」

「一夏らしいね。でも気になってるのはボーデヴィツヒさんとの対戦でしょ？」

「まあ……な」

そう言っこのトーナメントに出れない二人の事を思った。

「……自分の力が試せないのは辛いだろうしな」

「感情的にはならないでね……。彼女はおそらく一年女子の中では最強だと思うから」

「……ああ」

そんな話が終わるときにまるで見計らったように対戦相手が表示された。

「……え？」

対戦相手はラウラ・篝ペアだったからだ。

（一夏side out）

（皇牙 side）

俺は参加禁止なので千冬と共にモニタールームに居る……
一夏が第一戦に出るのは先程知った。
そしてトーナメント表が出来て、一夏の対戦はなんと

『ラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之 箒』

と書かれていた。

「オイオイ、マジかよ。一戦目からこれは荒れるな……」

「……だが、抽選による結果だ。仕方があるまい……」

「そっいいいながら、内心メツチャ心配してるのがバレバレだぞ？」

「……………」

コイツの癖みたいなものだ、昔からの 特に一夏限定だが。

分かる人しか分からないが若干目つきが変わるんだ、本当に若干だが。

俺は初見で見破ったけどね。

俺にも護らなければならぬ人物が居たが、出来ずに死なせてしまったからな……、本当にこういうことには気が付きやすいんだ。

「お、これから始まりか……。さて、どうなるかな？」

「……………さあな」

……………本当に素直じゃないことだ。

（皇牙 side out）

くシャルside)

トーナメントが始まってから、一夏は開始直後すぐさま先制攻撃を仕掛けたが、それはラウラのAICによって止められた。

そのあと、ラウラは大型レール砲で反撃しようとするが、それはさせない！

「させると思ってる？」

《ガルム》でラウラ目掛けて放つと、ラウラはAICを解除して後ろに下がった。

「逃がさない！」

追撃しながら、随時新しい武器を呼び出していくボクの得意な『ラビ高速切替』でラウラにAICを使わせないように追い詰めていくがそこにもう一人の対戦相手が出てきた。

「私を忘れてしまっては困る！」

「なら、俺が相手してやるよ！」

一夏が瞬時加速をしてぶつかる瞬間、ボクは宙返りをして一夏と位置を変えた。

このまま、うまく作戦が行くと思ったら篠ノ之さんがいきなり引き摺り落とされた。

どうやら、ラウラのワイヤーが原因だったようだ。

というよりも、やはりラウラは最初から篠ノ之さんを数に入れておらず、一人で戦っていると言う感じだった。

『一夏、どっするっ。』

『このままやらせてくれ』

『でも作戦では……』

『頼む』

『分かったよ』

短い会話をしたあと、ボクの目の前に落ちてきたのはラウラのワイヤーによって引っ張られた篠ノ之さんだった。

「一夏じゃなくてゴメンネ」

「なっ！？ バカにするな！！」

ボクは早く一夏の元に戻る為に目の前に集中した。

〈シャルside out〉

〈一夏side〉

今、俺はラウラに喰いついていた。

零距离高速格闘での戦闘、いずれ切れてしまう集中力をシャルルが来るまで必死に保ち続けて。

「……………そろそろ終わりにするか」

ヤバイッ！

そう思ったときにはAICによってすでに体を止められていた。

俺を大型レール砲が狙っていた、しかも砲弾は対ISアーマー用特殊徹甲弾だった。

「（回避は間に合わない……なら、軌道を読んで斬るしかない）」
右手に力を込めるが、突然腕が動かなくなった。
右手にはワイヤーが一本だけ巻きついており、それによってAICによる停止結界が作動した。
そのとき、上空からシャルルが入り盾で弾丸を防ぎ、直撃を免れた。

「お待たせ」

「助かったぜ、シャルル」

「どういたしまして」

「筈は？」

「お休み中」

「分かった、なら……始めますか」

「そうだね」

お互いに頷く　　これからが本番だ！

「俺達（ボク達）のコンビネーションってやつを……」

（一夏side out）

（ラウラside）

私はある時から闇の底に居たが其処から引き揚げてくれた人が居た。

それはもちろん『織斑 千冬』

私の憧れた人であり、その堂々とした姿に焦がれた。だが、ときどき教官が見せる表情が妙に気にいらなかった。理由を聞いてみると日本に居る“弟”だった。

「私には弟がいる」

「弟……………ですか？」

「ああ。あいつを見ているとわかる気がする。強さとはなにか。その先にあるモノが……………」

その時の表情が今まで一緒に居た中で見たことの無い表情だった。そんな風に教官を変えてしまう、その男が許せなかった。

だから私は決意した。

徹底的にあの男を叩き潰すと。

だがそのためには

『力が欲しい』

そう願った。

そうすると、私の奥底から声が響いた。

『 願うか……………？ 汝、自らの変革を望むか……………？ より強い力を欲するか……………？ 』

力をくれるならその力を私に寄せせ！！
あの男を完膚なきまでに叩き潰す力を
唯一無二の力を、私に
寄せせ！！

Damage Level …… D .

Mind Condition …… Uplift .

Certification …… Clear .

《 Valkyrie Trace System 》 ……
boot .

（ラウラ side out）

（皇牙 side）

一夏とシャルの見事なるコンビネーションでラウラを追い詰めていき、シャルがラウラに向かって瞬時加速で懐に潜り込み『盾殺し』シールド・ピアースで腹部に叩きこみ、勝敗が決まったかと思ったら、なんかラウラが変化した。

「なんだ、アレ？」

ラウラのISが変形して、この前来た黒い全身装甲みたいになった。

「おい、千h……」

『非常事態発令！ トーナメントの全試合は中止！ 状況レベルDと認定、鎮圧のためある者を送り込む！ 来賓、生徒はすぐに避難すること！ 繰り返す！』

ん？ ある者だつて？

モニタールームにいる人達が俺を見ていた。

……………こつちみんな。

「……………皇牙行つて来い」

「何故俺?!」

「この前自分で「ラウラが暴走したら俺が抑え込む」と言ったのはドコのどいつだ?」

「まさか本当にするハメとなるとは……………」

「どうでもいいからさっさと行つて来い!」

「ハイハイ」

そして、問題のアリーナに行くと一夏がラウラだったモノに突っ込んでいきました。

俺、いらねえだろ。……………この状況。

だが、言ってしまったことは仕方がないのでやることにした。

「はい、どうも。鎮圧しろと言われたある者です」

「……皇牙?!」「……」

「なんでここに皇牙が?!」

「アナウンス聞いとけや」

「で、皇牙が鎮圧するってのは本当なの?」

「だから、ココにいるんじゃない」

そう言つて、両腕のみISを起動させ『双剣 双龍神【黒天白夜】』を構えた。

「それじゃ、行きますか」
俺はラウラと対峙した。

「オマエ、そんな力で一夏アイツを叩き潰したかつたのか？」
聞いたしたが、答えることなく向かってきた。
横薙ぎに払つてきたが潜り込み、双剣を振るつた。

「はあああああああ！……！」

斬る！

俺は剣を振るまくつた。

突き、横薙ぎ、縦切り………高速で両腕を振るい反撃すら許さないほどの連撃がラウラを襲つた。

ガキツ！
ギイン！
ガギャリギャリ！
ガガガガガガガガガ！

凄まじいほどの音がアリーナに響き渡っていた。
ラウラのボディには所々剣戟の傷が全身に付いていた。

当のラウラだったモノはなんとか反撃しようとして剣を上から無理矢理振るった……、が、俺はその一撃を左右に回避し締めに入ることにした。

「双剣の真髄……魅せてやるよ！」

鬼人化……発動！！

紅いオーラが全身を包み込み、さらに力が高まった。

「うおおおおおおオオオオオオ！！！」

両雑ぎした後、右に左に腕を振るい斬撃の嵐を止めることなく与え続けた。

途中で一夏の声が聞こえたのでハイパーセンサーで見ると、一夏が『零落白夜』を発動していたので締めを譲ることにした。

「っセイ！」

両腕を同時に上からしたまで振り降ろした後、後ろに回り込み一夏の方に蹴り飛ばした。

「行くぞ、一夏！　っラア！！」

（皇牙 side out）

（一夏 side）

皇牙突然出てきていきなり、アレを抑え込むからと言ってきた。

理由を詳しく聞く前にラウラの前に立ち、やられると思ったが寸での所で避けて、懐に潜り込んだ瞬間、斬撃の嵐だった。

右手の黒い剣と左手の白い剣が斬る度に、黒と白の光を出す光景がまるで俺たちのように見えた。

休むことなく続く連撃にラウラは反撃すら許されず、なす術も無く斬られ続けていった。

「……一夏、エネルギーの譲渡行くよ？」

「あ、ああ。頼む」

「……あの戦い方が気になるのか？」

「ああ、筈はアレをみてどう思う？」

「一言で言うなら、凄まじいな。皇牙と一度手合せしてみたいものだ」

「……止めた方がいいと思うよ。よし、エネルギーの譲渡完了！」

「助かったぜ、シャルル」

「シャルル、どういう事だ？」

「ボクの見立てではまだアレでも本気を出していないし、第一、手合せを断ると思うんだ」

「何故、そんなことが分かるんだ？」

「聞いたんだよ、本人にね」

「なんて答えたんだ？」

「一度しか言わないよ？　皇牙曰く『俺が振るのは何かを……で護るときだ』ってね」

「途中なんて言っただんだ？」

「もう言わないよ。言っただでしょ？一度しかって」

「それよりも、一夏早く行ってきなよ。自分で締めるんでしょ？
いつまでも皇牙に任せっぱなしも悪いんじゃない？」

「お、おう！行ってくる。……皇牙！」

皇牙に向かって叫んだ後、皇牙は連撃を止めて、こちらに蹴り飛ばした。

「……………！！！」

千冬姉の姿を真似した剣を振るったがそこに意志は無かった。

「ただの真似事だ」

腰から放つ一閃で敵の武器を弾き、素早く上から上から両断した。
これぞ『一閃二断の構え』。千冬姉に教わり、箒の姿に学んだ、型。

「ギ、ギ……………が……………」

ラウラを纏ってた黒いISが真っ二つに割れた時、気を失うまでの間ラウラと目が会った。
まるで

『助けて欲しい』

と言わんばかりの眼だった。

「まあ、ブツ飛ばすのは勘弁してやるよ」

（一夏side out）

次の日……

（皇牙side）

朝、シャルはちよつと「職員室に行く」と言っていたので今日は一人で教室に向かった。

そこに凄つごい沈んでる山田先生が入って来た。

「お、お早うございます」

もしかして、山田先生は朝は低血圧なのか？

「天龍覇君、これは冗談にしてもらいたいですよ。私を子供扱いしようとしているなんてダメですからね？」

俺が原因なの？ ……まさか。

「山田先生、俺ちよつと逃げても良いですか？」

「なんでですか？」

「いや、この後の被害が凄まじいんで出来れば最小に抑えたいんですか……」

「……ダメだ」

「千冬、何時の間に!？」

「学校では織斑先生と呼べ！」

「きよ、今日はですね。皆さんにお知らせがあります。……転校生
っていうか、転校と言つのか……、そ、それではどうぞ……」

「失礼します」

その声の持ち主が分かった瞬間、俺は窓を開けて抜け出そうとした
が……

ガシッ！

「どこに行くつもりだ？ 皇牙？」

「離せ！ チクシヨー！！」

「天龍覇・シャルロットです！ 皆さん改めてお願いします！」

「……えっ？」「……」

しばし沈黙が教室を支配したが『時』は動き出す……

「え？ デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「ちよつと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場使ったわけね！

？」

「その前に今……『天龍覇』って言わなかった！？」

俺の命日じゃないかな、これは？

そんなことを考えてるとドアが勢いよく開いた。

鈴がIS稼働してこっちにやってきたよ。

「一夏あ!!!!!! 死ね!!!!!!」

「待て!!! 鈴!!!」

「何よ!!! アンタは黙ってなさい!!!」

「一夏は一緒に入っていないぞ?」

「「「……………え?」」」

一夏は俺の方を見て「皇牙、有難う」と言う目を送っていたが、甘いぞ一夏!!!

にこやかに俺は続けて言う。

「だが、一緒に入ろうとしていたのは確かだ」

「こ、皇牙! テメエなんてこと言いやがる!!!」

「オマエだけ、安全圏させると思うか? 一緒に地獄に付き落とすてやる!!!」

「このド畜生が!!!」

火に火薬を投下させました。

「……………ふふ、一夏あ、やっぱ死ねえ!!!!!!」

衝撃砲ぶっぱなしてるよ。

ありゃ、死んだかな? 次第に煙が晴れてきた。

一夏はラウラのISに守られていた。

「……………助かったぜ」

この後の光景が新たな火種を生みだした。

一夏とラウラが公衆の面前で堂々とキスしたのだ。

これには俺以外の全員が呆けていた。

あの千冬すら呆けていた。

しかも、手に力が抜けていた。逃げれるチャンスじゃないか!!

「お、お前を私の嫁にする!!!」

「いや、婿じゃないのか?」

「……………異論は認めん!!!」

あの言葉教えたのは絶対クラリツサだな。

どこかズれているんだよなあ、アイツ。

「……………はははは」

後ろを見てみると……………ヤ、ヤバイ!!!

「ラウラア!! ヤバいぞ!! 千冬がキレた!! 全員逃げろオ

!!!!」

「……………え?!!」

「悪いが俺は逃げる!! 巻き込まれたくないからな!!」

ギシッ!

「がつ?!!」

肩に手の跡が付くほど握られていた。

「皇牙、貴様、デユノアと一緒に風呂に入ったそうだな？」
聞こえてないと思っただが、いや、まだ千冬だけならセー…

……

ガラッ！！

「皇牙くん？ ちょっとO H A N A S H I I しよっじゃない？」

識が飛んで来た。

セーフじゃねえ！！

アウトオオオオオオオ！！

一夏の場合、火に火薬だったが、俺の場合、火に核爆弾×2じゃね？
しかも、ラウラに対する怒りがこっちにも来ている気がする。

261

「なあ、一夏」

「なんだ、皇牙」

「協力しないか？」

「奇遇だな、俺もそう考えていたところだ」

「よし、じゃあ………逃げるぞ！！」

「………待て

！！！！！！」「」「」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

（皇牙side out）

フアインド・アウト・マイ・マインド(後書き)

最後は阿鼻叫喚の図が出来上がりつと。

生徒会に強制入b・・・いえ、自分から入部しました。(前書き)

お久しぶりです。

“真恋姫”に集中しすぎてましたが、ちゃんと二週間更新はしますよ。

生徒会に強制入b・・・いえ、自分から入部しました。

（皇牙side）

昨日の命がけの逃走劇から一夜明けた。

今は一人部屋になっている。

シャルが女と分かったんで、部屋替えした。

だけど……………朝になると何！ 故！ か！！ 例の如く識が潜り込んでいるんだよね。

……………この部屋改造しちゃダメかな？ 侵入防止策として。

さっさと識を起こそう。

さきほどから一夏の部屋からは修羅場の雰囲気伝わってくる。

中に居るのはどうやらラウラらしく、そこに筈が登場して修羅場になつてゐるらしい。

スヤスヤ寝ている識を起こすのは罪悪感があるが、俺の平穩の確保のために起きてもらおう。

「おい、識起きろ」

「……………zzz」

見事に寝ている……………いや、これは狸寝入りしてやがる。

口元が微かに動いたのを確認出来たからだ。

ほう？ そう来るか。なら……………

「それにしても識がこんな姿で寝てると……………襲いたくなっちゃうな」

「え”？！”」

ガバツ！ つと起きた識はその後「……………あ」と言って冷や汗が出た。

「やあ、おはよう……識」

「え、えつとね、オハヨウゴザイマス」
俺の手にはハリセンがある。

「取り敢えず一言………何度も潜り込んでんじゃねー!!」

バシンッ!

「いつつたー……い!!」

IS学園最強の座を持つ女も皇牙の前では“ただの恋する乙女”であつた。

〈皇牙side〉

〈識side〉

私は寝つけられないときは、皇牙くんのベッドに潜り込んで寝ている。

何故か、そこで寝ると自然と寝れるのだ。

昨日の逃走劇のせいか、皇牙くんはぐっすりと寝ていた。
そして、朝はやっぱり怒られた。

「……で、反省してんの?」

「……はい。スミマセンでした」

「なら、食堂行くか」

「あ、昨日話したように授業終わったら、生徒会室に来てね？」
「…………分かった」

渋々返事してる皇牙くんだった。

昨日の逃走劇の結果、一夏君が先に捕まり、皇牙くんもその5時間後に捕まった。

そして各々連行されて、皇牙くんは一方的な約束を結ばれた。

私は生徒会に入ることを約束させ、織斑先生は来週行く校外実施特別期間に行ったときに“海”に入るので買物に付き合えと約束させていた。

ちなみにこの約束はあと2回ほど使える。

その時の表情はこの世の終わりのような表情だった。

さて、私も授業に出ないと!!

〈識side out〉

〈皇牙side〉

授業が終わり、千冬は未だに“俺に対して”だけ機嫌が悪い。

…………あれだけ理不尽な約束を作っておいてまだ不満なのかよ。

何はともかく、俺は生徒会室に来ていた。

コンコン……

「…………どうぞ」

「…………失礼します」

「あー、こゝくんだ」

この間延びした発言は…………やはり本音か。

「何やってんの？ 本音」

「私は、生徒会に入ってるんだよ」

「マジかよ」

「 本音、こちらの方は？」

「あ、お姉ちゃん。この人は、私と同じクラスの……天龍覇
皇牙」だよって、会長？」

「どうも……」

俺は本音のお姉さんに軽く挨拶した。

「私は布仏 虚。こつちが分かっているとっけど妹の布仏 本音よ、
よろしくね」

「ねえねえ、こゝくん」

「ん？ 会長と付き合ってるの？」

「な”っ!？」

「え、そうなんですか？ お嬢様？」

うん？ 今聞きなれない単語が出たぞ？

「お嬢様？」

「お嬢様っていうのは止めてよ」

「すみません、クセでつい……」

それなりの良家のお嬢さんってところか……

「で、どうなの？ こゝくん」

「いや、付き合っていないぞ？ まだな……」

「“まだ”ってことは、付き合つかもしれないってこと？」

「……かもな」

「そう言えば、こゝくんはどうして生徒会に？」

「それは、そこで未来を想像した世界に入り込みかけている生徒会長に聞いてくれ」

顔を真っ赤にしていたが、ここがどこなのかを思い出したのか想像を止めて、正気に戻った。

「会長、なんですか？」

ズバッ！と斬り込む本音のお姉さん。

「約束だから」

「約束？」

「……昨日、俺と一夏の逃走劇は知ってるよな、本音？」

「うん、凄かったね」

「あれで捕まった時に……な」

「理解したよ」

「ということ！ 皇牙くんには最初は分からないだらけだと思うから、簡単な書類整理から覚えていってね？」

「……分かった」

そう言っただけで置かれたのは部活動の陳情書だった。

「これ陳情書だぞ？」

「がんばってね？」

「……ああ、抗議は無理ですか……いつかささやかな反撃をしてやる」

「……楽しみにしてるわね」

畜生、今は何言っても無駄だなこれは……。
取り敢えず、内容を見ることに。

「テニス部『無我の境地に至りたいです』ちょっと、全国のテニスプレイヤーに謝って来い。次、サッカー部『イナ マイレ ンみたいに強烈でかつこいいシュートをうちたい!!』出禁になるぞ?」
次、弓道部『偽・螺旋剣!』お前らはどこぞの正義の味方か?
? 次、料理部『天龍霸くんの料理をください!!』どこで知った?
? 次、剣道部『一番いい装備で頼む』そんな装備で大丈夫か?
…何か電波を受け取った気がする。次、空手部『……レイジングストーム!!』ただし、ロツク! てめーはダメだ!! ……また受け取った気がする。つと、これで終わりか。碌なモノが無かったな」
「お疲れー」
そう言つて、紅茶を渡してきた識。

「いつもこんなことやってんのか?」

「だいたいわね……でも、今年は皇牙くんと一夏君が入ってきたからもつと大変よ?」

「……騒動の種になるのか、嫌だなあ。……それにしても、紅茶が美味い」

「虚の入れるお茶はいつも美味しいのよ」

「……有難うございます」

そうして俺は他の書類整理をこなしていった。

〈皇牙 side out〉

生徒会に強制入b・・・いえ、自分から入部しました。(後書き)

次回は千冬とデート(？)かな。

まあ、修羅場になりますね・・・多分。

デートにはたいてい、追跡者たちがいる

（皇牙side）

うい、皇牙だ。

今現在ちよつと買い物もといデート中だ。

相手は誰、だつて？

鬼教官……………いや、千冬です。

「出来れば、もうちよつと離れてくれないか？」

「それは無理だな。そんなことしたら……………」（折角、大胆になってみたのが無駄になってしまつてはないか）

「そんなことしたら……………なんだ？」

「……………なんでもない」

女の心は複雑怪奇だな。

というか、通行人とすれ違つと必ずこちらに振り返つてきた後、囁いている。

しかも、さらに悪いことに約500m後ろについてくる集団がいる。髪の色は金髪が二人、蒼髪、銀髪、黒髪と黒髪のポニーテールとツインテール……………。

どう見ても、一夏達です。本当に有難うございました。

「……………皇牙、どこを見ている?!」

「……………いや、まあ、アイツ等をシバき倒してやるつかと」

「?????」

「というか、買い物つて何買うんだ？」

「来週から校外実習だ。……その時に自由時間があるんだが、目の前が海だからな。水着を買っておかなければならないんだよ」

あー、そういえばそんなこと言ってたね。
俺も買っておくか。

水着売りに場にて……

……… 凄い居づらい。

だって、女物の売り場だしなあ。こつちを奇異な目で見てきたり、ゴミクズな目で見たりと様々な視線を感じてしょうがない。
そんなとき……

「ちょっと、そこのアナタ！」

「………ん？」

「アナタの事言ってるのよ」

「なんか用か？」

「そこにある水着を片付けておいてちょうだい」

そう言つて、見知らぬ女性は放り投げた水着に指をさす。

「………」

壁によりかかっていたが、再びよりかかり千冬を待つことにした。

「私の言う事が聞けないの？ それなら………」

そう言つて、女は警備員を呼ぼうとしたので言つてやった。

「……アンタは弱い人間だな」

「なんですつて？」

「女性が優位に立つ世の中でその“システム”を利用することでしか生きられない人間ほど愚かなモンだ。そして、アンタみたいな人間がより社会を腐らせていく……。その中でもアンタは“システム”がある間でしか吼えられない存在だよ」

「アナタねえ！！ お巡りさ……。私の男に何か用か？……え？
タイミングを読んだように、千冬が登場。」

「貴女、その無礼な男をちゃんと躰といてくれないと困るわ」

「と、言ってるが皇牙。お前何をした？」

「別に……。ただ、“女性優遇”というくだらない大義名分で人をこき使おうとしたその女性に自分の存在がどんなモノなのかを軽く教えてやったただけだが？」

「言い直しながら説明するな」

あれ？

間違つてたかな、俺の言ったことは？

「フン！ まあいいわ……。これだから男は……」

そう言つて、去っていく女性。

「いずれそんなことを続けていたら、捕まるぞ?」
「事実を言ったままで。それに俺は嫌いなんだよ……。知らない女に権力を振りかざされるってのは。……で、水着は買ったのかよ?」
「今、悩んでいてな。皇牙に決めてもらおうかと思っただけよ?」
「黒と白、どちらが良いと思う?」
「黒と白か……。」。
「悩む必要はないけど、悩んでみる。」
「まあ、千冬には黒が似合うよな。」

「……黒で」

「だと思っただよ。買ってくる」

「おう。俺も買わないと……。」。

千冬が会計している間に、俺はパパッと選んだ。

トランクスタイルの水着と上に羽織る薄い上着を購入した。

ちよっと、訳ありで上半身は見せるわけにはいかないんだよ。

その後、千冬を待つてるとついてくる集団が首根っこ掴まれて連行されてきた。

〈皇牙 side out〉

〈千冬 side〉

今日は皇牙と買い物もするがデートみたいなものだ。

腕に抱きつきながら歩くと、すれ違う通行人が囁いている。

「あの人、カッコいい!! でも、あの女性……。彼女かしら?」

「ああいう人と結婚してみたいわね」

「あの二人をみると様になるわね」

そう聞こえてくる囁きがいつそう私の心を躍らせる。

不意に皇牙が後ろに気を回した。

皇牙はすぐにこちらを向いたが、後ろがどうやら気になるらしい。

そんなこんなで目的地についた私達は、女物の水着売り場で私が選んでる間、皇牙は少し離れた場所で壁に寄りかかりながら、佇んでいると見知らぬ女性が皇牙に水着を片付けるように命令するが、皇牙は動かず、業を煮やした女性は警備員を呼ぼうとした時、皇牙の口が開き、女性を（言葉で）叩き潰した。

その後、私が出ていき事態を收拾させた。

皇牙に気分を変えてもらう為に決まった筈の水着を皇牙に選んでもらう言う風にした。

「では、買ってくる」

そういい、会計を済まし戻ろうとしたら、見覚えのある髪があったからそちらに近づくと……………

「ほう？ 覗き見とはいいい御身分だな？ 一夏、篠ノ之、鳳、オル

コット、天龍覇、ラウラ、更識？」

「……………げっ!?」

「逃げるなよ？ バカ共」

「……………ハイ」

そう言った後、ついて来させた。

更識とシャルロットは隙を見て逃げようとしたが、首根っこ捕まえて逃げさせないようにしながら、皇牙の元に戻った。

「千冬side out」

「皇牙side」

やっぱり、ついてきやがったな。

「で、俺達の後をついてきたことに対しての謝罪は？」

「……………スミマセンでした！！！！」「……………」

「この後、どうしようかな？」

「皇牙は何か予定が入っていたのか？」

「いや、この後千冬を食事にも、誘おう……………うおっ!?!？」

「夏達を見ると、目で「俺達も誘ってくれ!!」という視線が送られてきた。」

「……………素直に言えば、連れていっても」「連れて行ってください!!」「……………早いぞ、シャルに識？」

「だが、いいのか？ 金銭的に余裕があるとは思えないが……………」

そこで、通帳を見せた。

千冬は見たあと、動作不良を引き起こしていた。

なんせ、そこに載っているのは0が12個もついていたからだ。俺も初めて見た時はビックリした。

というより、この特典は俺を転生させた女神がその辺を色々と賤別として付けてくれたらしい。

俺が住んでいた家のローンも払い済みで土地代とかその他諸々も全部オールOKになっていた。

しかもカードとかは全部Blackカードだったし、働いてもいな

いの何故か月に軽く1000万は振り込まれてる。
……女神の奴、やり過ぎじゃね？とか、思った頃があったが諦めた。

「で、どこにする？」

「……………」

「ダメだ、反応出来てねえ。まあ、保護者(千冬)が居るし、酒が飲めてそれなりに広い所に行くか」

「……………」

「合法的に酒が飲めるんだぞ？ もっと喜べよ。それにそろそろ酒の味を覚えておいても悪くは無い」

「……少年少女に酒の味を覚えさせようとするな！」

「おや、千冬。ようやく起きたか」

「で、付いてくる人は誰だ？」

「周りをざっと見渡すと……………」

識、シャルは確實。

セシリアは検討中、ラウラは「一夏が行くなら、付いていく」と、

鈴は答えていないが多分ラウラと同じであろう。一夏は迷い中だが、「行く」方に意志が傾いてるみたいだ。

箒は反対と……………」

しょうがない、一夏ラバーズに言ってやるか。

「もし、好きな男と食事に行くときに酒の味を知っていたらそれなりに優位に立てるぞ？」

「……………」

「最後通告だ、付いてくる人はー？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「それじゃあ、行くつか」

その後、食事をしたんだが、まさか鈴と箒があそこまで酔っつとは思
わなかった。

逆に識は、飲んだら飲んだであそこまで甘えてくるとは……………。
シャルは黒シャルになってました。

（皇牙 side out）

・・・酒を飲むときは以後気をつけよう・・・

デートにはたいてい、追跡者たちがいる（後書き）

次から校外実習だー！ー！！

オーシャンズ・イレブン（前書き）

サブタイトルが思いつかんかった……orz

そして、このタイトルを見てると映画の『オーシャンズ』を見た
くなってきた。

……TSUTAYAに行つてこよつと

オーシャンズ・イレブン

（皇牙side）

俺達は今バスに乗ってる。

隣はいない……いや、居たわ。一夏が居る。

ハア〜、本当なら飛んで行きたかった。

最近、「龍化」していかないからなあ……まあ、しすぎもいけないんだけどね。

何事にも適度が大切なんだよね。

とまあ、俺は悩みどころだが、俺以外の皆さんは『海』で泳げるのが楽しみらしく「海に着いたら、何をするか」で大盛り上がりしていた。

というか学園出てから、このテンション維持出来るのがスゲエや。

「静かにしろ！ そろそろ目的地に着く」

そう注意すると、一瞬で静かになる。

指導力あり過ぎだろ……

そして四台のバスは旅館前に止まり、俺達はその前で整列した。

「これから三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないようしろ」

「「「よろしくお願いしまーす！……」」」

挨拶すると、旅館から着物姿が似合う女将が出てきた。

「はい、こちらこそよろしくお願ひします。……………して、そちらが？」

「ええ、今年は男が二人もいるせいで、浴場分けが難しくなってますみません」

お世話になるんだから挨拶はしないとね。

「天龍覇皇牙です。三日間、お世話になります」

「お、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

「あらあら、ご丁寧にどうも。清州景子です。それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれない方は別館に更衣室がありますのでそちらをご利用してくださいな。場所が分からなければ、従業員の方に聞いてくださいまし」

そう言うと、女子全員は旅館に一度入った。

荷物を置いてからということか……………

「さて、織斑と天龍覇、お前たちの部屋はこっちだ」

と歩いていくと、とある部屋で千冬は止まった。

『教員室』

と、そう書いてあった。

「織斑は私と同室だ。本当は個室の話だったんだが、それだと絶対就寝時間を無視して部屋に入ってくる女生徒が出てくるから無しになった。そして皇牙、お前は個室だが、私達の隣の部屋だ」
「了解です」

俺は隣の部屋に荷物を置きに行こうとしたが、それを千冬が止めた。

「それと、お前達も一応大浴場は使えるが、時間交代だ。だから朝入りたくなったら部屋のを使い」

「わかった」

「織斑先生はこの後どうするんですか？」

「私はこの後他の先生たちとの連絡などを取りなければならぬが……まあ、軽く泳ぐとしよう」

そう言った後、俺の方を「チラッ」と見てきた。
ハイハイ、待ってればいいんでしょう？

取り敢えず、部屋に入って荷物を置き、片手でも担げるリュックサックを取り出して水着とタオル、あと薄い上着を入れ、替えの下着も入れて別館に向かう事にした。

〈皇牙 side out〉

〈一夏 side〉

俺と皇牙、そして別館に向かう途中で篁と出会ったので一緒に別館に向かう途中で『ウサミミ』が生えていた。

………多分、間違いなくあの人だと思う。

「なあ、これって……………」

「私に聞くな」

そう言っただけで一人別館に向かってしまった。

「引張っていいよな？」

「いいんじゃないか？」『引張ってください』って書いてあるし
「ウサミミを引張ったらすっば抜けて転んでしまった。」

「な、なにをしてるんですの?!」

「おや、セシリア」

「いや、ウサミミを引っこ抜いてな」

「……………はい？」

その顔は「訳が分からない」という表情だった。

まあ、そうなるよな。いきなり「ウサミミを引っこ抜いた」なんて
言われたら……………

キィィィン!!

上空から何かが高速で落ちてきた後、地面直撃した。

ドカー……………ン!!

地面に刺さっていたのがニンジンだった。

「あつはつはつは！ 引つかかったね、いつくん!!」

「…………… 東お姉ちゃん、もうちょっと普通に登場しようよ」

「全く、お前は普通に登場が出来んのか？」

「あれ！？ いつの間にか私に味方がいない!!？」

「久しぶりだなあ、霞」

「皇牙お兄ちゃん!!」

俺達そつちのけで、なんか独特の雰囲気を作っていた皇牙と束さんと小さな女の子だった。

「やー、ほら、私、この前ミサイルで飛んでたらどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね!! 学習したんだよ!!」

「撃墜される」

「撃墜されちゃってよ」

「…………… 酷いよ!! 二人とも!! とところでいつくん箒ちゃんはどこに行つたのかな？ さつきまで一緒だったよね？」

「…………… ええと、箒なら一人でどこかに行きましたよ？」

「私が開発したこの“箒ちゃん探知機”すぐ見つけるよ、それじゃあね〜!!」

凄い速さで箒の方に向かって行った。

（皇牙 side）

俺は着替えた後、薄い上着を着て霞の元に戻った後、霞を連れて浜辺に向かった。

霞は「アツい、アツい」っていいながら飛び跳ねていた。

ちなみに俺は素足で立っているがアツいと感じない。

だって、俺、半分龍ですよ？

これより数億倍アツいの食らったことがあるんだから、これで根を上げたら意味無いっしょ？

さらには、俺は日焼けもしない。

その辺は体質がおかしくなっているので、全く黒くならない。……

…龍のプレス以外は。

さすがにアレを食らったら、俺でも丸焦げまではいかないけど、黒くはなる。

海で遊んでいる女子はこちらを見た後、声を掛けようとしていたが………霞の姿を見た後、困惑している。

一夏は何故か、鈴を背中に乗せながら、浜辺に向かって泳いできているが………まあ、多分、鈴が溺れかけたんだろう。

ということであらうらしき人物を引っ張っているシャルに声を掛けた。

「よう、シャル。そして、多分ラウラ？」

「あ、皇……牙………！？ えっと、そちらの女の子は？」

「私の名前は天龍覇 霞です！ この人が私のお姉ちゃんなの？」

お兄ちゃん」

「ああ、そつだよ。シャル、ほら言っていたらどう？ 義妹が居るって………」

「あ、ああ！ この子が？」

「そうだ。一応挨拶してやってくれ」

「うん。霞ちゃん、私がキミの義姉になる、天龍覇 シャルロットです。よろしくね？」

「よろしく！ シャルロットお姉ちゃん！！」

「お、お姉ちゃんか。姉妹なんて初めてだからどうしたらいいか、わからないよ」

「まあ、普通でいいんじゃない？」

「普通でいいよ〜〜」

霞が若干、俺の影響を受けている気がするのは何故？

「と、ところで、皇牙はなんで上着なんか着てるの？」

「まあ、ちよつとな……………」

見せられねえって。

なんせ背中に爪痕とか噛みつかれた痕とか、プレスで灼かれている痕が生々しく残ってるんだから、しかも横腹には昔の傷痕で鮫にバツクリと喰われている痕もある。

前の方にも色々あるんだ、これがな……………」

鎖骨の辺りに銃痕とかもあるし、これもどれも全部前の世界の戦いで付けたモノだ。

女神は「消しましょうか？」って言ってきたが、忘れない為に残しておいた。

というわけで、こんな傷痕のある体を見せたりしたら、女子高校生には耐えられる筈がない。

だから、上着を羽織っている。

その時、不意に声を掛けられた。

「あ！ こゝくんだ〜」

「本音か」

「およろしく？ こちらの女の子はだ〜れ〜？」

「俺の義妹の霞だ」

「〜」 「義妹!?」 「〜」

「義妹なんて居たの〜？」

「言っていないから、知らなくてもしょうがないと思っぞ?」

霞は周りの女子達に「キャ〜、カワイイ〜!〜!」と喋って抱きつかれている状態だった。

「そう言えば、こゝくんの部屋はどこなの?」

「千冬の隣の部屋。ちなみに一夏は千冬と一緒に部屋だ」

「〜」 「え?」 「〜」 「〜」

コイツ等、絶対押しかけようとしたな。

「…………… 鬼の寝床に行って捕まりたくないし」

「誰が、鬼だ!」

ドンッ!

そんな音が聞こえた。いや、空耳とかじゃなくて、マジで。

「よっ、千冬」

「おう。……なんで上を着てるんだ？」

「色々あるんですヨ……」「バシャン！」………な?!」

ウォーターガンを本音が隠し持っていたらしく、思いっきり水を被った俺は上からびっしょりと濡れた。

「ごめんね〜、ご〜くん」

「………脱がなきゃダメか？」

「別にいいだろう?」

「………ハア〜、後悔するなよ」

そう言った後、上を脱いだが見事に予想通りの表情をする千冬達。だから、脱ぎたくなかったんだよ。

「………皇牙、なんだその傷痕は?!」

「昔の傷だ」

「………この横腹の傷はなに？」

「これは昔、沖合で泳いでいたら、ホオジロザメに襲われてな。回避をしくじった時にバツクリと横腹を喰われた。まあ、治ったが多少は元に戻らなかつたな」

「………この鎖骨は？」

「マフィア達との銃撃戦のときに、撃たれた」

「……………後ろも凄い傷痕だぞ!？」

「これ、爪痕?!」

「わっ、凄い……………」

「これを見せたくなかったから、上着を着ていたんだが……………まあ、もういいか。俺は少し泳いでくるからな。シャル、霞を見といてくれよ」

そうして、海に向かうが、途中ですれ違った女子達も上の傷を見て、声を掛けるのに躊躇っていた。

〈皇牙side out〉

〈千冬side〉

そう言えば、皇牙の事を私は何も知らないな。

ただ、束との知り合いである。ということだけ……………

それにあの傷……………

現在、年が20歳と言っても、例え昔につけたとしても、あの傷はだいぶ古い。

「……………これは、問い詰めてみないと分からないか…」聞いてみなくちゃ! 「ん?」「」

「シャルロット?」

「織斑先生?」

一分間ほど見つめあったあと……………

「お前もか」

「そういう織斑先生もですか？」

「……………ああ、聞き出してみるか」

「……………はい」

〈千冬side ou〉

ここに妙な協力体制を築き上げたタッグが完成した。

オーシャンス・イレブン（後書き）

次回は束が再び登場！

そして、シャルと千冬は皇牙の体や出身について、疑問抱き始めます。

意外な一面・・・（前書き）

ご感想をゆや様ご感想有難うございます！

では どうぞ！

意外な一面・・・

（皇牙 side）

よう、皇牙だ。

あの後は無事に泳ぎ終わり、平穩そのもので夕食までいき、これまた豪華だった。

そして、今現在何故か俺は千冬とシャルに拘束されてる。

……………どうしてこうなった？

「で？ なんてこうなったわけ？」

「「昼間の傷について聞きたい」「」

仲いいね、キミたち。

だが、それは絶対に言えないし教えない。

束のときは流れる的に教えたが、この秘密がバレたら、世界中の研究者共はこぞつてやつてくるだろうよ。

まあ、その時はやってきた国の研究者全員、皆殺しだけどね。

「 人（？）には言いたくない秘密が一つや二つあるもんだ。

喋りたくない秘密だってある。違うか？」

「確かにそうだが……………」

「僕の際は聞いてきたのに……………不公平だよ皇牙」

「それはそれ、これはこれ。だ」

そう言うとシャルは顔を膨らませて、怒っていた。

不公平かもしれないが、世界の勢力図をひっくり返すレベルの戦闘力なんだよ。
そう簡単にホイホイと喋れるか。
というかな。

「オイ、そこで聞き耳立てている五人！ 入ってこいや」

そう言うと、ドアの向こうでドタドタと音を立てていたが、そこは千冬とシャルがこれまた絶妙なコンビネーションで全員を捕縛していた。

「……………どこから聞いていた？」

「“昼間の傷”から」

「つまり、最初から聞いてたわけか……………」

「べ、別にいいじゃない！！ アンタの秘密なんかそれほど重要なモノじゃないんでしょ！？」

「鈴、テメエは俺に喧嘩売ってんのか、あ？ いつでも買ってやるから、表出るや」

「落ち着け、皇牙。つたく、ほれ」

千冬は冷蔵庫からビールを取り出して、渡した。
その後、千冬は厄介払いする為に一夏を遠ざけた。

「一夏、風呂に入って来い」

「え、なんで？」

「ちょっと汗臭いぞ」

「……………なら、しょうがない。入ってくるよ」

そう言っつて、一夏は自分の部屋の風呂に入っつていった。

「場の空気も悪いから、別の事を聞くが、お前等はアイツのどこがいいんだ？」

千冬も冷蔵庫からビールを取り出し、鈴達に適当に見繕つて飲み物を渡していた。

アイツというのは、間違いなく一夏の事だ。

「……………」

四人は黙る。

「想いを語れず、黙るか……………ウブだねえ」

「な、なによ！ アンタには語れる相手が居るつて言つもの!？」

「そ、そうですね!! どうなんですか!？」

「居たらいいねえ。……………本当に居たらだけどね」

「口だけが、皇牙」

「いやいや違うんだよ。俺みたいな奴を好きになる女が可哀想だ。つて言つてんの」

「皇牙、貴様、外道だな」

「“外道”か……。幾分、“外道”の方がマシだな」
「……………皇牙？ お前は何言ってるんだ？」
「なに簡単だよ、千冬。俺は“外道”とかいう括りに入らないんだよ。何せ俺は
“化物”だからな」

俺は、月を見ながら語った。

（皇牙 side out）

（千冬 side）

皇牙は回りくどい言い方をしながら、意味深なことを言ってるような気がした。

そして、次の一言がもっとも驚いた一言だった。

「何せ俺は

“化物”だからな」

皇牙はこちらに顔を見せなかったが、その横顔はとても寂しそうな表情だった。

なんで、コイツはこんな寂しい表情を出せるのだから？
年の割には、似合わない表情だ。

「皇牙、お前……………過去に何かあったのか？」
「……………」

皇牙は答えない。

だが、その沈黙が答えになっていた。
沈黙のなか、ラウラが言った。

「オマエにとってはそれほどのものではないのだろうか？」

「……………ラウラ、黙ってなよ」

私が黙らせようと思ったが、それよりも早くシャルロットが割り込んだ。

「何故、シャルロットが怒ってるんだ？ 私は皇牙に言ったのだぞ？」

「……………別に怒らなくてもいいぞ？ シャル、ラウラの言う通り“それほど”なものじゃないしな」

皇牙は軽く笑っていたが、その笑みはすぐに造られた笑いだと分かり、しかもとても重いことだと分かった。
シャルロットもすぐに分かったようだった。

「さて、明日は大変だから、お前たちはもう部屋に帰れ」

「なんかあるのか？」

「まあ、色々あのバカがやらかしたようだな」

「おk、把握した」

六人を帰らせた後、最後に私は聞いてみた。

「皇牙」

「ん？」

「……………いずれ、話してくれるよな？」

「話せるまでに、俺が追われてなければな……………」

「……………どういう事だ？」

「早く寝ろ」

バタンッ！

皇牙は私を追いだすようにドアを閉めた。

どういう意味なんだ、それは！！

そうして、夜は明けた。

〈千冬 side out〉

〈皇牙 side〉

うい、合宿二日目だ。

あの夜は、どうかしてたな。

なんで、あんなこと語ったんだろ？

まあ、いいかそんなこと。

二日目の合宿は、ISの試験装備の運用なんだって。

普通はね？ 俺のは使っていない武器をここで試し撃ちだよ。

ということ、専用機持ち以外はすでに色々やっているが、俺達は未だに動いてない。

そこに堂々と乱入者登場。

「ちーーーーーちャーーーーん!!!!!!」
「……なんで、あれで稀代の天才なんだ。おかしいだろ」
「それについてはとてつもなく同意せざる負えない」

千冬と俺は同時に溜息をついた。

その後、束は千冬に飛びつこうとしたが、それを千冬は華麗にアイアンクローでキャッチした。

「やあやあ! ちーちゃん!! さあ、再会の祝いとしてハグハグしよう!!」

「黙れ、バカ…… (それに抱かれるなら、皇牙に……) 」
「なにか聞こえかけたけど、容赦がないアイアンクローだね!!」

そついうアンタもそれを抜け出すことが出来る時点で十分おかしいぞ?

「どうでもいいから、束、他の生徒に挨拶しろよ。動き止まってんだろ?」

「こーくんの頼みなら仕方がない。私が天才の束さんだよ! はい、終わり」

「取り敢えず、お前をシバいていいか?」

「酷いよ、こーくん!! 挨拶したじゃん!!」

「アレを挨拶と言えるお前が凄いわ、ボケ! つーか、何しに来たんだよ?」

本当にコイツは何しに来たんだ？

「ちよつと、箒ちゃんにプレゼントだよ！！」

「何を？」

「私特製の“IS”だよ！！」

ふーん。……………？

「あ？！ つてことは専用機か！？」

「そうだよ！ では、上空をご覧あれ！！」

そついうと空からコンテナが降って来た。

ドス~~~~ン！！

砂埃を上げながらコンテナは開き、そこには 真紅の鎧があった。

「これが箒ちゃんの専用機！ 『紅椿』だよ！！」

そこからは束が箒に紅椿に座らせて、フィッティングとパーソナラ

イズをパパッと終わらせていた。

「この『紅椿』は全スペックが現行してるISを上回るISだよ。一つを除いてね」

「……………どのISだ、それは？」

「ちーちゃん、そこに居るじゃない」

束は俺の方に視線を向けてきた。釣られて専用機持ちもこちらを見
てくる。

「こーくんのISは色々（・・・）と規格外だしぶっ飛んでるからね」

まあ、俺自身の力は使っていないからねえ。

使ったら地形は変わるし、下手すりゃ国が一つ滅ぶ。

「視線を向けられても喋らねえし、見せねえよ？」

「まあ、私は勝手に覗くけどねー」

「絶対に見せるなよ？ 見せたら分かってんだろっとな？」

「分かってるよー、さすがにこーくんを怒らせたくはないしー」

そこに山田先生が慌てて走って来た。

「織斑先生！！ これを……………！！！」

なにやら話しあっていた後、手を鳴らした。

パンツ！

「全員聞け！！ これよりIS学園教員は特殊任務行動に入る。専用機持ち以外はISを片付けて、戻れ！！」

女子全員はざわつく。

それを見兼ねた千冬はさらに一喝した。

「さつさと戻れ！！ 以後、許可なく出た者は我々が拘束する！！」

「「「は、はいっ！！！！」」」

「専用機持ちは私と共に来い。皇牙、織斑、オルコット、シャルロット、ボーデヴィツヒ、凰。それと、篠ノ之も来い」

「……………はい！！」

篤は呼ばれたことに嬉しくなったのか、一番声を高く上げた。コイツ、分かってんのかね？ 戦場は遊びじゃないんだぜ？

まあ、いいや。なにかやらしても俺は助けねえ。

一度、地獄を味わってもらった方が楽だし。

そっ思いながら、俺達は千冬に着いていった。

〈皇牙 side out〉

内容を聞いたところ、ISの暴走だって………やってらんねえ。

意外な一面・・・（後書き）

まさかのシリーズで半分を占めてしまった。

次回は一夏達 VS 『シルバリオスヘル銀の福音』です。

皇牙は出ません。

極寒の地にて・・・(前書き)

連続投稿なんだぜ!?

極寒の地にて・・・

（皇牙side）

皆、重い表情で千冬の言葉を聞いている。

俺は通常通りだけどね。

「……………にして、って皇牙聞いているのか!？」

「聞いているよ、千冬。……………東、居るのは分かっていたから出て来い」

「東など、どこにも……………」
「どうして分かったのかな？」……………な
っ!？」

東は天井から出てきた。

お前が普通に登場出来ないのはなんとなく分かってたし、さっきから上でドタドタうるさいんだよ。

「こーくんはどうして分かったの？」

「……………人より聴覚がいいだけだ」

「本当？」

「……………（ギロリ!）」

「はいはい、分かったよ」

睨んだら、何も言わなくなった。

「まったく、話を進めるぞ。教員は学園の訓練機を使って、海域及び

空域を封鎖する。よって、本作戦の要は専用機持ちのお前達にやっ
てもらおう」

絶対何かしらのトラブルが起きるフラグだと思っていいんだな？

「一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「アプローチは何回だ？」

「おそらく一回だな。この機体は今も超音速飛行を続けている」

「なら、一撃必殺で落とすしかないか……………」

そついうと皆、一夏の方を見る。

「お、俺?!」

「お前しかいないだろう、一撃必殺の武装なんて持ってるのは」
「でも、どうやって敵のところまで運ぶんだ？」

一夏は素朴な疑問をぶつけると、セシリアが手を上げた。

「私なら音速飛行も何度かやってますわ！」

「オルコット、音速飛行の戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「それなら 「ちーちゃん!」……………なんだ、束？」

「それなら断然、『紅椿』がいいんだよ！」

そこから東先生の解説会が始まったので、俺は寝た。

（皇牙 side out）

（千冬 side）

事態を説明している私は皇牙を横目で見てみると、いつも通りの表情だった。

どうせ、「やってらんねえ」とか考えているのだろうと思った。

一応、注意した。

その後、私でも気付かなかった東の存在に皇牙は気が付いていた。

東はどうして分かったのか、しつこく聞いていたが皇牙の一睨みでそれ以上は追撃しなくなった。

「いや、海で暴走と言えば、あの十年前の事件の『白騎士事件』を思い出すね」

……………コイツ、あきらかにワザと言ったな。

「でも、それよりも奇妙な事件があったんだよねえ……………つい二年前に」

「……………なんだと？」

「非公式だけどね、某国のとある施設がね。一夜にして消えたんだよ」

二年前……、私がドイツで教官をしていた時だな。
たしか、その時辺境に赴いた任務があったな。

「……それで？」

「そのとき、何故か隕石やら業炎の塔が突然発生してね。その辺一帯が更地になってしまったんだって！！ 不思議だよー」

束は不思議そうに言っていたが、どこかひっかかるような言い方だった。

まあ、それは後にして

「東、『紅椿』の調整にはどれくらいかかる？」

「すぐに終わるよ」

「お、織斑先生！？ わたくしとブルー・ティアーズなら必ず……」

……！！

「そのパッケージは量子変換インストールしてあるか？」

「そ、それは……これからですが……」

「なら、『紅椿』でやるぞ。では、本作戦は織斑・篠ノ之・皇牙の三名で行う。作戦開始は30分後。各員、準備に掛かれ」

「ちよつと待て！」

「……なんだ、皇牙？」

「おかしいと思ったのは俺だけか？ なんて俺の名前が入ってんだよ……」

眠っていた皇牙は起きて、すぐさま反論して来た。

「お前は所謂“サポート”要員だ」

「悪いが俺は出ねえよ？」

「なんだと？」

「いや、だつてさ、戦場を“遊び”だと勘違いしてるバカのサポートなんかしてたら、こつちが命を落としかねないし。万が一その二人が仕留め損ねたら、俺が一人で引き受けさせてもらおう。その時は束、衛星の映像とかその辺を全て止める。戦いを映すな、さらに教員も入ってくるな。邪魔だ」

「わかつたよ〜」

「そんなこと出来るか!!」

「じゃ、警告と忠告だ。勝手に入ってきたり、興味本位で覗いて死んでも、俺は責任を取らないからな？」

そう言つて皇牙は退室した。

皇牙の身を心配して言つてるのに、全て薙ぎ払われてしまった。たまにこのような壁を感じる。

私と皇牙の間に何か大きな壁が引いてある感じだった。心にしこりを残しながら、私達は作戦の準備に急いだ。

〈千冬side out〉

〈一夏side〉

俺達は海岸に居る。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

俺と箒は声に出して発動させたが、皇牙は無言のまま発動させていた。

皇牙のボディの色がまた変わっていた。

今のボディの色は上が上半身は『銀』で下半身は『金』だった。

「皇牙、お前のボディって色変わるの？」

「変わるぞ？ 今、このスタイルは『繚乱』っていうんだよ」

「一夏、そんなことはどうでもいい。私の肩に乗れ」

「お、おう！」

箒はバツサリと会話を絶ち切り、作戦の準備を開始した。

移動などは箒の『紅椿』が行うので、俺はそれに乗っかる形となっている。

皇牙は戦闘区域から少し離れて、見守る形となった。

やはり、箒の姿をや口調を見ると、浮ついたことが嫌でも分かっ
てしまう。

「箒、あのな」

「安心しろ、私がちゃんと運んでやる！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

皇牙は黙っていたが、その表情は冷めていた。

そして、三人は飛びあがった。

飛んでる途中、オープン・チャンネルから千冬姉の声が聞こえる。

『二人とも、今回の作戦の要は一撃必殺だ。短期決戦を心掛ける』
「はい！」

返事をした後、皇牙はある程度進んだ後、止まった。

「一夏！ 見えたぞ！！」

空中に佇んでいた『銀の福音』はこちらに気が付く前に俺は零落白夜で斬りかかった。

「うおおおおおおお！！」

だが、その攻撃は空を切り、福音は後退しながら『敵意』を持って応えた。

『敵機確認。迎撃モードに移行。《銀の鐘》、稼働開始』

その後、『銀の福音』の攻撃、回避、機動性は凄まじく俺と箒の同時攻撃や挟み打ちを仕掛けても回避され、銀翼の砲口による高速反撃でこちらは追い詰められていった。

「La……………」

甲高いマシンボイスが聞こえた後、全方位に向けて爆ぜるエネルギー弾が放たれた。

俺と箒はなんなく避けたが、ハイパーセンサーにある物体を発見し、俺は武器を捨てて、急いでそちらに向かった。

「ヤバい！！」

「一夏、そっちは真逆の方向だぞ！？」

「船が居るんだ！！ くそ、密漁船か！！」

「そんなやつらは ……！！」

箒は多分「放っておけ」とでも言いたかったんだろう。だが、俺が止めた。

箒はその後、武器を捨てて顔を覆い隠した。

それに応えるように、紅椿の具現維持限界になったのが見えた。

俺は放たれたエネルギー弾と箒の間に高速で割り込み、箒が髪の降りた姿を見てから意識を失いつつ、箒と共に海に墜ちた。

意識が失う前に皇牙のプライベート・チャンネルので一言言った。

『愚か者が』

誰に向かって言ったのか分からなかった。

「一夏side out」

「皇牙side」

俺の目の前で一夏と篤が両者撃墜したのを確認した後、俺はゆっくりと『銀の福音』の前に出た。

「千冬、密漁船と一夏達の回収を急がせる。束、映像を全て止める、音声もだ」

「今やってる!」

「はいはい」

俺は少しだけ両足を海に浸けて、海中に《リヴァイアサン》を放った。

《リヴァイアサン、俺の合図とともに直径15mはある水柱を手当たり次第、噴き上げろ》

《そのぐらい、軽いものだな。その後は?》

《急いで俺の中に戻れ。上げ終わったら、即座に全てを凍らせて、この場に極寒の地を造る》

「皇牙、終わったぞ!」

「教員もココからは入ってくるな、束は?」

「妨害完了。じゃ、頑張ってるね? こーくん」

その後、念のため通信を確かめたが、音信不通だった。

《やれ！ リヴァイアサン！！》

合図とともに「ボオン！！ ボボオオン！！」と水柱が突如噴き上がり、一瞬だけ局地的な雨が降り注ぐ。

「……………行くぞ。

凍れ」

ヒユウウウウウ~~~~~

パキキキキ！！

カチコチ……………！！！！

バキバキバキキキ！！

噴き上がった水柱は急激に冷え込み、全てが凍り、外界をシャットダウンするように氷の壁が出現した。

『……………！！？』

福音は驚いているのか分からなかったが、何もしてこなかった。俺はウカムルバスを顕現させた。

極寒の地に眠る、崩竜よ

刻が来た

今ここに目覚め、顕現しろ……

目の前の敵を《叩き潰せ》！！

そう声高く、言い放つと俺の前に出現した。

《なんだ、主。俺に用か？》

《目の前の敵を潰せ》

《委細承知した。我が力で悉く叩き潰そう！！！！》

その後、俺も《クシャルダオラ》を憑依させて、鋼質化させた。
ウカムルバスは立ち上がり、大音量で咆哮した。

《ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!》
「さあ、『銀の福音』よ。お前はこの極寒の地で生き延びることが出来るかな？」

そうして、俺と福音の戦いは始まった。

（皇牙side out）

極寒の地にて・・・(後書き)

今回出てきた龍達は《シルバースル》、《ゴールドルナ》、《リグ
アイアサン》、《クシャルダオラ》、《ウカムルバス》です。

戦闘曲は次回もウムのテーマで。

完全龍化（前書き）

戦闘曲はそのままです、お楽しみください。

完全龍化

極寒の地で『銀の福音』は俺たち目掛けて、爆ぜるエネルギー弾を無限に放つがその全てが周りの氷柱にブチ当たり、そこから海水が飛び出る。

だが、その海水もウカムルバスにより急速冷凍され、さらにフィードルドが変化する。先程からその繰り返しだった。

そして俺は、急速冷凍で出来たつららや氷塊をクシャルダオラの風力で福音目掛けて飛ばしまくったり、蹴り飛ばしていた。

福音は奇抜な動きで回避したり、エネルギー弾で砕こうとするが砕いた後も氷の礫が風の力により再び福音に襲いかかる為、福音は回避するしかなかった。

福音にとってこの地は天敵とも呼べるほど、相性が悪かった。

その時、ウカムルバスが反対側から氷雪のプレスというよりレーザーを放った。

俺はなんなく回避し、福音はなんとか回避できたが左足が若干凍っていた。

ウカムルバスのプレスは氷の壁を貫き、千冬達が居る花月荘の前の浜辺まで届いた感じだった。

《ウカムルバス》

《主よ、なんだ？》

《オマエの重厚な尻尾でその辺に出来ている氷柱やら氷剣山を福音に飛ばせ、それと同時に俺も大剣でぶった切る！》

《了解した……………行くぞ！！》

ブンツ……………

ガラ……………ガシャツ！

バリバリ……………バリン！！

氷柱が崩れて、福音に襲いかかっていた。

福音は回避していたが、目の前に『ダオラ＝ディグリベグ』を振り降ろしてきた皇牙が居た。

「オオオオオオオオオオ！！！！」

ガキインツ！

福音は後翼のスラスタ―と右手で防いでいたが、上空から降り降ろされた大剣に重力の加速もあって、福音は凍った大地に叩きつけられた。

く千冬sideく

束の妨害により、衛星も音声も映像も全てが映らず、モニターにはノイズ音しか聞こえなかった。

一夏は篠ノ之を庇って、全身重体で今も目を覚ますことは無かった。

「束！ 妨害を解け！！」

「ダメだよ、ちーちゃん。こーくんが言ってたでしょ？ 『覗くな』って」

「だが、アイツ一人じゃ福音には勝てんぞ！？」

「勝てるよ」

「何故言い切れる？」

「こーくんが本気になれば世界を潰すことなんか軽いことなんだから……」

今、とんでもない発言をしなかったか？

本気になれば“世界”を潰すことが簡単………？

「だから、映像も映さないんだよ。彼を巡って戦争が起きかねないから、もしこれをどこかの国に覗かれたりしたら、絶対に何かしらのトラブルが起きるし、下手したらその国を消すかもしれないんだよ？ ある意味私は、世界の安定に貢献しているのさ」

束があそこで起きていることがまるで分かった様に言っていた時、ラウラが入って来た。

「教官！」

「なんだ！ 今取り込み中だ！！」

「すみません！ ですが、外を見てください！！」

「なんだ、一体……！？」

その後、私達は花月荘の前の浜辺に出た。

ビュウオオオオオオオオオオ！！！！

「なんだ………これは！？」

目の前には夏の季節とは思えないほど、真逆の現象が起きていた。沖の辺りの先から、海が全て凍っていたのだ。さらに奥の方を見ると、吹雪いていた。

「………専用機持ちは再び集合！！ あと訓練機を一機、浜辺に持ってこい！！」

「………何する気？」

「私もあそこに行くつもりだ」

「ボクの忠告を聞かなかったの？」

「それでも行くぞ、私は！」

「そう………なら、残酷な真実を知ればいいよ。………ああ、そう言えば一つ言っておくよ」

「………なんだ？」

「 殺されないようにね？」

束は微笑みながら、皇牙の妹のところに向かった。そして、専用機持ちと訓練機は集まった。

「全員、今回の目的は視察だ。絶対に手を出すな！」

「「「「はい！」「」「」「」

「では、行くぞ！！」

そうして、私達は皇牙と束の忠告を無視してまで、前に進んだ。

（千冬side out）

「 往くぞ

！！！！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

ISも『憑依』も全てを解除し、人間の姿から“完全龍化”を始めた。

そこから皇牙の姿はがらりと変わった。

両腕は巨大な氷塊を簡単に碎ける程の分厚く強靱な爪が生え、足は

完全龍化（後書き）

まんまウカムルバスにチェンジです。

だけど、体長が25m近くあります。

多分次回で福音戦は終わりです。

『パンドラの箱』(前書き)

福音戦、終わりです。

感想をくれた。

ゆや様有難うございました！

それには福音も驚き緊急回避を行う。

下手をしたら、押し潰されていたかもしれないからだ。

回避された崩竜はすぐさま福音の方を振り向き、口から氷の大地すら抉る氷雪のブレスを放った。

ズ・ガガガガガガガガガ・・・!!!!

福音は軽く避けているが、それだけではダメだった。何故なら抉った氷塊やら氷雪がブレスの左右を襲うからである。しかもスピードが早い為、迎え撃つなんて真似をしたら、次々やってくる氷塊に氷雪にぶつかる為、掠ることなく避けるしかなかった。

シャルside

今、ボク達は織斑先生の指示の元、義兄さんと福音が戦ってる場所に向かっているが、奥に進むに連れ、寒くなってきた。

「……………っ！！ 寒い！！」

「もう少しで皇牙と福音の戦闘区域だ！！」

ラウラは寒さに耐えながらも声を出した。
そうしなければ、寒さにやられてしまいそうだったからだ。
ISは操縦者を“IS”の攻撃には護るが、自然は護らない。とい
うより護れない。
なぜなら、攻撃しないからだ。
その場に居るだけで、操縦者を襲える。
何せ相手は“自然”なのだから……………。

「着きましたわ！　ここが戦闘区域の筈です!!！」
「全員、私から離れるなよ!!！」
「……………はい!!!!」「……………」

『キィアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!』
耳を思わず抑えたいくなるような大咆哮が聞こえ、声がした方を見て
みると……………ボクたちは信じられなかった。
目の前の光景が……………。

「なに……………アレ……………」
「……………」

そこには白くそびえ立つ塔のような生物と福音(?)らしきISが戦
っていたが、傍からでも見ると分かる程の一方的な戦いとなってい
た。

「シャルside out」

福音は地に墜ちて、ISも解除された。

今、この戦いの終わりが告げた。

〈千冬side〉

福音のISが解けて、地に墜ちた。

白い生物は追撃を掛ける風に見えたが、ゆっくりと近づき福音の縦者を寒さから護る様に腕の中に抱え込んだ。

だが、その白い生物は私達の存在に気が付いたらしく、目つきが『敵意』を持っていた。
本能的に全員に回避させるように怒鳴った。

「全員、今すぐ回避しろ!!」

「「「「「!?!?」「」「」

バツ………

ポツシャッーン!!

白い生物は顎を氷の大地に差し込み、掘り出す要領でこちらに飛ば

してきたのであった。
あんな氷塊が直撃したら、重傷を負うぞ！？

「全員、絶対にアレに当たるなよ！？ 死ぬと思……………？」

その時、その白い生物は白く包まれ始めていた。
それにつれて、天候も回復していき太陽が見えた。
白い生物が消えた後、そこに現れた人物はなんと……………

「来るなって言った筈なんだがな……………なあ、千冬？」

「皇……………牙……………」

あの皇牙だった。

皇牙は着ているコートを福音の操縦者に着せて、抱え込んだ。

「アレはどういうことだ…………… 説明しろ！ 皇牙！……………」

私の声は震えながらも、この空に響いた。
〈千冬 side out〉

まったくもって、この行動はまさに『パンドラの箱』だよ。

『パンドラの箱』（後書き）

ヤベ・・・一夏の雪羅に移行と紅椿の絢爛舞踏の発動させてねえ。

どうにかはしますがね（笑）

役者は揃い始める・・・（前書き）

スマン、次回から説明会です!!

どうしてもこの人達を挟みかった。

役者は揃い始める……

（皇牙side）

現在、氷の大地にて……

さて、この状況はどうしようかね？

千冬だけではなく、セシリア、鈴、箒、ラウラ、シャルはどうして
いいか分からず、ただただ浮いてるだけだった。

「……………っ……………んう？」

「おや、もうお目覚めかい？ まったくこの世界の科学……………束の
開発した“IS”は凄まじい発明品だよ」

「……………あ、あな……………た……………は？」

「アンタが相手したあの白い竜だよ」

「……………！？」

「まあ秘密は口外しないでくれ、後々が面倒なんでな」

「……………」

そうして、また黙った。

いや、気を失ったといった方が正しいか……………。

まあ、命があつてよかったよ。

「取り敢えず、ここはお前たちにもキツイ環境だし、帰ろうかね」

俺はもう正体もバレちまったので躊躇い無く、部分龍化を始めた。今回は脚も龍化させ、翼を生やした。モデルはバハムートの翼。空を飛ぶ速さについてはコイツが一番早い。

この姿を見て、再び驚く千冬達。いちいちこんなことで驚くなよ、こんなことで驚いていたらこの先が持たないぜ？

「先に帰らせてもらっぞ？」

バサツ・・・バサツ・・・
ギョッン！！

「……………なっ!？」

千冬達は驚く、この世でもっとも速い“IS”が追い付けない程のスピードを出していたからだ。羽ばたいてから、数十秒で花月荘の前の浜辺に到着した俺は姿を元に戻しながら、足の付ける所の海位まで高度を下げ、完全に元に戻った時には波打ち際まで来ていた。

「やあ、こーくん」

「東か…………… どうせ見てたんだろ？」

「まあね。それにしても凄いね、あの姿は」

「……………千冬達を止めなかったのか？」

「いやいや、止めたし。忠告もしたよ？　だけど、振りきっちゃってねえ」

「ハア……………。知らない方がまだ幸せだっただろうに……………。

世の中は『優しい嘘』と『厳しい現実』しかねえのによ。

まったく持って人間は愚かだねえ」

「それはそうと……………こーくん、ちーちゃん達は？」

「龍化で飛ばしてきたから、もうすぐ来るんじゃないか？」

そう話してたら、千冬達がようやく来た。

いかんいかん、つい口調が変わっていた。

まあ、200年間も生きてりゃ口調も変わりやすくなるか……………
……………。

そこに束が意地悪く千冬達に声を掛ける。

「やあ、『残酷な真実』を見せ付けられた、愚かな人達。気分はどうだい？」

「束……………お前は真実を知っていたのか?!」

「それはそーだよ。こーくんはこの世界に来て最初に会ったのが私なんだもん。いやあ、アレは衝撃的な出会いだったね！　なんせ、高度6000m近いところから人が落ちてきたのに、打ち身も打撲もしてないんだよ？　まず人間として疑うよね」

あー、アレね。

俺も困った。

なんせ、転生したら空の上ってのはまさに予想GUYだった。

そして、文字通りの衝撃的な出会いだった。

「ところで、束。お前、覗き見していた映像を誰かに送ったな？」

「……………なんで、分かったの？」

「伊達に二百年近く生きちゃいねえんだよ！ 誰に送りやがった！？」

「えつとねー、IS学園の生徒会長さん」

「うわあ。また厄介な奴に送りやがったな！！」

「いいじゃん 秘密は多い方が」

「……………メンドクサイし、説明は帰った後の休暇中に俺の家に来い。そこで全部話してやるよ」

千冬達は何か言いたげだったが、無視した。

俺は福音の操縦者を抱き上げながら、花月荘に向かった。

〈皇牙 side out〉

〈更識 side〉

私は今、生徒会室で一人、書類整理を行っていた。

その時、モニターに謎のメールが来た。

最初は訝しんだ。

「何かの罾かもしれない」と思い、罾解除などを行ったがなにも検出されなかった為、中身を見てみることにした。

中身はどうやら少ないテキストとビデオファイルだったらしく、テキストを見てからじゃないとビデオが開けられない仕組みになっていた。

『更識 楯無へ』

この後に見るビデオは誰にも見られないところでみてね？
ちなみにそのビデオには、キミの思い人である“天龍覇 皇牙”が
ひたすら隠してきた真実だから、覚悟を持ってみてね！！ あ、見
たら、もう楽しい日常には戻れないよ？

稀代

の天才 篠ノ之 東より』

あの篠ノ之 東が私にこんなメールを送って来たことより驚いたの
は皇牙くんが“ひたすら隠してきた真実”が気になった。
テキストを消すと、画面に『ビデオファイルのロックが解除されま
した』という告知が出た後、私は周りを見て、窓は仕切りで全て遮
った。

私は、ゆっくりとカーソルを動かしながら、そのビデオファイルを
開いた。

「皇牙くん……………貴方は……………」

“ひたすら隠してきた真実”を知ってしまった私は何も言えずに、ただ、涙だけが出てきた。

〈更識 side out〉

〈皇牙 side〉

今、俺達は帰りのバスの中だった。

一夏はあの後、無事に意識が戻ったらしい、千冬達はそれなりに喜んだが“心ココにあらず”って感じだった。

まあ、原因は俺なんだけどね。

そして、俺は今、一人だ。

というのも、俺が話しづらそうなオーラを思いつきり出しているからだ。

そう言う事で、特殊任務を聞き出そうとしている女子達は、聞きたくても聞けない状態が起きていてる。

そこに、福音の操縦者が入って来た。

「ねえ、天龍覇 皇牙君は居るかしら？」

「俺だが？」

「貴方が……………有難うね、助けてくれて。 (それと貴方のあの姿は誰にも言わないわ)」

「そいつはどうも」

「(でも、後日貴方の家に伺いたいのだけどいいかしら?)」
「(そりゃ、プライベートか?)」
「(もちろん、プライベートよ)」
「(お待ちしてますよ。えーっと……)」
「私の名前はナターシャ・ファイルスよ。……誇り高き龍皇さん」

チユツ?

ナターシャは俺の唇に軽くキスをして去った。
アイツなんで、俺の昔の名知ってたんだ?
何かの拍子に俺の記憶でも見られたかな?
「まあ、どうでもいいや」と思いつつ、後ろを見たら、それはもう
女子共が爆発三秒前って感じになっていた。

……………うぜえ。

〈皇牙 side out〉

〈ナターシャ side〉
私、『あの子』に護られたおかげであの極寒の地でも、生き延び永
えることが出来た。
そして、向かい側から目的の人物が来たのでそちらに向かう事にし
た。

「昨日の今日で動いて平気なのか?」

「『あの子』に護られたけど、彼にも護られたからね」

「この後の査問委員会では皇牙の事を話すなよ？」
「分かってるわ。「あんな力を持つてる人間が居る」なんて言ったら、世界中の研究者はどんな手を使っても手に入れてくるわね」
「これは……束が言っていたことだが、「皇牙が本気になれば世界を消すことも簡単だ」なんて言っていたからな。刺激を与えそうな出来事が無ければいんだが……」
「でも、万が一そんなことが起きたら……」
「ああ、確実に世界は“動く”……」

彼の激怒した姿がアレじゃないとしたら……
そこで私は考えるのを止めた。
想像するだけで嫌な予感しかしないからだ。

「あ、「ブリュンヒルデ」。査問委員会が終わった後、彼の自宅に伺いますので……」

「……………何故だ？」
「私も知りたいんですよ、彼の秘密。……………ああ、安心してちょうだい？　ただ、知りたいだけだから。……………それと彼は恋人とかは居るの？」

「……………何故、そんなことを聞く？」
「彼、かつこいいじゃない？　居ないなら付き合おうかな。……………では、失礼しますね」

そうして、私は“ブリュンヒルデ”に軽く頭を下げて、その場を後にした。

〈ナターシャ side out〉

さあ、世界よ。どう動く？

役者は揃い始める・・・（後書き）

まさかのナターシャさんにフラグ・・・イエーーーーーイ!!!

次回の説明会にはナターシャさんも入りますよ〜。

反省はしてる、でも後悔はしてない!!!

打ち明けた真実

（皇牙side）

あれから一週間が過ぎた。

俺の日常は平穩そのものだった。

そして、今日は三連休となっていて、あの真実を聞こうとぞろぞろと俺の家に千冬達が集まってきていた。

だが、俺は現在空港に居る。

理由？ んなもん簡単だ、ナターシャがこちらに来るからだ。

「あら、お出迎えしてくれたの？」

「場所が分からないと思つてな」

「そういえばそうね。アリガト」

この笑顔で周りにいる男たちは俺に恨みの視線を向けてるよ。
男の嫉妬は嫌だね、全く。

「じゃあ、行くか」

「ええ、案内お願い」

移動中……

移動中はなんも無かつたよ？

ただ、他の男の視線が凄まじかつたが……（悪い意味で）

「ここだ」

「貴方の家って大きいのね」

「色々事情があるんだよ。入ってくれ」

「お邪魔します……」

家に入れた後、客用の部屋に案内し、ナターシャを連れて大広間に向かった。

多分、集まってると思うんだよね。

ガラツ……

「待たせたな」

「……遅い!!」「……」

「うるせえ、人を迎えに行っていたんだ！ 文句言っんじゃねえ！」

「……人?」「……」

「私よ。“ブリュンヒルデ”」

「……だれ?」「……」

「お前等は一週間前の事をもう忘れたのか？ 『銀の福音』の操縦者のナターシャ・ファイルスだよ」

「今日はプライベート（……）で来たわ。三日間ほど、この家に在住するわ、短い間だけでもよろしくね」

「ま、適当に座れ。トウモロコシ茶、淹れてくるから待ってる」

数えてみると千冬、ナターシャ、一夏、鈴、箒、シャル、識、ラウラ、セシリア、霞、束、そして俺の十二人か。
湯呑、人数分あったかな？

〔皇牙side out〕

〔ナターシャside〕

私は今回はプライベートで日本に来ていた。

空港に降り立った私は、取り敢えずIS学園に向かおうとした時、皇牙君を見つけた。

そうして、軽い挨拶をした後、彼の家に向かう事にした。

「貴方の家、大きいわね」

「色々事情があるんだよ。入ってくれ」

事情ね。

その事も話してくれるのかしら？

最初に来客用の部屋に連れていかれて、荷物を置いた後、皇牙君についていくとあの場に居た人物たちと二人がいた。
皇牙君は「お茶を淹れてくる」と言っただけにした。

「本当に来るとは思わなかったぞ……………」

「彼にはちゃんと断りを入れておきましたよ？ 千冬？」

「皇牙め、知らせなかったな」

「それで、今更なんですけど、何故ココに篠ノ之博士が？ あと、そちらのお嬢さんは？」

気になったので聞いてみた。

「私はこーくんとは凄い接点があるからここにいるんだよ」

「私は、皇牙お兄ちゃんの『家族』だから!!」

「ということは、妹さん？」

「うん。義妹の天龍覇 霞だよ！ よろしくね、綺麗なおねーさん!!」

「ええ、よろしくね」

「……………千冬姉、こちらの女性の方は？」

「『織斑先生と呼べ!』……………と言いたいところだが、ここは職場じゃないから、よしとしよう。彼女の名はナターシャ・ファイルス。お前たちが相手をした『銀の福音』の操縦者だ」

「『ええ!?!』」

驚愕の声を出したのは、千冬の弟君とポニーテールの女の子だった。

「あの時は色々とやってしまったけど、ゴメンなさいね」

「い、いえこちらもやったので…………… お相子だと思いますから…」

……………」

そうして、あらかた話し合った後、皇牙君がやってきた。

「おー、悪いな。人数分、淹れるのに時間食っちゃった。その龍の絵が描かれている湯呑は俺のだから、それ以外は勝手に取ってくれ。」

おかわりが欲しい奴はこのポットの中にあるから、自分でやってくれよ」

そして皆は湯呑を取り、一口飲んだ。

……………ほんのりと甘いわね。

お茶と言っていたのでそれなりに苦味があると思っていたのだけど、これはそんなのが無くて、飲みやすいわ。

「さて、落ち着いたようだし。……………本題を語ろうかね。ああ、一つ言っておく、あまり質問ばかりやめてくれ。話が進まないからな」

「……………分かった（わ）（りましたわ）」「……………」

その後、皇牙君はまた一口飲んだ後、喋った。

「俺はこの世界の人間じゃない。別の世界から来た人間だ」

私は放たれた言葉に戸惑いを隠せなかった。

〈ナターシャ side out〉

〈皇牙 side〉

俺は語る。

隠してきた真実を……………

「俺はこの世界の人間じゃない。別の世界から来た人間だ」

「「「「「どういふことだ（！？）」」」」」

「どうもどうもねえよ、一夏、篝、鈴、ラウラ、セシリア。あの姿を見れば、理解出来るだろ？ この世界にあんな生物がいると思っ
てたのか？」

「「「「「……………」」」」」

「それで、別の世界から来た人間として、どうやってこの世界に
来たんだ？」

「前の世界でひっそりと暮らしてきた時に、突然、女神がやってき
てな。“転生させてあげるわ”って言って、この世界に転生して来
た」

「「「「「はあ？ 女神?!」」」」」

「言っておくがマジだぞ？」

「「「「「マジ?」「「「「「」

女神来てくれないかな、絶対信じてもらえないだろうし。

『別に、いいわよ?』

『じゃあ、頼む』

『では、私の居る領域に引き込むわ。……………えい!』

「どごよ!?!?」 「ココ!?!?」

『私が皇牙君を転生させた女神よ』

「「「「「えっ!?!?」「「「「「」

『彼の人生はね……………貴方達には比べにもならないほど、地獄を見ていてね。その人生のせいかな、人間が持つてる……………“喜怒哀楽”の“喜”と“楽”が完全に抜けてしまったの。そんな彼の人生を見たからこそ、彼にはもう一度、違う世界で新しい人生を歩んで欲しくて転生させたのよ』

「「「「「“喜怒哀楽”が欠落してる……………」「「「「「」

先程から反応してるのは一夏、箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラの六人だ。

千冬、ナターシャ、識、霞、束は黙って聞いていた。

『そこから、本人に喋ってもらおうわ』

「この世界に来た理由は分かったな？」

続きを話すぞ。十代

後半に俺は、ある力に目覚めてな……それが原因で家族と恋人を失ったんだ」

「その力……とは？」

「“龍”と話すことが出来る力だ。だが、『そんな力を持つてる奴が居る』と噂が広まれば、どの時代にも研究者共は興味を惹くものだ。そいつらはやってきて“体を調べさせてくれ！”や“キミの血を調べさせてくれ！！”などと言って来た。もちろん、全部断っていたが、ある時、業を煮やした研究者の一人が家族を人質にとつてな……」

「じゃあ……」

「ああ、そうだよ。シャル。俺は血を渡そうとしたら、母さんと父さんが『渡さずに逃げなさい！！』と怒鳴ったんだよ。俺は逃げたよ。その後、家族は容赦なく殺されたけどな。そして、その研究者

は今度は恋人の龍姫を人質に取ったんだ。その時も行っただけ……。
だけど、男はすでに龍姫を殺していてな。“首”だけを投げて寄越したんだ。あとは悪いが覚えていない……………」

『……………結果だけ言うわ。見ていたしね』

「どう……………なったん……………ですの？」

『彼は急激に力が覚醒して、その力に呼応した“龍”達が彼の体内に入り、体の構成を変えて、彼もまた “龍”になっただわ』

「じゃあ、皇牙は……………!!」

「そつだ、一夏。俺はもう人間を止めているよ」

「でも、そんなこと……………!!」

「気付いたか、シャル？俺は一度、素手で湯呑を砕いている時に破片で怪我をしたが、どんな感じだったか覚えているよな？」

「うん。すぐに怪我の手当てをしようと思って、手を見たら、傷が癒えてた」

「そつだ。龍の肉体になってから、色々と変つてな。はっきり言えば、戦艦の砲撃を受けても俺は死なんぞ」

「それなら、アンタの体に出来た傷はなんなのよ！？ 傷の治りが早いなら、それも直る筈でしょ！？」

「鈴、これは、まだ肉体が龍に成ってないときにつけた傷だよ。馴染むにはしばらく時間が掛るんだよ」

「……………時間だと？ 皇牙、オマエ、年はいくつだ？！」

「肉体年齢はざつと、24／7つてところだが、精神年齢はだいたい200年ちよつとだよ、箒」

『そして、彼は龍となつて、その研究者を殺したわ。そこから、彼は世界を回りながら、行く先々で隠れていた“龍”を保護する代わりに、力を借りるといふ相互交換の契約を結びながら、棲家を造り、あとは私と出会うまでひっそりと暮らしてたわ。 これが彼

……………天龍覇 皇牙の人生の内容よ』

「助かった、女神。あとは俺が話すから帰っていいよ」

『そう、頑張つてね。それと……………（千冬さん、ナターシャさん、シャルちゃん、霞ちゃん、更識さん……………彼を拒絶しないでね。彼がまだ貴方達に接してくれてるのは“心”があるからなの……………もし、貴方達に拒絶されたら、多分彼は貴方達の前から姿を消すわ。出会うのはおそらく“戦場”とかになりかけないから。受け入れてくれるのを願ってるわ、じゃあ、またいつか逢いましょう。私が果たせなかった願いを貴女達に託すのを許してちょうだい）』

黙っていた五人の内、束を抜いた四人とシャルはこちらを見ていた。どうしたんだ？

その時、左手を引っ張る者が居た。

グイグイ……………

「ん？ どうしたんだ、霞？」

「皇牙お兄ちゃんは、私の前から居なくなっちゃうの？」

「……………いきなり、どうした？」

「女神のお姉ちゃんが言ってたんだ。“拒絶されたら、消える”って」

「……………」

なんで、女神は俺の行動を先読み出来るんだろうね？

「どうなの？ 皇牙くん？」

識は真剣な表情で聞いてくる。

「人間は自分たちとは違う存在には忌み嫌うからな、そりゃ消えるさ」

「私達はそんなこと……」「無意識の内にするものなんだよ」……「!?」

「実質、前の世界で経験済みだ……嫌という程な。ま、安心しろ、その内勝手に消えるさ」

無人島を棲家にするか。

これからの事を考えてると、束を除いた全員が驚いた顔をしてる。どうかしたか？

「義兄さん、義兄さん!! 手! 手だよ!!」

手が………変化しとるがな、ジンオウガの右手か………しかも、肩まで変化してるし。

「あー、スマンな。完全龍化を行うと、前後一週間は体のコントロールが不調になるんだ」

「ねえ、こーくん。その右腕触ってみてもいい?」

束が興味ありげに言ってくる。

「触ってもいいが、こっそり毛とか抜くなよ？ 俺はそついう行為が大っ嫌いなんだよ」

「わかってるよ」

いつもの口調で返事をした後、こちらに寄ってきて右腕を触る。束に乗じて千冬達も触りに来ていた。

「わっ！ フサフサ！！」

「鋭そうな爪ですわね……………」

「腕が太いわね……………」

「この肩のフォームがカッコいいな！」

以外に好評だった。

恐ろしくないのかな？ 一部しか龍化してないけど、右手だけで丸太をブチ抜く程の威力持ってるんですけど？

「言うておくが、元の龍はキレたら雷を纏うぞ？」

「どうやってだ？」

「俺の世界には電撃を放つ蟲とかが居たからな、そいつらを集めて発電してた」

「……………発電！？……………」

「この際だ、俺が保護してる龍の名を全部言ってやるよ。」

ジンオウガ、シルバースル銀火竜、ゴールドルナ金火竜、黒轟竜（ティガレックス亜種）、黒角竜

(ディアブロス亜種)、緑迅竜(ナルガクルガ亜種)、黒鎧竜(グ
ラビモス亜種)、アカムトルムウカムルバス覇竜、崩竜。今言ったのは所謂、“飛竜種”と呼
ばれる奴らだ。次に言うのは“古龍種”と呼ばれる奴らだ」
「どう……違うんだ？」

「古龍” ってのは、言いかえるとそこに居るだけで様々な自然災
害が起きるもので、ほとんどがその名に冠した災害を起こすんだよ。
対して“飛竜種”は古龍と違って、自然災害とかは起こさないが、
個体数が多いんだ。中には稀にしか見ない奴もいるけどな。人が入
らない秘境とかに住んでる奴らもいることもある。じゃあ、言うぞ

……
クシャルタオラ テオ・テスカトルナナ・テスカトリオオナズチ ラオシャンロン ミラホレアス ミラバルカン ミラリッツ アマツ
風翔龍、炎王龍、炎妃龍、霞龍、老山龍、黒龍、紅黒龍、祖龍、嵐
マカツチ アルトバリオン
龍、そして最後に煌黒龍だ」

この中でヤバいのは……… って、全部ヤバいんだが、中でもヤバい
のは老山龍だな。

なんせ、歩くだけで地震が起きるし。

さすが、“歩く天災”と言われているだけはある。

「皇牙、この“古龍種”だっけか？ それ一体でも街に出したらど
うなる？」

一夏はサラッと恐ろしいことを言ってくるな、オイ。

「全部ヤバいです。軽く街が三つは吹っ飛ぶぞ？ ちなみに老山龍
はなんて出した瞬間、日本は壊滅する。これは断言できる」

「なぜ、そんなことが言い切れる？」

「あのね、箒。こいつは別名“歩く天災”って言われてんの。コイツが一步動いたたびに、地震が起きるよ」

コイツ等は自分の国を滅ぼしたいのか？

「じゃあ、黒龍、紅黒龍、祖龍なんて出たらどうなるの？」

「世界が滅亡する」

「冗談よね？」

「識、悪いがマジです。黒龍に睨まれた奴なんか、狂気に囚われたりするし耐性がなければ、御臨終だな」

ま、余程の事が無い限り解放はしないさ。

364

「取り敢えず、俺から話すことはこんなところだ」

「…………… 皇牙お兄ちゃん！ 私はお兄ちゃんのこと拒絶しないよ！

！ だって、私を救ってくれたし、名前もくれた…………… 『家族』だとも言ってくれたからね！！」

「そうか……………」

霞はどうやら思ってたことを今まで言えずにいたので、「こそぞと言
うばかりに大きな声で言ってきた。

次に千冬、ナターシャ、識が言ってきた。

「…………… 私は皇牙（君）（くん）を拒絶しない（わ）（わよ）……………」

「最初は怒ったが」
「真実を話してくれたから」
「拒絶しないわ」

上から千冬、ナターシャ、識だった。

シャルは俺の近くまで来た後、思いっきり引つ叩いた。

バチンッ！

「これで、許すよ………義兄さん」

「手、痛くないのか？」

「……………痛い」

「だろうな。凄い硬いんだよ、俺の顔」

一夏、箒、鈴、ラウラ、セシリアは未だに黙っていた。

まあ、それが普通の反応だな。

束はというと、何かを思案顔になった後、閃いたように顔を輝かせてる。

なんか、嫌な予感がする。

「ちーちゃん！」

「なんだ、束？」

「こーくんがIS学園に通い続けるように、私がIS学園で働けばいいんだよ……！」

「……………はい？」

いきなりコイツは何言ってるんだ？

「いや、だからね？ 私がIS学園で働けば、こーくんが“龍”って言う情報を管理することも出来るし、霞ちゃんも一緒に暮らせる！ 一石二鳥だよ！！」

取り敢えず、言いたいことは……………

「おい、千冬。アイアンクローをかまして、コイツの頭を元に戻せ」
「わかった」

「なんで二人はそんなに息があってるの!？」

アイアンクロー執行中……………

「ダメだ、皇牙。元に戻らん」
「なら、ガンランスの竜撃砲を当てれば、元に戻るかな？」
「いいもん！ 明日会見行っからね!!」

そう言って、どっかに消えた。

「さて、辛気臭い話も終わりにして、夕飯食っていくだろ？」

全員は頷く。

今日は何を作ろうかねえ……………

ちなみに東は夕飯が出来た時に戻って来た。

〈皇牙side out〉

明日の朝、起きてテレビを付けたら、マジで会見をやって宣言して
た。

次からメンドクセー！！

打ち明けた真実（後書き）

ちょっと、この先はオリジナルの話になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8102t/>

“龍”とIS

2011年12月11日14時59分発行